

平 成 25 年 度

農業研究本部中央農業試験場年報

平 成 26 年 11 月

北海道立総合研究機構
農業研究本部 中央農業試験場
(夕張郡長沼町東6線北15号)

平成 25 年 度

農業研究本部中央農業試験場年報

目 次

A 概 要	1
1. 沿 革	1
2. 位 置	3
3. 土 壌	3
4. 面積及び利用区分	3
5. 職員の配置	3
6. 機 構	4
7. 現 在 員	5
8. 収入決算額	9
9. 支出決算額	9
10. 新たに設置した主要施設及び備品	10
B 作 況	11
C 試験研究及び地域支援等活動の成果概要	23
D 試験研究及び地域支援等活動の課題名	32
(各部担当課題の項目)	
作物開発部	32
遺伝資源部	38
生産研究部	39
農業環境部	42
病虫部	44
企画調整部地域技術グループ	46
E 普及・参考事項並びに試験研究の成果	49
1. 平成23年普及奨励事項、普及推進事項、指導参考事項、研究参考事項並びに行政参考事項	49
2. 論文ならびに資料	50
F 研究企画・調整・情報システム・出版・広報	57
1. 研究の企画・調整・評価	57
2. 情報システムの活用	61
3. 図書・資料	61
4. 印刷刊行物	61
5. 広報活動	62
G 研修及び技術指導	64
1. 研修生の受け入れ	64
2. 技術指導	64
3. 参 観 人	69
4. 職員研修	70
5. 海外出張	71
6. そ の 他	71
H 行 事	72
I 自己点検への対応表	73

A 概 要

1. 沿 革

1950（昭 25）

北海道立農業試験場が誕生した。（11月）

- ・全国農業試験研究機関の整備総合計画に基づき、北海道農業試験場を改組し、農水省北海道農業試験場と北海道立農業試験場が設置された。いずれも、北海道の開拓とともに進められてきた農業試験研究の歴史と成果を引き継ぐものである。
- ・道立農業試験場は、札幌市琴似町に「本場」をおき、渡島、上川、十勝、北見、根室、天北の6支場と原原種農場により構成された。

1952（昭 27）

- ・宗谷支場、岩宇園芸試験地を設置した。また同年、岩見沢試験地（旧岩見沢水稲試験地）を設置し、1955年に空知支場と改称された。

1962（昭 37）

- ・江部乙りんご試験圃場（旧空知果樹園芸試験地）が道立農業試験場に移管された。

1964（昭 39）

中央農業試験場が発足した。（11月）

- ・北海道立農業試験場の拡充強化を図るため組織改正が行われた。
- ・「本場」は、中央農業試験場として9部構成に機構整備された。これにより空知支場は同稲作部となり、江部乙りんご試験地、岩宇園芸試験地を統合した。また、原原種農場は中央農業試験場に附置されることとなった。更に試験場の役割についても整理され、中央農業試験場には、道農政との有機的な連携の保持と農業技術開発の全道的な総括並びに各試験場間の連絡調整業務が盛り込まれた。
- ・同時に各支場は会計部局として独立し、本場・支場の関係が改正された。また、1962年新得・滝川両種畜場が両畜産試験場に改組され、この年主管課が農務部畜産課から同農業改良課に替ることにより、原原種農場も数えて道立農業試験場の10場体制が整った。
- ・一方、農水省北海道農業試験場との分担関係も整理され、それまで国立農業試験場長が道立農業試験場長を兼任していたのが解かれた。

1966（昭 41）

中央農業試験場が長沼町に移転した。

- ・琴似町に所存する試験圃場周辺の都市化が進み、環境が試験研究に適さなくなった。そのため1964年7月移転先を現在地の長沼町東6線北15号に決定、翌1965年移転工事に着手した。1966年に移転業務が完了し、1967年10月移転整備完了祝賀会が催された。

1968（昭 43）

技術連絡室を設置した。（4月）

- ・道立農業試験場における試験研究の企画及び連絡調整機能を強化するため、中央農業試験場総務部企画課を改組して技術連絡室を設置した。

1969（昭 44）

専門技術員を試験場に配置した。（4月）

- ・普及事業と試験研究との連携強化のために、専門技術員が中央・上川・十勝・北見各農業試験場に配置された。以後、道南・根釧・天北農業試験場及び稲作部に逐次配置された。

1971（昭 46）

岩宇園芸試験場が廃止された。

1975（昭 50）

環境保全部を設置した。（5月）

- ・前年化学部に新設された環境保全部を改組し、環境保全第一科・同二科をもって環境保全部とした。

1986（昭 61）

- ・江部乙りんご試験地が廃止された。（3月）

植物遺伝資源センターが設置された。（4月）

- ・原原種農場が植物遺伝資源センターに改組・改称され、従来の原原種生産事業とあわせて、植物遺伝資源に関する研究の中核機関として位置づけられた。
- ・土木研究室を設置した。（4月）

1987（昭 62）

生物工学部を設置した。（4月）

- ・バイオテクノロジーの進歩により、その先端技術を積極的に取り入れるため、1984年技術連絡室に設置されたバイオテクノロジー研究チームを発展的に改組し、育種開発科、微生物開発科をもって生物工学部とした。
- ・同時にそれまでの化学部は農芸化学部に、環境保全部は環境資源部に、園芸部花きそ菜科を野菜花き第一、第二の2科とし、最近の新しい研究ニーズに応える体制にした。また、技術連絡室は企画情報室に改組し、従来の2係を企画課と情報課に再編した。

1991（平 3）

道立農業試験場基本計画が策定された。（2月）

- ・この計画は、北海道新長期計画がめざす「国際化時代に生きる力強い農業」の中で示されている「地域農業ガイドポスト」を試験研究のサイドから支えるものとして策定された。
- ・北海道病害虫防除所の設置（中央農業試験場内）により、病虫部発生予察科の業務を移管した。

1992（平 4）

「基本計画」に基づいた組織改編が行われた。（4月）

- ・当面急がれる園芸研究の強化やクリーン農業などを推進するため、組織改編をした。
- ・研究部門では、化学部門は環境化学部と農産化学部に編成替えを行い、園芸部は果樹科、野菜花き科をそれぞれ第一、二科の4科に、経営部は流通経済科を新設して2科に、また、病虫部は土壤微生物科を新たに加えた3科にいずれも拡充強化された。
- ・農業土木研究室は生産基盤科、農村環境科の2科に拡充し、農業土木部とした。
- ・企画情報室には調整課を新設し、試験研究の総合企画調整機能の強化が図られた。

中央農業技術情報センターを新設した。（4月）

- ・1986年以降5年間をかけて整備してきた北海道農業試験研究情報システム（通称HARIS）の本格的な稼働に伴い、各種情報システムの管理運営主体として設置された。この情報センターは、研究情報班（企画情報室情報課職員）及び普及情報班（情報担当専門技術員）からなる機能的組織として構成された。

1993（平 5）

仮称「花き・野菜技術センター」の基本設計が完成した。（11月）

- ・花き・野菜に関する試験研究の中核的、先導的役割と成果の効果的な伝達並びに活用を目的に設置されることとなった。滝川畜産試験場の敷地内に建設され、その土地基盤及び施設関係の基本的設計が完成した。

1994（平 6）

畜産部が廃止された。（4月）

- ・畜産部門の再編により、畜産部畜産科を新得畜産試験場に移管し、部長に代わって研究参事を設置した。

1996（平 8）

花・野菜技術センターが設置された。（4月）

- ・花・野菜技術センターが設置されたことにより園芸部は果樹部となり、野菜花き第一・二科の廃止により2科体制となる。稲作部の専門技術員は、本場へ集中された。

1998（平 10）

道立農業試験場新研究基本計画が策定された。（3月）

- ・この計画は、農業技術の開発と普及によって農業・農村の活性化に貢献することを基本理念とし、長期的展望に立った試験研究の基本方向を示し、もって21世紀における北海道農業の発展に資することを目的として策定された。

2000（平 12）

「新研究基本計画」に基づいた道立農業試験場機構改正が行われた。（4月）

- ・多様化する研究ニーズに対応するため、研究部・科を再編統合した。
- ・研究10部を作物開発部、生産システム部、クリーン農業部、農業環境部、農産工学部の5部に再編した。
- ・研究部門と普及部門の連携強化を図り、地域課題への対応や新技術の普及定着を促進するため、技術普及部を設置した。
- ・企画調整や技術情報発信機能などの強化を図るため、企画情報室と技術普及部とで構成する企画情報技術センターを設置した。

2004（平 16）

- ・「米政策改革大綱」を踏まえ、研究開発を一元的かつ総合的に進める体制を整備し、地域水田農業の発展を技術的に支援するため、水田農業科を設置した。
- ・病害虫防除業務の一元的な組織管理により、一層効率的な運営を図るため、病害虫防除所と中央農業試験場を統合した。
- ・試験研究の重点化や効率化の一層の推進を図るため、研究基本計画の見直しを専掌する研究参事が企画情報室に配置された。

2006（平 18）

「新研究基本計画」に基づいた道立農業試験場機構改正が行われた。（4月）

- ・社会情勢の変化に対応するため、道立農試10場体制のうち、天北農試が上川農試天北支場に、植物遺伝資源センターが中央農試遺伝資源部となり、8場+1支場体制にした。
- ・研究部の一部を見直しするとともに、全道対応する環境保全部、基盤研究部、遺伝資源部、地域対応する作物研究部、生産研究部、生産環境部に再編した。

2010（平 22）

地方独立行政法人北海道立総合研究機構が創設された。（4月）

- ・各分野の道立試が果たしてきた機能の維持及び向上を図り情勢変化に柔軟に対応できる組織へと改革していくた

め、22の道立試が単一の地方独立行政法人化し北海道立総合研究機構が創設された。

・独法化に伴い、新たに農業研究本部が創設され、部においても8部1室制から7部制に再編され、科・係体制からグループ制へと移行した。

2. 位置

夕張郡長沼町東6線北15号
北緯43°03′ 東経141°46′ 標高23～24m
長沼町市街より北方約8.5km、JR室蘭本線栗山駅
西南約3km 札幌市より約40km

(遺伝資源部)
滝川市南滝の川363番地
北緯43°34′ 東経141°56′ 標高53～54m
JR函館本線滝川駅北東5.5km

岩見沢市上幌向町217番地
北緯43°10′ 東経141°42′ 標高12m
JR函館本線上幌向駅南方300m

3. 土 壌

本場は、夕張川流域に分布する平坦な沖積土と馬追山麓端の暖傾斜を呈する洪積土及び扇状土からなっている。台地は樽前山系火山灰が推積している。平坦部の沖積土の表層は腐植の含量が少なく、粘土の強い埴土及び植壤土、一部には砂壤土ないし砂土となるところも存在する。

遺伝資源部は、第4記層に属する洪積土、表土は埴土で粘性に富み、酸性が強い。下層土は重粘土で緻密な構造を有し、酸性が強く、未風化で、気水の透通性は極めて不良である。

生産研究部水田農業グループは、幾春別川に由来する沖積の埴土と低位泥炭土からなり、いずれも強グライを呈する土壌で、潜在地力は極めて高い。

4. 面積及び利用区分

(単位:m ²)					
区 分	総面積	法人有地	水 田	畑	果樹園
本 場	637,477	636,526	0	390,257	123,942
遺伝資源部	245,764	245,764	21,700	130,592	0
岩見沢試験地	214,044	214,044	176,657	0	0
合 計	1,097,285	1,096,334	194,984	524,222	123,942

区 分	雑種地	原 野	建物敷地	防風林	借 地
本 場	4,865	20,130	97,199	133	951
遺伝資源部	24,040	34,123	35,309	0	0
岩見沢試験地	0	0	37,387	0	0
合 計	28,905	54,253	169,895	133	951

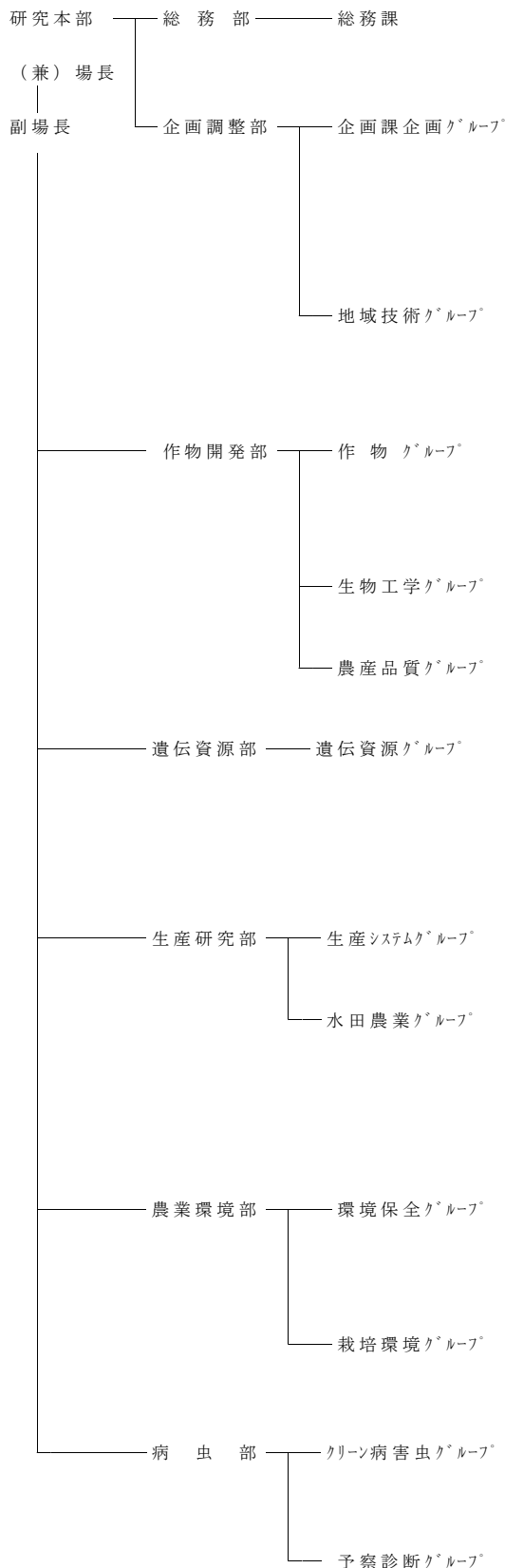
5. 職員の配置

平成26年3月31日

区 分	研究職*	主任・農技	道派遣	計
	83	10	18	111
うち再雇用者	3	3	0	9

* 食品加工研究センター研究職員(研修期間に兼務発令)1名を含む。

6. 機 構



- 1 農業研究本部及び場務一般の企画及び総合調整に関すること
- 2 場の庶務及び財務に関すること
- 3 その他、他部課の主管に属しないこと

- 1 試験研究の研究企画及び調整に関すること。
- 2 研究情報の管理・発信に関すること。
- 3 法人内外の連携の企画及び調整に関すること。
- 4 技術相談に関すること。
- 5 知的財産に関すること。
- 6 種苗に関すること。

- 1 地域農業技術支援に関すること。
- 2 地域連携に関すること。
- 3 技術体系化試験に関すること。
- 4 普及センターとの連携・支援に関すること。

- 1 畑作物に関する試験、研究及び調査を行うこと。
- 2 畑作に関する気象観測及び作況調査を行うこと。
- 3 果樹に関する試験、研究及び調査を行うこと。
- 4 作業計画(ほ場管理)、労務及び業務用諸施設の管理に関すること。

- 1 遺伝子工学的手法の開発及び利用に関する試験、研究及び調査を行うこと。

- 1 農産物の品質及び利用に関する試験、研究及び調査を行うこと。

- 1 有用育種素材の作出及び利用に関する試験、研究及び調査を行うこと。
- 2 水稻、豆類に関する基本種子等の育成、増殖及び配付を行うこと。
- 3 遺伝資源の保存及び管理に関する試験、研究及び調査を行うこと。
- 4 麦類、その他農作物に関する基本種子等の育成、増殖及び配付を行うこと。
- 5 作業計画(ほ場管理)、労務及び業務用諸施設の管理に関すること。

- 1 農業経営及び農産物の流通に関する試験、研究及び調査を行うこと。
- 2 農業機械に関する試験、研究及び調査を行うこと。

- 1 水稻の品種の育成に関する試験、研究及び調査を行うこと。
- 2 水稻に係る作況調査を行うこと。
- 3 水田農業に係る栽培法及び土壌肥料に関する試験、研究及び調査を行うこと。
- 4 転換畑の生産基盤に関する試験、研究及び調査を行うこと。
- 5 作業計画(ほ場管理)、労務及び業務用諸施設の管理に関すること。

- 1 農業の環境保全に関する試験、研究及び調査を行うこと。
- 2 生産基盤及び農村環境の整備に関する試験、研究及び調査を行うこと。
- 3 肥料及び飼料の分析を行うこと。
- 4 依頼分析を行うこと。

- 1 有機農業に関する試験、研究及び調査を行うこと。
- 2 畑作物及び園芸作物の土壌肥料に関する試験、研究及び調査を行うこと。

- 1 クリーン農業・有機農業の病虫害に関する試験、研究及び調査を行うこと。
- 2 病虫害の発生生態の解明と防除対策の確立を行うこと。

- 1 病虫害の発生予察に関わる調査及び解析を行うこと。
- 2 病虫害の診断を行うこと。
- 3 病虫害診断法の開発及び減農薬防除技術確立のための試験、研究を行うこと。

7. 現 在 員

1) 現在員(平成26年3月31日)

職 名	氏 名	職 名	氏 名
農業研究本部長兼場長	品 田 裕 二	研究主任	相 馬 ちひろ
副場長	塚 田 善 也	研究主任	池 永 充 伸
総務部長兼総務課長	千 崎 利 彦	指導主任	谷 藤 二三雄
農業調整担当課長	木 村 良	指導主任	森 佐太郎
主査(総務)	深 瀬 秀太郎	主任	山 保 政 貴
主査(調整)	森 谷 登志子	研究主幹 ～生物工学グループ	入 谷 正 樹
主査(管財)	糸 井 隆 志	主査(生物工学)	鈴 木 孝 子
主査(研究調整)	千 葉 義 幸	研究主任	鈴 木 千 賀
主査(整備)	齊 藤 吉 明	研究主任	小 倉 玲 奈
主査(遺伝資源)	加 藤 武 博	研究職員	山 下 陽 子
指導主任	伊 藤 雄 一	研究主幹 ～農産品質グループ	柳 原 哲 司
主任	上 野 雅 和	主査(農産品質)	小宮山 誠 一
主任	瀬 川 琴 美	研究主任	阿 部 珠 代
主任	樋 郡 和 彦	研究主任	中 道 浩 司
主任	藤 田 賢 司	研究職員	藤 井 はるか
主事	安 部 優	研究職員	齋 藤 優 介
調査員	神 登喜夫	(兼)研究職員	小 林 哲 也
企画調整部長	竹 中 秀 行	遺伝資源部長	白 井 滋 久
企画課長	古 原 洋	研究主幹 ～遺伝資源グループ	玉 掛 秀 人
主査(研究企画)	木 村 義 彰	主査(資源管理)	浅 山 聡
主査(研究評価)	杉 本 昌 仁	主査(資源利用)	鈴 木 和 織
主査(研究情報)	山 崎 敬 之	研究主査	平 井 泰
主査(情報調整)	泉 統 仁	研究主査	吉 村 徹
主査(研究予算)	長谷山 知 樹	研究主任	梶 田 路津子
研究主幹 ～地域技術グループ	中 住 晴 彦	専門研究員(再雇用)	峰 崎 康 裕
主査(地域連携)	田 中 一 生	専門研究員(再雇用)	梶 野 清 二
主査(地域支援)	稲 川 裕	主任	北 和 宏
主査(地域支援)	笛 木 伸 彦	主任	六 田 靖 男
主査(地域支援)	菅 原 章 人	主任	高 橋 光 司
作物開発部長	竹 内 徹	生産研究部長	奥 村 正 敏
研究主幹 ～作物グループ	前 野 眞 司	研究主幹 ～生産システムグループ	岡 田 直 樹
主査(畑作)	藤 田 正 平	主査(経営)	平 石 学
主査(果樹)	内 田 哲 嗣	主査(機械)	鈴 木 剛
研究主査	木 口 忠 彦	研究主査	稲 野 一 郎
研究主査	吉 田 昌 幸	研究主査	白 旗 雅 樹
研究主査	黒 崎 英 樹	研究主査	石 井 耕 太
研究主査	鴻 坂 扶美子	研究主任	日 向 貴 久

(兼)・・・産業技術研究本部(食品加工研究センター)新規採用職員の研修に伴う兼務

職 名	氏 名	職 名	氏 名
研究職員	濱 村 寿 史	主査（栽培環境）	古 館 明 洋
研究主幹 〜水田農業グループ	中 村 隆 一	主査（土壌生態）	坂 口 雅 己
主査（水稻育種）	尾 崎 洋 人	研究主査	鈴 木 慶次郎
主査（水田環境）	塚 本 康 貴	研究主任	櫻 井 道 彦
研究主任	佐々木 亮	研究主任	杉 川 陽 一
研究主任	木 下 雅 文	病虫部長	田 中 文 夫
研究主任	長 田 亨	研究主幹 〜クリーン病害虫グループ	橋 本 庸 三
研究職員	其 田 達 也	主査（ク リ ー ン 農 業）	美 濃 健 一
指導主任	梶 山 靖 二	主査（病害虫管理）	相 馬 潤
主任	石 井 伸 也	研究主任	東 岱 孝 司
農業技能員（再雇用）	上 田 通 広	研究主任	齊 藤 美 樹
主任（再雇用）	佐 崎 辰 信	研究主任	栢 森 美 如
農業環境部長	加 藤 淳	研究職員	荻 野 瑠 衣
研究主幹 〜環境保全グループ	竹 内 晴 信	研究主幹 〜予察診断グループ	清 水 基 滋
主査（環境保全）	甲 田 裕 幸	主査（予察）	小 松 勉
研究主任	富 沢 ゆい子	研究主任	小野寺 鶴 将
研究職員	板 垣 英 祐	研究主任	武 澤 友 二
専門研究員（再雇用）	橋 本 均	研究主任	野 津 あゆみ
研究主幹 〜栽培環境グループ	日 笠 裕 治		

2) 転入者及び採用者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
総務部長兼総務課長	千 崎 利 彦	H25. 4. 1	北海道農政部技術普及課
総務部農業調整担当課長	木 村 良	〃	北海道農政部農政課
総 務 部 主 査	千 葉 義 幸	〃	北海道桧山振興局農務課
総 務 部 主 査	加 藤 武 博	〃	北海道農政部食品政策課
総 務 部 指 導 主 任	伊 藤 雄 一	〃	北海道オホーツク総合振興局農務課
総 務 部 主 任	上 野 雅 和	〃	北海道留萌振興局農務課
総 務 部 主 任	藤 田 賢 司	〃	北海道上川総合振興局農務課
企 画 調 整 部 主 査	泉 統 仁	〃	北海道石狩振興局農務課
企 画 調 整 部 主 査	長谷山 知 樹	〃	北海道根室振興局農務課
作物開発部研究主査	黒 崎 英 樹	〃	北見農業試験場
作物開発部研究主任	中 道 浩 司	〃	十勝農業試験場
生産研究部長	奥 村 正 敏	〃	十勝農業試験場
生産研究部主任(再)	佐 崎 辰 信	〃	畜産試験場
農業環境部主査	坂 口 雅 己	〃	北海道原子力環境センター
農業環境部研究主任	富 沢 ゆい子	〃	道南農業試験場
病 虫 部 研 究 主 任	野 津 あゆみ	〃	花・野菜技術センター
(兼務)作物開発部研究職員	小 林 哲 也	H25. 6. 1	産業技術研究本部食品加工研究センター

3) 転出者及び退職者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
総 務 部 長	小 林 正 廣	H25. 4. 1	北海道農政部農産振興課
総 務 部 総 務 課 長	日 蔭 敏 美	〃	北海道空知総合振興局（栗山町派遣）
総 務 部 主 査	根 本 和 宜	〃	北海道農政部技術普及課
総 務 部 主 査	大 橋 玲 子	〃	北海道後志総合振興局農務課
総 務 部 技 師	熊 谷 美 希	〃	花・野菜技術センター
企 画 調 整 部 長	田 中 英 彦	〃	花・野菜技術センター
企 画 調 整 部 主 査	滝 野 元 信	〃	北海道農政部農産振興課
作物開発部研究主任	西 村 努	〃	上川農業試験場
作物開発部研究主任	大 西 志 全	〃	北見農業試験場
作物開発部研究主任	小谷野 茂 和	〃	北海道原子力環境センター（出向）
農 業 環 境 部 主 査	中 辻 敏 朗	〃	北見農業試験場
農 業 環 境 部 研 究 主 任	上 野 達	〃	道南農業試験場
病 虫 部 研 究 主 任	佐々木 純	〃	北見農業試験場
総 務 部 主 幹	和 島 敏 行	H25. 3. 31	退職
総 務 部 指 導 主 任	土 井 正 博	〃	〃
総 務 部 調 査 員	船 橋 秀 明	〃	〃
農 業 環 境 部 研 究 職 員	濱 村 美由紀	〃	〃
総 務 部 主 任	上 坂 晶 司	〃	再雇用満了
総 務 部 主 任	桂 木 繁	〃	〃
作物開発部農業技能員	柴 田 良 昭	〃	〃
遺伝資源部農業技能員	氏 家 省 治	〃	〃
生産研究部農業技能員	高 橋 光 男	〃	〃

8. 収入決算額

(単位：円)

科 目	当初予算額	最終予算額	決算額	増 減
依 頼 試 験 手 数 料	5,685,000	5,685,000	2,273,570	▲ 3,411,430
農 産 物 売 払 収 入	7,274,000	7,274,000	4,808,788	▲ 2,465,212
不 用 品 売 払 収 入	6,000	6,000	44,887	38,887
法 人 財 産 使 用 料 等	1,331,000	1,331,000	1,119,792	▲ 211,208
そ の 他 雑 収 入	1,421,000	1,319,000	1,319,000	0
共 同 研 究 費 負 担 金	0	610,680	610,680	0
国 庫 受 託 研 究 収 入	67,414,000	82,776,000	82,776,000	0
道 受 託 研 究 収 入	7,948,000	15,288,200	15,288,200	0
そ の 他 受 託 研 究 収 入	79,946,000	89,806,000	89,806,000	0
道 受 託 事 業 収 入	0	3,675	3,675	0
循環資源利用促進基金収入	1,200,000	1,032,953	1,032,953	0
施設整備費補助金収入	0	44,688,000	44,688,000	0
国 庫 補 助 金	0	0	0	0
目 的 積 立 金 取 崩	2,763,000	2,763,000	2,527,718	▲ 235,282
計	174,988,000	252,583,508	246,299,263	▲ 6,284,245

※事業費支弁人件費振替額を含む

9. 支出決算額

(単位：円)

科 目	当初予算額	最終予算額	決算額	繰越額	残 額
戦 略 研 究 費	19,085,000	19,835,756	19,835,756	0	0
重 点 研 究 費	10,950,000	12,466,243	10,482,200	1,984,043	0
職 員 研 究 奨 励 費	10,898,000	9,898,000	9,763,240	0	134,760
経 常 研 究 費	34,229,000	33,673,000	29,474,713	0	4,198,287
研 究 開 発 推 進 費	0	178,000	175,800	0	2,200
依 頼 試 験 費	3,048,000	3,048,000	1,034,405	0	2,013,595
技 術 普 及 指 導 費	448,000	899,000	806,690	0	92,310
研 究 用 備 品 整 備 費	0	20,735,332	20,735,332	0	0
目的積立金活用事業費	2,763,000	2,763,000	2,527,718	0	235,282
維 持 管 理 経 費	136,755,000	152,782,986	132,477,525	0	20,305,461
研究関連維持管理経費	1,109,000	1,031,000	1,031,000	0	0
知 的 財 産 経 費	322,000	522,000	456,958	0	65,042
運 営 経 費	35,341,000	41,268,930	38,440,590	0	2,828,340
共 同 研 究 費	0	610,680	610,680	0	0
国 庫 受 託 研 究 費	64,232,000	79,541,901	79,541,901	0	0
道 受 託 研 究 費	7,948,000	15,288,200	15,288,200	0	0
その他受託研究費（公募型）	18,986,000	18,203,137	18,203,137	0	0
その他受託研究費（受託）	55,320,000	65,442,640	65,442,640	0	0
道 受 託 事 業 費	0	3,675	3,675	0	0
循環資源利用促進基金事業費	1,200,000	1,032,953	1,032,953	0	0
施設整備費補助金	0	44,688,000	44,688,000	0	0
国 庫 補 助 金	0	0	0	0	0
計	402,634,000	523,912,433	492,053,113	1,984,043	29,875,277

※事業費支弁人件費振替額を除く

10. 新たに設置した主要施設及び備品

1) 施 設

該当なし

2) 備 品(1件100万円以上)

(単位：円)

名 称	規 格	数量	金額	配置
ブームスプレーヤ	共立 両腕二段スライドブーム	1	2,257,500	作 物 G
ドラフトチャンバー	ダルトン 過塩素酸型 DFV-11MK	1	3,727,500	環 境 保 全 G
雨よけハウス	越浦パイプ 5連棟 (おうとう雨よけ)	1	4,515,000	作 物 G
マニユアスプレッダー	IHIスター TMB5051M	1	1,820,000	遺 伝 資 源 G
小型トラック	日野デュトロ 2t農業用ダンプ	1	4,334,717	水 田 農 業 G
人工気象器	日本医科器械製作所 LH-240S	1	1,086,015	ク リ ー ン 病 害 虫 G
代かきロータリー	ニプロ ウィングハロー WMD5000N	1	1,608,600	水 田 農 業 G

B 作 況

I 畑 作 物

1. 気象概況（作物開発部 長沼町）

平成 24 年 9 月から平成 25 年 10 月までの概況は次のとおりである。

平成 24 年

9 月：平均気温は 20.9℃で平年より 4.1℃高く、降水量は平年の 221%、日照時間は平年の 70%であった。

10 月：平均気温は 11.8℃で平年より 1.5℃高く、降水量は平年の 80%、日照時間は平年の 64%であった。

11 月：平均気温は 3.6℃で平年と同じで、降水量は平年の 185%、日照時間は平年の 53%であった。

12 月：平均気温は-5.5℃で平年より 2.1℃低く、降水量は平年の 254%、日照時間は平年の 71%であった。

平成 25 年

1 月：平均気温は-9.9℃で平年より 3.3℃低く、降水量は平年の 94%、日照時間は平年の 117%であった。

2 月：平均気温は-7.4℃で平年より 1.8℃低く、降水量は平年の 143%、日照時間は平年の 95%であった。

3 月：平均気温は-1.7℃で平年より 0.6℃低く、降水量は平年の 121%、日照時間は平年の 75%であった。

4 月：平均気温は 4.6℃で平年より 0.8℃低く、降水量は平年の 92%、日照時間は平年の 49%であった。

5 月：平均気温は 9.9℃で平年より 1.4℃低く、降水量は平年の 95%、日照時間は平年の 60%であった。

6 月：平均気温は 16.2℃で平年より 0.1℃低く、降水量は平年の 107%、日照時間は平年の 96%であった。

7 月：平均気温は 20.6℃で平年より 1.3℃高く、降水量は平年の 32%、日照時間は平年の 102%であった。

8 月：平均気温は 21.5℃で平年より 0.1℃高く、降水量は平年の 137%、日照時間は平年の 63%であった。

9 月：平均気温は 17.0℃で平年より 0.4℃低く、降水量は平年の 168%、日照時間は平年の 66%であった。

10 月：平均気温は 11.0℃で平年より 0.6℃高く、降水量は平年の 127%、日照時間は平年の 53%であった。

本年の根雪終日は 4 月 11 日で平年より 6 日遅く、晩霜は 4 月 21 日で平年より 6 日早かった。

以上、農耕期間の 4 月から 10 月についてまとめると、気温は 7 月が高く、5 月が低く経過した。降水量は 8 ～ 10 月が多く、7 月は少なく経過した。日照時間は 4 月、5 月、8 月、9 月及び 10 月が少なく経過した。5 月から 9 月までの積算値は、平年と比べ、平均気温は 13℃低く、降水量は平年の 115%、日照時間が 76%であった。

2. 気象表

道総研中央農試（長沼町）

年月	旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)			降水日数(日)			日照時間(hr)		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
平成24年	上旬	22.6	19.4	3.2	27.5	24.5	3.0	18.8	15.0	3.8	91.0	63.9	27.1	3.0	4.0	△1.0	49.7	50.1	△0.4
	中旬	22.7	17.2	5.5	27.5	22.8	4.7	18.7	12.1	6.6	145.0	27.4	117.6	4.0	3.4	0.6	38.4	55.2	△16.8
	下旬	17.2	14.0	3.2	22.2	19.8	2.4	13.0	8.8	4.2	37.5	32.6	4.9	2.0	3.9	△1.9	24.5	54.9	△30.4
10月	上旬	13.5	12.4	1.1	20.0	18.1	1.9	8.2	7.4	0.8	20.0	37.8	△17.8	2.0	5.5	△3.5	39.8	46.2	△6.4
	中旬	10.9	10.5	0.4	15.7	16.3	△0.6	5.8	5.1	0.7	46.0	15.7	30.3	6.0	4.0	2.0	28.6	52.4	△23.8
	下旬	8.2	8.1	0.1	13.5	13.3	0.2	3.6	3.4	0.2	4.5	36.3	△31.8	7.0	4.9	2.1	23.7	43.5	△19.8
11月	上旬	7.8	6.6	1.2	10.9	11.5	△0.6	4.9	2.0	2.9	68.5	33.1	35.4	7.0	4.5	2.5	18.5	36.4	△17.9
	中旬	4.2	2.9	1.3	7.8	7.4	0.4	0.7	-0.9	1.6	41.0	30.3	10.7	6.0	5.3	0.7	17.1	31.0	△13.9
	下旬	-1.2	1.0	△2.2	2.9	5.0	△2.1	-5.2	-2.9	△2.3	49.5	24.8	24.7	8.0	4.9	3.1	15.1	28.2	△13.1
12月	上旬	-2.8	-1.4	△1.4	1.4	2.5	△1.1	-6.8	-5.8	△1.0	65.5	19.1	46.4	5.0	4.1	0.9	16.5	34.9	△18.4
	中旬	-5.8	-4.0	△1.8	-1.4	0.0	△1.4	-11.1	-8.7	△2.4	30.5	20.3	10.2	7.0	6.2	0.8	19.0	26.6	△7.6
	下旬	-7.9	-5.1	△2.8	-3.1	-0.9	△2.2	-14.1	-10.3	△3.8	30.5	17.8	12.7	7.0	5.8	1.2	28.5	26.2	2.3
平成25年	上旬	-11.2	-5.5	△5.7	-4.5	-1.2	△3.3	-19.1	-11.2	△7.9	29.0	22.2	6.8	5.0	4.2	0.8	40.4	27.5	12.9
	中旬	-10.1	-7.5	△2.6	-4.6	-2.7	△1.9	-17.4	-13.6	△3.8	34.5	29.9	4.6	6.0	3.9	2.1	29.4	25.8	3.6
	下旬	-8.4	-6.8	△1.6	-1.4	-1.6	0.2	-16.4	-13.0	△3.4	3.5	19.2	△15.7	1.0	3.9	△2.9	40.4	40.6	△0.2
1月	上旬	-5.5	-6.4	0.9	-0.2	-1.2	1.0	-12.2	-12.9	0.7	16.0	13.8	2.2	7.0	3.9	3.1	24.8	41.4	△16.6
	中旬	-8.0	-5.6	△2.4	-2.0	-0.6	△1.4	-14.9	-12.0	△2.9	21.0	20.1	0.9	7.0	4.8	2.2	41.1	35.8	5.3
	下旬	-8.9	-4.5	△4.4	-0.6	0.9	△1.5	-17.4	-11.3	△6.1	32.0	14.5	17.5	4.0	3.7	0.3	43.4	38.5	4.9
2月	上旬	-2.8	-3.3	0.5	2.2	2.2	0.0	-8.0	-9.3	1.3	24.5	16.8	7.7	7.0	2.9	4.1	31.7	50.9	△19.2
	中旬	-1.3	-1.0	△0.3	3.4	3.9	△0.5	-7.9	-6.1	△1.8	25.0	14.9	10.1	8.0	3.5	4.5	24.4	40.9	△16.5
	下旬	-1.2	0.7	△1.9	4.1	5.4	△1.3	-7.3	-4.0	△3.3	6.0	14.2	△8.2	3.0	3.3	△0.3	57.4	59.3	△1.9
3月	上旬	3.1	3.0	0.1	7.7	8.2	△0.5	-1.8	-1.9	0.1	25.5	10.8	14.7	5.0	2.6	2.4	32.0	52.3	△20.3
	中旬	4.3	5.6	△1.3	9.3	11.1	△1.8	0.6	0.7	△0.1	8.5	18.5	△10.0	4.0	1.8	2.2	21.2	53.1	△31.9
	下旬	6.5	7.6	△1.1	11.1	13.2	△2.1	2.5	2.6	△0.1	16.5	25.6	△9.1	4.0	2.9	1.1	20.1	44.9	△24.8
4月	上旬	5.9	10.1	△4.2	10.9	15.7	△4.8	1.5	4.8	△3.3	28.5	30.8	△2.3	5.0	2.9	2.1	33.9	55.4	△21.5
	中旬	9.5	10.8	△1.3	15.1	16.4	△1.3	5.7	5.5	0.2	31.0	22.7	8.3	6.0	2.8	3.2	16.7	55.6	△38.9
	下旬	13.8	12.7	1.1	20.1	18.3	1.8	8.6	8.0	0.6	10.0	19.6	△9.6	4.0	2.0	2.0	49.5	57.1	△7.6
5月	上旬	15.4	14.7	0.7	23.2	20.4	2.8	10.3	10.0	0.3	0.5	14.4	△13.9	1.0	1.9	△0.9	74.5	52.9	21.6
	中旬	17.3	16.1	1.2	22.3	21.3	1.0	14.1	12.0	2.1	62.0	29.5	32.5	4.0	1.6	2.4	23.4	48.0	△24.6
	下旬	15.9	18.1	△2.2	20.9	23.5	△2.6	11.3	14.0	△2.7	12.0	25.7	△13.7	1.0	1.5	△0.5	45.9	49.0	△3.1
6月	上旬	21.0	18.5	2.5	26.3	23.5	2.8	17.0	14.8	2.2	16.0	33.5	△17.5	4.0	1.8	2.2	45.7	39.9	5.8
	中旬	19.9	18.9	1.0	26.2	23.2	3.0	15.3	15.5	△0.2	0.0	38.1	△38.1	0.0	1.8	△1.8	55.8	36.8	19.0
	下旬	20.8	20.3	0.5	25.8	25.3	0.5	17.5	16.5	1.0	18.5	34.9	△16.4	5.0	1.4	3.6	27.3	50.0	△22.7
7月	上旬	22.0	22.3	△0.3	27.0	27.3	△0.3	18.5	18.7	△0.2	22.5	41.8	△19.3	2.0	1.9	0.1	40.0	49.4	△9.4
	中旬	23.5	21.5	2.0	28.0	26.3	1.7	20.6	17.8	2.8	71.0	46.1	24.9	6.0	2.2	3.8	25.1	45.2	△20.1
	下旬	19.3	20.5	△1.2	24.6	25.5	△0.9	15.4	16.2	△0.8	88.5	44.7	43.8	8.0	2.2	5.8	30.2	56.1	△25.9
8月	上旬	18.6	19.7	△1.1	23.0	24.8	△1.8	15.1	15.4	△0.3	44.0	72.8	△28.8	5.0	1.9	3.1	31.9	49.1	△17.2
	中旬	18.1	17.9	0.2	23.3	23.4	△0.1	13.1	13.1	0.0	140.0	40.8	99.2	4.0	2.2	1.8	30.3	52.6	△22.3
	下旬	14.2	14.4	△0.2	19.7	20.0	△0.3	9.0	9.3	△0.3	60.5	32.4	28.1	3.0	2.4	0.6	38.8	51.9	△13.1
9月	上旬	14.2	12.3	1.9	19.5	18.1	1.4	9.2	7.3	1.9	7.5	32.2	△24.7	2.0	2.5	△0.5	24.8	47.1	△22.3
	中旬	9.7	10.5	△0.8	14.7	16.2	△1.5	4.3	5.2	△0.9	72.5	20.4	52.1	7.0	2.4	4.6	22.8	48.6	△25.8
	下旬	9.1	8.3	0.8	14.0	13.6	0.4	4.9	3.5	1.4	24.0	29.7	△5.7	5.0	3.2	1.8	25.7	42.1	△16.4
10月	上旬	7.0	7.2	△0.2	12.5	12.0	0.5	2.2	2.6	△0.4	79.5	35.1	44.4	5.0	3.2	1.8	20.7	35.6	△14.9
	中旬	2.6	3.4	△0.8	7.4	7.7	△0.3	-1.8	-0.4	△1.4	25.5	30.1	△4.6	6.0	3.9	2.1	26.0	29.6	△3.6

注1) 気象データはマメダス中央農試本場。欠測値および明らかな異常値はアメダス長沼で補正。

注2) 平年値は過去10年間の平均値。

注3) 最高、最低、平均気温は期間内の平均値、降水量、降水日数、日照時間は期間内の積算値。

注4) 降水日数は、24時間降水量が0.5mm以上をカウント

注5) △は減を示す。

3. 季節表

年次	初 霜 (年. 月. 日)	根 雪 始 (年. 月. 日)	融雪剤根雪終 (年. 月. 日)	通常の根雪終 (年. 月. 日)	積雪期間 (日)	降雪終 (年. 月. 日)	耕鋤始 (年. 月. 日)	晩霜 (年. 月. 日)	初 霜 (年. 月. 日)	無 霜 期 間 (日)	降 雪 始 (年. 月. 日)
本年	H24.10.25	H24.11.22	H25.4.8	H25.4.11	141	H25.4.19	H25.4.22	H25.4.21	H25.10.19	180	H25.10.15
平年	10.23	12.8	3.31	4.5	119	4.22	4.15	4.27	10.24	179	11.7
比較	2	△ 16	8	6	22	△ 3	7	△ 6	△ 5	1	△ 23

注1) 平年値は中央農試における平成15年～24年の10年間の平均値を用いた(初霜、根雪始は平成14～23年の平均値)。

注2) 積雪期間の平年値にはうるう年を含むため、根雪始・終の差と一致しない。

4. 農耕期間の積算値

項目 期間		平均気温 (℃)	最高気温 (℃)	最低気温 (℃)	日照時間 (hr)	降水量 (mm)
4～10月	本年	3,075	4,198	2,171	710	759
	平年	3,094	4,223	2,128	1,037	665
	比較	△ 19	△ 25	43	△ 327	94
5～9月	本年	2,605	3,435	1,972	569	605
	平年	2,618	3,419	1,954	749	528
	比較	△ 13	16	18	△ 180	77

5. 耕種概要

平成 13 年度より、すべての作物で土壌物理性・排水性が改良された基盤整備後の圃場を使用している。

	一区面積 (m ²)	反復	前作物	畦幅 (cm)	株間 (cm)	一株本数	播種粒数 (粒/m ²)	株数 (株/10a)
秋まき小麦	9.6	4	ひまわり	20	条播	—	255	—
春まき小麦	7.2	4	ひまわり	30	条播	—	340	—
大豆	8.4	3	デントコーン	60	20	2	—	8,333
小豆	8.4	3	えん麦	60	20	2	—	8,333
ばれいしょ	10.8	3	ひまわり	75	30	—	—	4,444

10a当たり施肥量(kg)					
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	堆肥
秋まき小麦	4.0+6.0	12.5	5.0	—	—
春まき小麦	10.0	18.0	12.0	5.0	—
大豆	1.5	11.0	7.5	3.5	—
小豆	4.0	19.2	9.2	2.4	—
ばれいしょ	10.4	16.8	14.0	—	1,000

6. 作 況

(1) 秋まき小麦(平成24年播種)

作況：不良

事由：播種期は平年より3日遅かったが、好天と適度な降雨に恵まれたため出芽は良好で、出芽期は平年より1日遅い9月27日であった。その後、気温が平年より高く推移したため生育は順調で、越冬前の茎数は平年並であった。根雪終(融雪剤散布)は平年より8日遅い4月8日、雪腐病による冬損程度、越冬後の茎数は平年並で

あった。4月中旬以降、低温に推移したため草丈は平年を下回り、生育も遅れた。7月上旬以降、高温に推移したため登熟が進み、成熟期は平年より2日早い7月20日で、登熟期間は平年より5日短かった。成熟期における穂長は平年並で、稈長は平年より短く、穂数は大きく下回り、子実重は平年対比85%と低収であった。子実の品質は平年並の2等であった。

以上により、本年の作況は不良である。

品種名		きたほなみ		
項目	年次	本年	平年	比較
播種期	(H24.月.日)	9.20	9.17	3
出芽期	(H24.月.日)	9.27	9.26	1
出穂期	(H25.月.日)	6.11	6.08	3
成熟期	(H25.月.日)	7.20	7.22	△ 2
冬損程度	(0:無～5:甚)	0.5	1.0	△ 0.5
草 丈 (cm)	H24.10.20	21.8	17.0	4.8
	H25.5.20	33.2	45.0	△ 11.8
	H25.6.20	94.7	101.0	△ 6.3
茎 数 (本/㎡)	H24.10.20	575	589	△ 14
	越冬前(11月)	1236	1256	△ 20
	越冬後(4月)	1883	1825	58
	H25.5.20	1451	1457	△ 6
	H25.6.20	785	856	△ 71
成熟期に 稈長	(cm)	86.9	92.0	△ 5.1
おける 穂長	(cm)	9.0	9.0	△ 0.0
	穂数(本/㎡)	687	788	△ 101
倒伏程度	(0:無～5:甚)	0.0	1.0	△ 1.0
子実重	(kg/10a)	638	755	△ 117
容積重	(g/l)	818	803	14.6
千粒重	(g)	37.6	38.0	△ 0.4
品質	(等級)	2等	2等	-
子実重平年対比	(%)	85	100	△ 15

注1) 平年値: 前7か年中、平成20年(最凶)、平成19年(最豊)を除く5か年平均(収穫年度)。

注2) △は平年より早、短、少を表す(以下同じ)。

注3) 倒伏程度: 成熟期における倒伏程度。

(2) 春まき小麦 作況：不良

事由：融雪剤使用圃場の根雪終は平年より8日遅い4月8日であった。播種期は平年より5日遅い4月22日となり、4月下旬～5月上旬は低温・寡照で推移したため、出芽期は平年より9日遅い5月9日となった。出芽後も低温・寡照で推移し生育が緩慢となったため、5月中旬時点で草丈および茎数は平年を下回り、分げつも発生しなかった。5月下旬から6月中旬は高温で推移して生育の遅れはほぼ回復し、出穂期は1日の遅れに止まったが、6月中旬にまとまった降水があるまでやや干ばつ気味となったため、茎数は平年より多かったものの、草丈は平

年より短かった。6月下旬から7月中旬は少雨に経過したため茎の無効化が進み、穂長は平年並であるが、稈長が平年よりやや短く、穂数は平年の90%と少なく、遅れ穂も多く認められた。成熟期および登熟日数は平年並となったが、子実重は平年比80%と平年を大きく下回り、千粒重も平年を下回った。穂数が平年より少なかったことに加え、一穂粒数が平年より少ないものと推察された。倒伏は認められなかった。子実調整後の検査等級は1等であった。

以上により、本年の作況は不良である。

品種名		春よ恋			はるきらり(参考)		
項目	年次	本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期	(月.日)	4.22	4.17	5	4.22	4.17	5
出芽期	(月.日)	5.09	4.30	9	5.09	4.30	9
出穂期	(月.日)	6.21	6.20	1	6.19	6.18	1
成熟期	(月.日)	8.01	8.01	0	8.01	8.02	△ 1
草 丈	5月20日	11.5	20.9	△ 9.4	12.2	23.1	△ 10.9
(cm)	6月20日	68	82	△ 14	67	80	△ 13
茎 数	5月20日	330	601	△ 271	339	627	△ 288
(本/㎡)	6月20日	864	755	109	840	695	145
7月20日 稈長	(cm)	90	95	△ 5	85	94	△ 9
または 穂長	(cm)	8.4	8.5	△ 0.1	7.3	8.0	△ 0.7
成熟期の 穂数	(本/㎡)	481	534	△ 53	480	520	△ 40
子実重	(kg/10a)	409	510	△ 101	363	501	△ 138
千粒重	(g)	38.8	39.9	△ 1.1	42.5	42.8	△ 0.3
リットル重	(g)	811	799	12	807	803	4
品質	(等級)	1	2		2	2	
子実重平年対比	(%)	80	100	△ 20	73	100	△ 27

注1) 平年値は前7カ年中、平成23年(最凶)、平成24年(最豊)を除く5カ年平均。

「はるきらり」は前6カ年平均。

注2) リットル重は1リットル升による測定。

(3) 大豆 作況：良

事由：播種期と出芽期は平年並であった。6月～7月にかけての降水量が少なく生育が停滞したため、平年と比べて主茎長が短かった。開花期は「トヨムスメ」が平年並、「スズマル」は平年より2日早かった。着莢数は「トヨムスメ」が平年より14%、「スズマル」は7%多かった。一莢内粒数は「トヨムスメ」が平年よりやや多

く、「スズマル」は平年並であった。百粒重は両品種ともに平年よりやや軽かった。子実重は着莢数が多かったことにより「トヨムスメ」は417kg/10aで対平年比112%、「スズマル」が388kg/10aで同比112%であった。屑の発生は平年よりやや少なかった。品質は両品種ともに平年をやや上回った。

以上により、本年の作況は良である。

品種名		トヨムスメ			スズマル		
項目	年次	本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.22	5.22	0	5.22	5.22	0
出芽期	(月.日)	6.03	6.03	0	6.02	6.02	0
開花期	(月.日)	7.14	7.15	△ 1	7.21	7.23	△ 2
成熟期	(月.日)	9.29	9.27	2	10.01	9.29	2
主茎長 (cm)	6月20日	13.3	11.8	1.5	9.9	8.4	1.5
	7月20日	45.2	50.6	△ 5.4	34.7	41.5	△ 6.8
	8月20日	49.1	58.3	△ 9.2	57.7	63.0	△ 5.3
	9月20日	49.9	57.9	△ 8.0	58.6	63.7	△ 5.1
	成熟期	49.9	57.6	△ 7.7	58.6	64.6	△ 6.0
主茎節数 (節)	6月20日	3.3	3.1	0.2	3.6	3.3	0.3
	7月20日	9.3	9.7	△ 0.4	11.4	11.7	△ 0.3
	8月20日	9.7	10.0	△ 0.3	13.6	14.2	△ 0.6
	9月20日	9.7	10.0	△ 0.3	14.0	13.7	0.3
	成熟期	9.7	10.0	△ 0.3	14.0	14.0	0.0
分枝数 (本/株)	7月20日	7.2	6.0	1.2	8.2	8.7	△ 0.5
	8月20日	8.0	6.6	1.4	12.1	11.0	1.1
	9月20日	8.1	6.3	1.8	12.0	10.4	1.6
	成熟期	8.1	6.0	2.1	12.0	10.0	2.0
着莢数 (莢/株)	8月20日	73.8	66.3	7.5	148.4	138.5	9.9
	9月20日	71.4	61.4	10.0	143.4	124.3	19.1
	成熟期	69.5	61.1	8.4	132.2	124.0	8.2
一莢内粒数		1.94	1.79	0.15	2.35	2.42	△ 0.07
子実重	(kg/10a)	417	372	45	388	345	43
百粒重	(g)	39.5	41.1	△ 1.6	14.5	15.0	△ 0.5
屑粒率	(%)	1.4	2.4	△ 1.0	1.1	1.6	△ 0.5
品質	(等級)	2中	3中		2上	2中	
子実重平年対比 (%)		112	100	12	112	100	12

注) 平年値は前7カ年中、平成21年(最凶)、20年(最豊)を除く5カ年平均。

(4) 小豆 作況：不良

事由：播種期が平年より 3 日遅い 5 月 28 日であり、出芽期は平年より 1 日遅い 6 月 12 日であった。6 月下旬から 8 月上旬まで少雨に経過し、また 7 月に入り夏日が続いたため、干ばつ気味に推移した。このため、主茎長が平年より短く推移し、個体全体としての生育量は少なかった。開花期が平年より 1 日早い 7 月 22 日であり、成熟期は平年より 2 日早い 9 月 2 日であった。成熟期の

主茎長は平年より短く、主茎節数がやや多く、分枝数は少なかった。上位節の着莢が少なく、着莢数は平年を大きく下回り、百粒重が平年より重かったものの一莢内粒数は少なく、子実重は平年比 75 %と低収であった。成熟期前の 8 月中旬～下旬の降雨が多かったため屑粒率が高く、検査等級は劣った。

以上により、本年の作況は不良である。

品種名		エリモシヨウズ		
項目 \ 年次		本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.28	5.25	3
出芽期	(月.日)	6.12	6.11	1
開花期	(月.日)	7.22	7.23	△ 1
成熟期	(月.日)	9.02	9.04	△ 2
主茎長 (cm)	6月20日	3.8	3.7	0.1
	7月20日	21.3	24.3	△ 3.0
	8月20日	49.7	65.4	△ 15.7
	成熟期	49.2	65.0	△ 15.8
主茎節数 (節)	6月20日	1.9	1.5	0.4
	7月20日	9.2	9.3	△ 0.1
	8月20日	14.4	13.4	1.0
	成熟期	14.2	13.4	0.8
分枝数 (本/株)	7月20日	4.5	4.4	0.1
	8月20日	4.0	4.6	△ 0.6
	成熟期	3.8	4.5	△ 0.7
着莢数 (莢/株)	8月20日	31.5	55.6	△ 24.1
	成熟期	33.0	53.9	△ 20.9
一莢内粒数		5.44	5.94	△ 0.50
子実重	(kg/10a)	219	291	△ 72
百粒重	(g)	14.4	12.4	2.0
屑粒率	(%)	11.1	2.9	8.2
品質	(等級)	4中	3下	—
子実重平年対比 (%)		75	100	△25

注1) 平年値は前7カ年中、平成20年(最豊)、平成18年(最凶)を除く5カ年平均。

注2) 子実重および百粒重は子実水分15%に補正後の数値。

(5) ばれいしょ 作況：平年並

事由：本年の根雪終は平年より 6 日遅い 4 月 11 日（融雪剤無散布）であったが、平年より少雨であったことから植付期は平年より 5 日早い 4 月 24 日であった。植付け後、4 月下旬から 5 月中旬は低温で推移したため、萌芽期は平年より 8 日遅い 5 月 30 日となった。5 月下旬から高温で推移したため生育はほぼ回復したが、6 月中旬時点の茎長はやや短く、開花始は平年より 4 日遅い 6 月 25 日であった。7 月上旬からの高温・多照により生

育はさらに回復し、7 月中旬時点で茎長、茎数とも平年並となった。

枯凋期は 8 月 26 日と平年より 5 日遅れた。枯凋期における 1 株当たり上いも数は平年よりやや少なく、上いも平均一個重がやや重いため、上いも重は平年並となり、中以上いも重は平年よりやや多くなった。でん粉価は平年並であった。中心空洞等の内部障害の発生は少なかった。

以上により、本年の作況は平年並である。

品種名		男爵薯		
項目	年次	本年	平年	比較
植付期	(月・日)	4.24	4.29	△ 5
萌芽期	(月・日)	5.30	5.22	8
開花始	(月・日)	6.25	6.21	4
枯凋期	(月・日)	8.26	8.21	5
茎長	6月20日	29.5	34.8	△ 5.3
(cm)	7月20日	48.4	46.8	1.6
茎数	6月20日	4.6	4.6	0.0
(本/株)	7月20日	4.3	4.4	△ 0.1
8月20日における				
上いも数	(個/株)	11.0	11.7	△ 0.7
上いも平均一個重(g)		97	92	5
上いも重	(kg/10a)	4741	4734	8
でん粉価	(%)	14.7	14.6	0.1
枯凋期における				
上いも数	(個/株)	11.1	12.2	△ 1.1
上いも平均一個重(g)		100	88	12
上いも重	(kg/10a)	4911	4751	160
中以上いも重(kg/10a)		4407	3976	431
でん粉価	(%)	14.6	14.7	△ 0.1
上いも重平年対比 (%)		103	100	3
中以上いも重 "	(%)	111	100	11
でん粉価 "	(%)	99	100	△ 1

注) 平年値は前7か年中、平成18年(最凶)、19年(最豊)を除く5か年平均。
「上いも」は20g/個以上、「中以上いも」は60g/個以上。

(6) 中央農試作況報告について

平成 13 年度より、すべての作物で土壌物理性・排水性が改良された基盤整備後の圃場を使用している。当報告は、中央農業試験場のほ場において行った生育調査について、調査時点における値を中央農業試験場の平年値と比較したものであり、当該管内の作況を代表するものではありません。

Ⅱ 水 稲

1. 気象概況

本年の根雪終日は4月20日で平年より12日遅く、晩霜は5月9日で平年より2日遅かった。

4月：平均気温は4.9℃で平年より0.8℃低く、降水量は平年の98%、日照時間は平年の71%であった。

5月：平均気温は10.1℃で平年より1.5℃低く、降水量は平年の105%、日照時間は平年の76%であった。

6月：平均気温は16.8℃で平年並、降水量は平年の87%、日照時間は平年の112%であった。

7月：平均気温は21.4℃で平年より1.7℃高く、降水量は平年の44%、日照時間は平年の125%であった。

8月：平均気温は22.3℃で平年より0.4℃高く、降水量は平年の135%、日照時間は平年の90%であった。

9月：平均気温は17.6℃で平年より0.2℃低く、降水量は平年の156%、日照時間は平年の88%であった。

10月：平均気温は11.5℃で平年より0.5℃高く、降水量は平年の110%、日照時間は平年の80%であった。

本年の降雪初日は11月11日で平年より3日遅かった。

以上、農耕期間の5月から9月についてまとめると、気温は、5月上、中旬、6月下旬、8月下旬および9月上旬は低温であったが、5月下旬、6月中旬、7月上、中旬および8月中旬はそれぞれ高温に推移した。降水量は、8月、9月は平年より多く、6月、7月は少なく推移した。日照時間は6月、7月は平年より多く、他は平年より少なく推移した。

2. 当場作況：やや不良

事由：根雪終日が平年に比べかなり遅かったため、圃場作業の開始は遅れた。播種は平年並の4月18日に行った。

播種日からやや低温に経過したため、出芽始めまでに日数を要した。その後も平年を下回る気温と日照時間で経過したため、生育は緩慢で、苗は平年に比べ葉数、草丈ともに少なく、乾物重、充実度も劣った。移植はほぼ平年並の5月20日に行った。

移植後、6月上・中旬は高温・多照に経過したことから、生育は回復、促進された。分げつの発生も旺盛となり、茎数は平年並みから上回った。そのため、幼穂形成期は平年に比べ5日から6日早かった。幼穂形成期以降も7月上・中旬は高温、多照に推移したことから、出穂期は、平年より7日から8日早かった。

登熟期間中の気温はほぼ平年並で推移したものの、日

照時間は平年より少なく、登熟日数は平年並からやや長かった。成熟期は、平年に比べ5日から8日早かった。

成熟期における穂数は、平年比98～110%と、平年並から上回り、一穂粒数は平年比101～103%と平年並からやや上回った。㎡当たりの粒数は99～114%と平年並から多く、稔実歩合は平年より0.7～6.5ポイント高かったが、登熟歩合は2.2～12.2ポイント低かった。そのため、㎡当たりの登熟粒数は平年比96～97%と、平年をやや下回った。粗玄米重は「きらら397」、「ななつぼし」がそれぞれ61.7kg/a、62.9kg/aで、平年比100%、99%と平年並であった。千粒重は、平年比で「きらら397」、「ななつぼし」がそれぞれ103%、104%と平年をやや上回ったが、屑米歩合はそれぞれ1.0、1.2ポイント平年を上回った。その結果、精玄米重は「きらら397」、「ななつぼし」がそれぞれ56.6kg/a、57.4kg/aで、平年比99%、97%と平年並からやや下回った。

検査等級は、「きらら397」が2等中、「ななつぼし」が1等下と、平年並であった。落等の要因は、「きらら397」で充実度不足および腹白の発生、「ななつぼし」で充実度不足であった。

以上のことから、本年の作況は、やや不良である。

作況指数	90～	91～94	95～98	99～101	102～105	106～
作 柄	著しい不良	不良	やや不良	平年並	やや良	良

注1) 作況指数(収量平年比)と作柄の判定基準 (農林水産省の統計基準による)

気象表

月 旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(h)		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
4月上旬	4.0	3.4	0.6	7.9	7.8	0.1	-0.2	-1.1	0.9	26.0	13.7	12.3	41.7	57.6	△ 15.9
中旬	4.2	5.9	△ 1.7	8.1	11.0	△ 2.9	1.1	1.2	△ 0.1	14.0	19.1	△ 5.1	42.4	57.6	△ 15.2
下旬	6.5	7.9	△ 1.4	10.5	13.1	△ 2.6	3.2	3.1	0.1	19.0	27.4	△ 8.4	34.0	50.8	△ 16.8
4月平均・積算	4.9	5.7	△ 0.8	8.8	10.6	△ 1.8	1.4	1.1	0.3	59.0	60.2	△ 1.2	118.1	166.0	△ 47.9
5月上旬	6.0	10.5	△ 4.5	10.5	16.0	△ 5.5	1.9	5.5	△ 3.6	36.5	30.3	6.2	53.3	62.5	△ 9.2
中旬	9.8	11.2	△ 1.4	14.9	16.8	△ 1.9	5.9	6.2	△ 0.3	31.5	22.6	8.9	31.0	64.4	△ 33.4
下旬	14.5	13.2	1.3	20.5	18.8	1.7	9.7	8.5	1.2	9.5	21.0	△ 11.5	66.6	70.8	△ 4.2
5月平均・積算	10.1	11.6	△ 1.5	15.3	17.2	△ 1.9	5.8	6.7	△ 0.9	77.5	73.9	3.6	150.9	197.7	△ 46.8
6月上旬	16.0	15.1	0.9	23.3	20.9	2.4	11.1	10.4	0.7	0.5	11.6	△ 11.1	102.4	65.0	37.4
中旬	18.1	16.6	1.5	22.8	21.9	0.9	14.9	12.4	2.5	28.5	25.2	3.3	39.6	58.8	△ 19.2
下旬	16.3	18.6	△ 2.3	21.5	24.1	△ 2.6	12.1	14.5	△ 2.4	22.0	22.0	0.0	61.6	58.8	2.8
6月平均・積算	16.8	16.8	0.0	22.5	22.3	0.2	12.7	12.4	0.3	51.0	58.8	△ 7.8	203.6	182.6	21.0
7月上旬	22.0	19.0	3.0	26.8	24.1	2.7	18.0	15.4	2.6	19.0	34.9	△ 15.9	61.9	50.7	11.2
中旬	20.8	19.3	1.5	27.0	23.7	3.3	16.8	15.9	0.9	0.0	42.4	△ 42.4	80.3	45.9	34.4
下旬	21.5	20.8	0.7	26.0	25.7	0.3	18.1	17.2	0.9	28.0	29.3	△ 1.3	50.8	58.2	△ 7.4
7月平均・積算	21.4	19.7	1.7	26.6	24.5	2.1	17.6	16.2	1.4	47.0	106.6	△ 59.6	193.0	154.8	38.2
8月上旬	22.7	22.8	△ 0.1	27.5	27.7	△ 0.2	19.2	19.2	0.0	19.5	40.8	△ 21.3	59.8	55.9	3.9
中旬	24.3	21.9	2.4	28.3	26.6	1.7	21.7	18.3	3.4	70.0	58.0	12.0	43.8	52.9	△ 9.1
下旬	19.9	20.9	△ 1.0	24.6	25.7	△ 1.1	16.5	16.9	△ 0.4	103.5	43.9	59.6	49.2	61.8	△ 12.6
8月平均・積算	22.3	21.9	0.4	26.8	26.7	0.1	19.1	18.1	1.0	193.0	142.7	50.3	152.8	170.6	△ 17.8
9月上旬	19.0	20.1	△ 1.1	23.1	25.0	△ 1.9	15.6	16.0	△ 0.4	55.0	64.9	△ 9.9	43.0	51.7	△ 8.7
中旬	18.9	18.5	0.4	23.5	23.5	0.0	14.4	13.9	0.5	119.0	42.2	76.8	47.7	57.0	△ 9.3
下旬	14.9	14.9	0.0	19.6	20.0	△ 0.4	9.7	10.2	△ 0.5	54.0	39.3	14.7	52.9	55.0	△ 2.1
9月平均・積算	17.6	17.8	△ 0.2	22.1	22.8	△ 0.7	13.2	13.4	△ 0.2	228.0	146.4	81.6	143.6	163.7	△ 20.1
10月上旬	15.0	12.7	2.3	19.6	17.8	1.8	10.3	8.0	2.3	8.5	41.6	△ 33.1	45.2	50.5	△ 5.3
中旬	10.1	11.2	△ 1.1	14.7	16.1	△ 1.4	5.2	6.5	△ 1.3	68.0	28.4	39.6	31.2	48.4	△ 17.2
下旬	9.5	9.1	0.4	13.6	13.4	0.2	5.4	4.7	0.7	37.5	33.7	3.8	37.4	43.7	△ 6.3
10月平均・積算	11.5	11.0	0.5	16.0	15.8	0.2	7.0	6.4	0.6	114.0	103.7	10.3	113.8	142.6	△ 28.8

農耕期間積算値(5月～9月)

区別	平均気温(℃)	降水量(mm)	日照時間(h)
本年	2704	597	846
平年	2688	530	869
比較	16	67	△ 23

季節調査(年. 月. 日)

区別	根雪初日	根雪終日	降雪終日	耕 鋤 始	晩 霜	初 霜	降雪初日
本年	H24. 11.18	H25. 4.20	H25. 4.19	H25. 5.8	H25. 5.9	H25. 10.17	H25. 11.11
平年	11.29	4.8	4.14	5.5	5.7	10.16	11.8
比較	△ 11	12	5	3	2	1	3

注1) データは「アメダス岩見沢」を使用し、平年値は平成15～24年の10ヶ年平均値。

注2) 表中の気温は期間内の平均を示し、降水量と日照時間は期間内の積算値を示した。

注3) 季節調査は、岩見沢測候所閉鎖にともない、平成18年以降はアメダス岩見沢の観測値から推定した。

項目	品種名・ 苗種	きらら397 中苗			ななつぼし 中苗			ゆめぴりか 中苗(参考)		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年 (前4ヶ年)	比較	
播種期	(月・日)	4.18	4.18	0	4.18	4.18	0	4.18	4.18	0
移植期	(月・日)	5.20	5.21	△ 1	5.20	5.21	△ 1	5.20	5.20	0
幼穂形成期	(月・日)	7.02	7.07	△ 5	6.29	7.05	△ 6	6.30	7.05	△ 5
止葉始	(月・日)	7.14	7.21	△ 7	7.11	7.18	△ 7	7.12	7.17	△ 5
出穂期	(月・日)	7.26	8.03	△ 8	7.25	8.01	△ 7	7.24	7.31	△ 7
成熟期	(月・日)	9.18	9.23	△ 5	9.12	9.20	△ 8	9.14	9.18	△ 4
穂揃日数	(日)	6.0	5.8	0.2	6.0	6.2	△ 0.2	6.0	6.5	△ 0.5
登熟日数	(日)	54	51	3	49	50	△ 1	52	49	3
生育日数	(日)	153	158	△ 5	147	155	△ 8	149	153	△ 4
移植時地上部乾物重(g/100本)		1.85	2.19	△ 0.34	1.80	2.27	△ 0.47	1.84	2.19	△ 0.35
草 丈 (cm)	移 植 時	9.7	10.5	△ 0.8	9.4	10.6	△ 1.2	10.2	10.6	△ 0.4
	6月20日	27.1	23.9	3.2	29.8	24.5	5.3	30.9	26.2	4.7
	7月20日	65.1	60.7	4.4	71.7	66.3	5.4	74.8	68.3	6.5
茎 数 (移植時:本/個体) (その他:本/m ²)	移 植 時	1.0	1.0	0.0	1.0	1.0	0.0	1.0	1.0	0.0
	6月20日	340	288	52	295	292	3	355	322	33
	7月20日	805	782	23	733	808	△ 75	853	833	20
主 稈 葉 数 (枚)	移 植 時	3.1	3.3	△ 0.2	2.8	3.2	△ 0.4	3.0	3.2	△ 0.2
	6月20日	7.5	6.7	0.8	7.3	6.6	0.7	7.7	7.0	0.7
	7月20日	11.0	10.6	0.4	10.2	10.2	0.0	10.4	10.7	△ 0.3
	止 葉	11.0	11.0	0.0	10.2	10.4	△ 0.2	10.4	10.8	△ 0.4
稈 長	(cm)	64.4	65.4	△ 1.0	71.8	70.2	1.6	69.3	68.6	0.7
穂 長	(cm)	17.0	16.5	0.5	17.0	16.5	0.5	17.4	17.1	0.3
穂 数	(本/m ²)	738	668	70	703	716	△ 13	798	718	80
一穂粒数	(粒)	49.8	48.2	1.6	54.8	54.3	0.5	49.8	43.8	6.0
m ² 当粒数	(百粒)	368	322	46	385	389	△ 4	397	314	83
稔実歩合	(%)	90.2	89.5	0.7	92.8	85.9	6.9	88.7	91.0	△ 2.3
登熟歩合	(%)	69.0	81.2	△ 12.2	75.6	77.8	△ 2.2	67.0	82.3	△ 15.3
籾摺歩合	(%)	74.6	76.3	△ 1.7	75.0	76.4	△ 1.4	72.3	76.1	△ 3.8
屑米歩合	(%)	8.3	7.3	1.0	8.7	7.5	1.2	11.4	6.7	4.7
千粒重	(g)	23.6	22.9	0.7	22.7	21.8	0.9	23.3	22.7	0.6
わら重	(kg/a)	66.5	62.0	4.5	68.7	69.9	△ 1.2	71.1	63.2	7.9
精粒重	(kg/a)	75.9	75.2	0.7	76.5	77.1	△ 0.6	75.4	72.8	2.6
精玄米重	(kg/a)	56.6	57.4	△ 0.8	57.4	58.9	△ 1.5	54.5	55.4	△ 0.9
収量平年対比	(%)	99	100	△ 1	97	100	△ 3	98	100	△ 2
検査等級		2中	2上	—	1下	2上	—	2上	2上	—

注1)「きらら397」の平年値は前7ヶ年中、平成20年(最豊)、19年(最凶)を除く5ヶ年平均。

注2)「ななつぼし」の平年値は前7ヶ年中、平成23年(最豊)、19年(最凶)を除く5ヶ年平均。

注3)平成21年より「ゆめぴりか」(中苗紙筒)の調査を開始した。

注4)「ほしのゆめ」(中苗紙筒)の調査は、平成24年で中止した。

注5)耕種概要

土 壌 : 細粒グライ土

施 肥 : 高度化成472全層施肥 N-P₂O₅-K₂O=8.0-9.7-6.9 kg/10a

播 種 量 : 中苗紙筒=130cc/箱 栽植密度 : 30×13.3cm 25株/m² 4本植え

移植方法 : 手植え 反 復 : 2

注6)刈り取り面積は一区3.6m²、精粒重、精玄米重は水分15%換算値を、篩目は1.9mmを使用した。

Ⅲ 果 樹

1. リンゴ 作況：並

事由 発芽期は平年より 11 ～ 13 日遅く、開花期および満開期は平年より 7 ～ 9 日遅かった。

花芽率および果そう結実率は、「つがる」が平年並み、隔年結果性の強い「ハックナイン」・「ふじ」は平年より高かった。

開花が遅れたため初期の果実体積は小さかったが、そ

の後の肥大は比較的順調に進んだ。収穫果実の一果重は生育期間が短い「つがる」は小さかったが、「ハックナイン」・「ふじ」はほぼ平年並であった。

収穫期は各品種とも平年並であった。果実品質は、地色、着色は平年並であり、硬度・糖度・酸度は高く食味は良好であった。

以上のことから、本年の作況は“並”である。

りんごの生育と収量・果実品質

項目		品種 ²⁾ 年次 樹齢	つがる/JM7		ハックナイン/JM7		ふじ/JM7	
			本年	平年	本年	平年	本年	平年
			14	19	7	19	7	19
生育経過	発芽期 (月日)		5. 5	4. 23	5. 3	4. 22	5. 7	4. 24
	展葉期 (月日)		5. 20	5. 6	5. 17	5. 2	5. 17	5. 4
	開花期 (月日)		6. 1	5. 23	5. 31	5. 22	6. 1	5. 23
	満開期 (月日)		6. 5	5. 28	6. 4	5. 28	6. 5	5. 29
	落花期 (月日)		6. 9	6. 3	6. 9	6. 3	6. 9	6. 4
花芽率			96. 4	91. 2	65. 6	64. 4	83. 6	61. 9
果そう結実率			72. 3	91. 9	80. 0	71. 0	82. 4	77. 5
果 ³⁾ 実体積	7月1日		7. 8	15. 0	10. 4	19. 2	7. 2	11. 6
	平年対比 (%)		52	(100)	54	(100)	62	(100)
	9月15日		220. 1	243. 9	250. 4	258. 7	178. 2	169. 9
	平年対比 (%)		90	(100)	97	(100)	105	(100)
収量	収穫日 (月日)		10. 2	10. 1	10. 31	10. 31	11. 6	11. 8
	一樹当り収量 (kg)		25. 8	26. 9	15. 0	48. 2	11. 2	37. 8
	収穫果一果重 (g)		245	297	352	320	259	241
果実品質	果実調査日 (月日)		10. 7	10. 1	11. 1	11. 1	11. 8	11. 10
	調査果一果重 (g)		276	321	327	372	273	287
	地色 (1-8)		4. 2	4. 9	3. 6	4. 0	3. 4	4. 1
	着色 (0-10)		8. 9	8. 4	7. 4	7. 4	9. 0	8. 7
	硬度 (1b)		14. 2	12. 7	13. 6	13. 0	15. 7	16. 2
	糖度 (%)		15. 4	13. 7	14. 2	13. 2	14. 9	13. 8
	酸度 (g/100ml)		0. 42	0. 32	0. 66	0. 51	0. 61	0. 46
	蜜入り (0-4)		0. 6	0. 4	2. 6	1. 2	2. 6	3. 1
	コード (0-5)		2. 9	2. 1	2. 3	1. 7	2. 9	1. 8

注1) 平年値は前12カ年中、最豊最凶を除いた10カ年平均である。

2) 「品種」は品種名/台木名として示した。

3) 果実体積 (c m³) = 4/3 π {(縦径+横径)/4}³

C 試験研究及び地域支援等活動の概要

作物開発部

作物開発部は作物グループ（畑作、果樹）、生物工学グループ、農産品質グループで構成され、畑作物及び果樹の品種、栽培に関する試験研究及び調査、バイオ技術を用いた作物のマーカー選抜、培養に関する試験研究、作物の品質に関する試験研究を行っている。本年度の試験概要と成果は次のとおりである。

畑作関係：道央以南を対象とした畑作物の品種改良と栽培技術の確立及び全道に共通する問題解決のため試験研究を進めている。

「大豆品種開発事業」では、道央以南の水田転換畑向け耐湿、耐病虫性、多収、高品質品種育成のため、14組合せを交配するとともに、雑種後代の集団、系統選抜を行った。「多収育種目標に対応した品種開発のための検定強化」では生産力検定予備試験を行い、中後期世代系統の特性を明らかにした。

地方配付の中育5系統は、奨励品種決定調査に供試するとともに、「食料自給率向上を目指した豆類優良品種の育成」あるいは「寒地向けわい化病・シストセンチュウ抵抗性強化品種・系統の育成と開花期耐湿性 QTL の探索」により特性評価を行った。この結果、中生白目大粒「中育 66 号」は、豆腐適性に不安定な面が見られたが多収であったため、継続検討とした。納豆用小粒「中育 69 号」は線虫抵抗性に優れ、収量性と加工適性が「スズマル」に近いために、継続検討とした。中生白目極大粒「中育 68 号」は成熟期が不安定なことから、中生白目大粒の「中育 70 号」と「中育 71 号」は、「トヨムスメ」に比べて大きな優点が見られないことから、廃棄とした。

大豆新品種育成に係わり、「大豆有望系統の豆腐加工適性評価とタンパク質サブユニット改変による加工適性の向上」により、中系系統の豆腐破断応力と豆乳粘度の調査を行い選抜の参考とするとともに、タンパク質サブユニットを改変した準同質遺伝子系統を養成し、その特性を調査した。「ゲノム情報を活用した豆類複合抵抗性品種の開発強化」では、DNA マーカーを利用して、耐病虫性等の選抜を実施した。「寒地向けわい化病・シストセンチュウ抵抗性強化品種・系統の育成と開花期耐湿性 QTL の探索」では、耐病性等の導入を目標とした戻し交配を実施するとともに、耐湿性 QTL 解析を行い、効

果の大きい QTL を見いだした。「湿害に強い大豆遺伝資源「植系 32 号」の耐湿性機作解明」では、湛水処理した場合の根への酸素輸送を調査し、酸素輸送に依らない耐湿性機作であることが確認された。「豆類育成系統の普及見込み地帯における実規模栽培試験」では、「中育 66 号」について長沼町で実規模栽培を行い、農家慣行栽培への適応性と対照品種と比べた場合の優良性を明らかにした。

小豆では、地域適応性検定試験に十勝農試育成の十育 5 系統を供試した。早生の「十育 160 号」は小粒による収量低下が顕著であったため廃棄とされた。機械収穫適性が期待された「十育 161 号」は、低収と挫折型倒伏による収穫ロスが懸念されるため廃棄とされた。大納言小豆系統の「十育 163 号」は倒伏が少なく、各地で多収を示したため継続検討とされた。早生の「十育 164 号」は早熟性が確認され、「十育 160 号」より粒大が改善されているため継続検討とされた。同じく早生の「十育 165 号」は「エリモショウズ」並の多収を示し、耐病性も期待できるため継続検討とされた。「道央・道南地域に適した小豆の茎疫病圃場抵抗性を含めた耐病性と加工適性の向上」において、十勝農試育成系統の道央地帯での適応性を検定した結果、耐病、多収、良質の「十系 1099 号」が次年度新配付系統とされ、3 系統は継続検討とされた。

麦類新品種育成試験では、「赤かび病に強く安定生産できるパン用春まき小麦の育種強化」を実施し、中央農試で前年選抜した春まき小麦系統等について、道央地帯での適応性を明らかにするとともに、北見農試育成系統の赤かび病抵抗性と初冬まき適性を明らかにした。「高品質で安定生産可能な道産小麦開発のための特性検定強化」、「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化」、「平成 25 年度小麦育成系統特性評価」および「春まき小麦の品種選定試験」を行い、北見農試、北農研センターあるいはホクレン育成の小麦系統について、縞萎縮病や赤さび病への抵抗性、耐穂発芽性、道央地帯での適応性を明らかにした。これらの結果から、春まき小麦では 3 系統、秋まき小麦では 1 系統が次年度新配付系統とされた。小麦奨励基本および現地調査のほか「畑作物の地域適応性検定試験」と「春まき小麦の品種選定試験」により有望系統の奨励調査を行い、春まき小麦では、供試された「北見春 71 号」と「北見春 75 号」

が各々、品質、収量性で不十分であったため、廃棄とされた。秋まき小麦では日本めん用の「北見 89 号」、超強力小麦の「北見 90 号」、「北海 262 号」、「北海 264 号」が継続とされた。日本めん用の「北見 86 号」は収量性が不安定なため、超強力「北海 263 号」は収量性、原粒蛋白等が「北海 264 号」に及ばないため廃棄とされた。

「食料自給率向上と高品質安定生産を実現する小麦・大麦品種の開発促進と普及促進」により、北見、十勝、上川農試と共同で、有望系統について、播種量、播種時期、施肥量が収量、品質等に及ぼす影響を明らかにし、「硬質秋まき小麦「つるきち」の品種特性に対応した当面の栽培法」として指導参考事項とされた。

ばれいしょ新品種育成試験では、「周年安定供給を可能とする食品加工用バレイショ品種の育成と栽培法の開発」、「ばれいしょ奨励品種決定調査」および「ばれいしょ輸入品種等選定試験」を実施し、育成系統や導入品種の道央地帯における適応性を検討した。生食用では「北海 107 号」が継続とされ、加工用では「北育 21 号」、「HP06」が廃棄、「北海 104 号」、「北海 106 号」、「CP07」が継続とされた。また供試系統のうち、「CP08」は次年度新配付系統とされた。

てんさい新品種育成試験では、「てんさい輸入品種検定試験」と「平成 25 年度テンサイ育成系統特性評価」により黒根病抵抗性検定を実施し、9 品種系統の抵抗性を評価した。また、現地試験では、累年で「HT34」は“有望”、「KWS1K234」は“やや劣る”と評価された。

そば新品種育成試験では、「平成 25 年度ソバ育成系統特性評価」において地域適応性検定を実施し、奨励格として供試した北農研センター育成の「北海 14 号」が継続検討とされ、系適格の 4 系統についても継続検討とされた。

豆類新優良品種普及促進事業では、大豆系統「中育66号」と小豆系統「十育161号」を供試して採種を行った。栽培法試験の「大豆の品種特性に応じた適正な狭畦栽培法の開発」では、畦幅、栽植密度が異なる場合の生育、倒伏、子実重および雑草抑制効果から、狭畦栽培での適正な栽植密度を明らかにし、「道央転換畑地帯の大豆狭畦栽培における適正な栽植密度」として指導参考事項とされた。

果樹関係：道内の果樹農業振興のため、品種改良および栽培法改善の試験研究を行い、良質な果実を安定生産する技術と省力・軽労化を進める技術を開発する。
品種改良試験：「おうとう品種改良試験」では、本年度は結実した交配実生の中から 5 個体を一次選抜した。ま

た、一次選抜系統から 2 系統を選抜し次年度から「HC9」「HC10」として地域適応性検定試験に供試することとした。「地域適応性検定試験」では「CHC4」、「CHC5」、「CHC6」を供試中であるが、「CHC4」は本年度で試験を中止することとした。「寒地向けりんご品種の生産安定化試験」では、導入した 23 品種の特性調査を実施し、8 品種について「りんごの品種特性」としてとりまとめ、指導参考事項となった。2 品種は試験を中止した。「リンゴ育成系統特性調査」では、農研機構・果樹研究所育成の 6 系統を供試した。「ニーズに即した高品質ぶどうの品種選定と安定生産技術の開発」では、導入した 13 品種・系統の特性調査を継続して実施し、育成中止となった 1 系統の試験を中止した。「地域適応性検定試験」では、「GHC1」を優良品種とした。「特産果樹品種比較試験」では、西洋なし、ブルーベリー、プルーンについて検討を行い、西洋なしは「西洋なしの品種特性」としてとりまとめ、指導参考事項となった。「果樹わい性台木の特性調査」では、りんごの主要品種に対する JM 台木等の特性、おうとうのわい性台木の特性について検討中である。

栽培法改善試験：「寒地向けりんご品種の生産安定化試験」では、雪害に強い耐雪型樹形および省力・低コストのジュース用りんご生産法について検討中である。「ニーズに即した高品質ぶどうの品種選定と安定生産技術の開発」では、高品質を重視した整枝法および着果管理法の検討を行っている。「高級醸造用ぶどう品種の地域適応性と高品質栽培法」では「ピノノワール」等の道内における適応性と収量を制限した場合の品質について検討中である。「ブルーベリーの高品質安定栽培技術の確立」では、簡便な整枝剪定法の検討や生育不良樹の樹勢回復方法の検討を行っている。

生物工学グループ

組織培養技術による作物新育種素材・品種の開発：

「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発と生産安定化」では、蒔培養法によりパン・中華めん用および日本めん用小麦の半数体倍加系統を作出し、DNA マーカーによる選抜を行った。

作物の遺伝子解析と利用に関する試験：水稻では、「高度安定性高品質米品種の早期総合開発」で *Pi35*、*Pi39* などのいもち病圃場抵抗性遺伝子の DNA マーカー検定を行った。「多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立」では国宝ローズ由来のアミロース低下遺伝子(*qAC9.3*)と連鎖した DNA マーカーによる分離判定・系統選抜を行った。

小麦では、「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発と生産安定化」で、DNA マーカーを用いて F1 および初中期世代の品質関連形質遺伝子、コムギ赤かび病、縞萎縮病抵抗性などの病害抵抗性遺伝子の有無を判別した。またコムギ縞萎縮病抵抗性特性検定試験をおこなった。「麦類および飼料作物の有用遺伝子の同定と DNA マーカー開発」では、コムギ縞萎縮病、コムギ赤かび病抵抗性遺伝子単離のための基本マップ作成用の材料を養成した。

大豆では、「ゲノム情報を活用した豆類複合抵抗性品種の開発強化」で、DNA マーカーを利用し、初中期世代の系統選抜および小規模生産力試験供試系統の特性評価を効率的に実施した。「寒地向けわい化病・シストセンチュウ抵抗性強化品種・育成系統と開花期耐湿性 QTL の探索」では、基幹品種等の既存品種を用いた反復戻し交配の DNA マーカー選抜および「植系 32 号」に由来する開花期耐湿性の QTL 解析を行った。「大豆有望系統の豆腐加工適性評価とタンパク質サブユニット改変による加工適性の向上」では、豆腐加工適性と関連するタンパク質サブユニットを DNA マーカーで選抜した。「シストセンチュウ抵抗性 *rhg3* 関連マーカーの開発と感受性品種への複合抵抗性導入」では、「ユキシズカ」にセンチュウレース 1 抵抗性とわい化病抵抗性を導入した戻し交配系統に十育番号を付した。「ダイズわい化病高度抵抗性遺伝子の同定」では、ダイズわい化病抵抗性候補遺伝子の発現を抑制した系統について、ダイズわい化病抵抗性検定を行った。「ゲノム情報を活用した、ダイズシストセンチュウと低温着色に強い大豆の開発」では、ダイズシストセンチュウ・レース 1 抵抗性と低温着色抵抗性を集積した大豆系統を選抜した。

小豆、菜豆では、「DNA マーカー選抜による小豆の土壌複合抵抗性系統の選抜強化」で、DNA マーカーにより落葉病レース 1、2 抵抗性検定を行うとともに、アズキ萎凋病抵抗性遺伝子と強連鎖した DNA マーカーの開発を行った。「ゲノム情報を活用した豆類複合抵抗性品種の開発強化」では、DNA マーカーを利用して、中期世代における黄化病抵抗性の選抜を行うとともに、サラダ用遺伝資源にも適用するため黄化病抵抗性 DNA マーカーの改良を行った。「小豆の耐冷性高度化を目指した選抜とその遺伝様式の解明」では解析材料の全連鎖群を対象にして DNA マーカーの多型を調査し、遺伝子型を決定した。

ばれいしょでは、「高精度 DNA マーカーを利用した馬鈴しょ複合抵抗性品種の開発強化」で、DNA マーカーによるシストセンチュウおよび Y ウイルス抵抗性選

抜を進めた。「長期貯蔵性に優れたポテトチップス用馬鈴しょ品種の開発強化」では、DNA マーカーにより早期世代系統のジャガイモシストセンチュウ抵抗性を検定した。「大豆および畑作物の有用遺伝子の同定と DNA マーカーの開発」では、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性判別マーカーを高精度化するとともに、PVY 抵抗性遺伝子単離をめざし大規模集団を用いて抵抗性遺伝子近傍での組み換え系統を選抜した。

農産品質グループ

農産品質試験：「多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術の早期確立」では、新たな業務用米評価法の開発に向けて炊飯歩留まり等の測定法について検討を進め、品種間差を検知できる選抜検定法として成果を成績会議に提出した。

「道産小麦の用途拡大に向けた「ゆめちから」の高品質安定生産及びブレンド指針の策定」では、2 カ年の現地実態調査とブレンド試験をとりまとめ、「ゆめちから」のブレンド指針と当面の栽培指針を策定した。「道産小麦の需要を拡大する中華麺・パン用品種の開発強化」では、中華めんおよびパン用高品質秋まき小麦の加工適性に関わる品質検定を実施した。

手亡あん着色機構の解明と色調変化評価法の開発では、手亡あん着色機構の要因解析を行い成績を取りまとめた。「菜豆のサラダ用加工特性の解明と加工適性・耐病性に優れる品種開発の強化」「道央・道南地域に適した小豆の茎疫病圃場抵抗性を含めた耐病性と加工適性の向上」では、それぞれの加工適性検定を実施した。

「エチレン処理による生食用馬鈴しょの長期貯蔵技術の開発」ではエチレン雰囲気下での長期貯蔵が馬鈴しょの品質に及ぼす影響を検討し成績として取りまとめた。

「食糧自給率向上を目指した豆類優良品種の育成」では、後期世代の育成材料について豆腐加工適性に係る検定分析を実施した。「ケルセチン・イソフラボンの生活習慣病予防機能の科学的エビデンス強化と高含有農作物の作出」では、品種および栽培条件による大豆中のイソフラボン含量の定量分析を実施した。

「北海道の総合力を活かした付加価値向上による食産業活性化の推進（戦略研究）」では、道総研が開発した豆類・馬鈴しょ・小麦品種を用いた新規加工製品の試作と実需者評価を実施した。また、大豆に含まれるイソフラボン含量を非破壊で迅速評価するための手法を開発し成果として取りまとめた。

遺伝資源部

遺伝資源部は、植物遺伝資源の収集、保存・管理、特性評価、素材開発の試験研究および主要な農作物の基本種子の生産・配付を行っている。

平成 25 年度の試験概要と成果は以下のとおりである。

植物遺伝資源に関する試験：「植物遺伝資源の保存管理」の「種子遺伝資源の増殖」では、収集・移管遺伝資源の一次増殖および保存遺伝資源で発芽力の低下あるいは貯蔵量の減少したものの再増殖について、水稻、小麦、豆類など合計 1,706 点を供試し、1,220 点で新規登録あるいは種子更新に必要な種子量を採種できた。未採種または採種量僅少の原因は、不出芽、成育不良、未成熟、座止、不稔等であった。「遺伝資源の保存」について、種子遺伝資源では、今年度、長期貯蔵庫に 287 点を入庫、24 点を抹消し、極長期貯蔵庫は 1,661 点を入庫した結果、それぞれ 26,275 点、20,418 点の貯蔵点数となった。現在の種子遺伝資源登録数は 26,755 点で、このうち 480 点は永久保存登録とし、極長期貯蔵庫のみの保存である。栄養体遺伝資源では、超低温によるばれいしょ 100 点を保存している。「遺伝資源の提供」は、道内外の大学、研究機関、民間企業、道内の農業改良普及センター、農業団体等 26 機関に、水稻、麦類、豆類等計 284 点（試験研究用 281 点、地域振興用 3 点、本年度は教育用と普及展示用での配付はなし）を提供した。「遺伝資源の発芽力検定」については、稲類、麦類、豆類、雑穀など合計 1,931 点について発芽力調査を行い、保存、再生産の参考とした。「遺伝資源の情報管理」では、パスポート情報のデータ追加と不備な点を補い充実を図るとともに、種子の入出庫、発芽率情報などのデータ更新を逐次行った（新規登録 287 点、入出庫管理 5,872 件）。

「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化 ―褐色雪腐病抵抗性の検定―」では、遺伝資源と交配母本等 192 点（基準品種等を含む）、育成系統 162 点（基準品種等を含む）を供試し、発病度から抵抗性を評価した。予備検定では一部に湿害による影響があったが、総じて品種間差は明らかで、試験精度は高かった。

「馬鈴しょ育種母材の超低温保存」では、平成 23 年度から供試し、超低温保存できていない 9 点と平成 24 年度から供試している 40 点の内、36 点（平成 23 年度分 7 点、平成 24 年度分 29 点）を長期保存に移すことができた。本年度、新たに育成場から送られた 38 点を無菌化・増殖し、保存条件の検討を開始した。

優良品種種子生産事業：「基本系統の選定・増殖」では、水稻「きたふくもち」、秋まき小麦「北海 262 号」について、「育種家種子の増殖」では、必要量・貯蔵経過年数等を勘案して適宜増殖・貯蔵を行った。また、原原種の生産計画に合わせて、育種家種子を配付した。

道が民間に委託・移管している原原種生産の圃場審査補助および生産物審査補助（発芽試験を含む）を実施した。

その他、食用ゆりのウイルスフリー原原種親球を維持した。

予備増殖および新優良品種普及促進事業：水稻、麦類および豆類の新品種の普及促進のため、奨励品種決定調査（2 年目以降）を実施している有望系統について種子増殖を実施した。

「予備増殖」では、水稻「空育 180 号」、「空育 181 号」、「北海 313 号」、「上育 463 号」、秋まき小麦「北海 262 号」、「北見 86 号」、春まき小麦「北見春 71 号」、大豆「中育 66 号」、「中育 68 号」、「中育 69 号」、「十育 252 号」、小豆「十育 160 号」、「十育 161 号」、小豆「十育 163 号」、菜豆「十育 A59 号」について実施し、予定の種子量をほぼ確保した。

「新優良品種普及促進事業（特別増殖）」では、水稻「北海 313 号」（道南農試担当）、「きたふくもち」（上川農試担当）、「空育 180 号」（上川農試担当）、「上育 463 号」（中央農試岩見沢試験地担当）、「空育 181 号」（中央農試岩見沢試験地担当）、「きたしずく」（中央農試岩見沢試験地担当）、秋まき小麦「つるきち」（十勝農試担当）、春まき小麦「北見春 71 号」（十勝農試担当）、大豆「中育 66 号」、小豆「十育 161 号」（中央農試担当）、大豆「十育 252 号」、小豆「十育 160 号」、菜豆「十育 A59 号」（北見農試担当）について実施し、遺伝資源部は事業実施の調整と取りまとめを行った。

その他の試験：「食用ユリ原原種のエライザ検定」では、4 種のウイルス感染の有無をエライザ法により調査した。

「水稻種子の粒厚が苗形質に与える影響の評価」では、「おぼろづき」「ほしのゆめ」において 2.1mm の篩い目で調製した種子は、種子審査における「生産物審査基準」およびその種子に由来する苗が移植時の苗形質に関わる「水稻機械移植栽培基準」を満たしたが、粒厚が薄いもののほど発芽率や苗形質が低下する傾向がみられたので、2.2mm 調製では種子数量を確保しがたい場合に限り使用するとした。「水稻種子の粒厚が発芽および苗形質に与える影響」として取りまとめ、「おぼろづき」「ほしのゆめ」などの品種に対して粒厚が薄い年次の種子調製にお

ける篩い目を選定するための参考となることから、指導参考事項となった。

生産研究部

業務用・加工用水稲品種の育成、水稻並びに転作作物の栽培技術、バイオマス活用技術及び先端技術の活用を含めた機械化技術の開発と体系化、さらに水田作地帯の農家経営、地域農業システムに関わる試験研究を担当し推進している。本年度の試験研究の概要と研究成果は以下のとおりである。

水稻新品種育成試験：北海道中央部の稲作中核地帯を対象に耐病性良品質、業務用米の品種開発を行っている。奨励品種決定試験に、「空育184号」を新たに供試するとともに、「空育180号」、「空育181号」と「空育183号」を引き続き配布系統とした。このうち、実需評価等を終了した「空育180号」ならびに「きたしずく」（空育酒177号）を北海道農業試験会議に提出し、それぞれ普及奨励、普及推進事項に認定されるとともに新たに北海道優良品種となった。

水稻栽培技術に関する研究：

「成苗ポット苗における早期異常出穂抑制技術の確立」では、早期異常出穂の発生要因を明らかにし、同症状を抑制するため、北海道水稻機械移植栽培基準に主要品種の上限葉令と育苗管理温度の目安を新たに策定し、普及推進事項となった。「多様なニーズに対応する品種改良並びに栽培技術早期確立試験」では、「ゆめぴりか」の出穂期予測モデル、出穂期後5～24日の平均気温を変数としたアミロース含有率の予測式、およびこれらを活用して出穂期から「ゆめぴりか」のアミロース含有率を収穫前に予測する方法を確立し、指導参考事項となった。新資材関連のうち「水稻除草剤」については、一発剤8剤、移植後土壌処理剤3剤、中・後期剤2剤について新たに実用可能であること、また、7剤は特殊雑草対象への拡大が可能である事を確認し、指導参考事項となった。その他、「肥効調節型緩効性肥料の水稻育苗箱表面施肥の開発」、ならびに「水稻乾田直播栽培に対する肥厚調節型被覆尿素入り肥料「セラコート」の施用技術」は、今後の資材開発の基礎資料となることを明らかにし中止した。一方、「水田における有機物の施用に関する調査」を新たに開始した。

転作作物に関する研究：

「土着菌根菌利用による大豆栽培におけるリン酸減肥技術の開発」では、大豆作付け圃場におけるアーバスキュ

ラー菌根菌の感染率の実態と、前作に宿主作物を栽培するとリン酸を現行施肥基準に対して30%減肥できる前作物を明らかにし、指導参考事項となった。「春まき小麦に対するけい酸加里肥料の施用効果」では、春まき小麦の収量・品質に対するカリ肥料としての施用効果を明らかにして、指導参考事項となった。その他、「暗きよの排水対策検討調査」では、疎水剤暗きよ機能回復手法についてとりまとめ、完了とした。「集中管理孔を有する暗渠システムを活用した転換作物の水分供給技術の実証」では、大豆への地下灌漑効果の実証と早期普及を図った。

クリーン・高度クリーン・有機農業研究：①「有機栽培トマトの導入条件と導入効果の解明」では、収益性格差の要因を明らかにし、販路拡大や販売価格向上に必要となる取り組みを示した。小規模経営が有機農業を導入・定着させるための指針として評価され、指導参考事項となった。②「クリーン農産物の流通経路における有利販売制約要因の特定と効果的対策の検討」では、YES!Clean認証を受けている場合でも、a. 小売段階まで産地名・YC表示がなされる場合、b. 小売業者のプライベートブランドとして販売されるが、産地名・YC表示はなされない場合、c. 一般農産物と区分されず価格形成に反映されない場合、があり、それぞれ異なる経済性にあることを明らかにした。

農業機械研究：①「汎用コンバインの改良によるなねの高精度化」では、サイドカッタ装着による落粒損失低減効果は確認できたが、実用化にはサイドカッタの切断精度の向上が必要と判断された。②「農作業体系における燃料消費量の評価」に関しては、トラクタ定格出力毎の燃料消費量の推定法を開発し、作業シミュレーションによる圃場作業燃費の簡易推定法を提案し、指導参考事項となった。③「高度通信制御技術を活用した次世代型ポテトプランタの開発」では、高速・高精度搬送播種機構の特性評価を行い、プロトタイプ試作機作成に反映した。④「農業機械におけるシンプル化と情報化・高度化を両立する通信制御共通化技術の開発」では、電子制御式作業機の省力効果やトラクタ・作業機間の通信共通化技術による効果を整理した。⑤「果樹園向け除草作業支援ロボットの開発」では、工試が開発したロボットの除草精度と作業能率の評価を行い、実用化に向けた課題を整理した。⑥ハイブリッド型膜モジュール等を活用した従来より精製効率の高いバイオガス精製装置(H23より継続評価)の特性、利用経費等を整理し、普及推進事項となった。

農業経営研究：①「トマトの秋季安定生産に向けた3段階密植栽培技術の開発」では、慣行ポット栽培と比較した3段階密植栽培の経済性と省力性を明らかにし、9月の出荷量の拡大を目指す産地への導入が有望であることを示した。栽培技術とともに指導参考事項となった。②「ホタテ貝殻・牛糞堆肥の安定製造技術と草地での施用法確立－開発技術の経済性と導入条件の解明」では、堆肥製造・利用システム構築に向けた課題を整理するとともに、堆肥製造・利用コストを試算した。③「農林バイオマス資源の特性評価と有効利用策の検討－新規資源作物栽培の環境・経済性評価」では、子実用とうもろこしの生産費と所得を検討するとともに、道央地域における輪作体系への導入が農家経済に及ぼす効果を明らかにし、子実用とうもろこしの栽培技術とともに指導参考事項となった。④「戸別所得保証制度下における水田作・畑作経営の規模拡大に向けた経営指標の策定」では、目標所得の達成には25～30haの経営面積を要すること、低転作率地帯では、単世代経営では労働制約の下で水稻作付拡大が困難化し、10a当り収益性が下落することを明らかにした。

バイオマス有効利用研究：①「家畜排せつ物処理における温室効果ガス排出削減方策の総合評価」では、評価対象技術を、a. 乳牛ふん尿堆肥化時の水分調整材の添加技術、b. 亜硝酸酸化細菌の豚糞への添加技術とし、現地実証試験データに基づき削減率を評価した。②「メタン濃度の変動に対応できる小型三相200Vバイオガスコジェネの技術開発」では、定格出力9.9kW、三相200Vの小型バイオガス・コージェネレーション・システムを開発し、エンジンが安定的に稼働する残留酸素濃度を検討した。③「バイオガスの地域利用計画策定手法の検討」では、調査対象としたA町において地域利用計画に必要なデータ収集と情報の可視化、GISを活用した施設立地や収集・運搬に係わる分析手法を検討した。

農業機械性能調査：「とうもろこしX線選別装置SX2550W」の性能を調査し、指導参考となった。

農業環境部

農業環境部は環境保全グループ及び栽培環境グループで構成され、農業の環境保全に関する試験研究、有機農業に関する試験研究、生産基盤及び農村環境の整備に関する試験研究、畑作物及び園芸作物の土壌肥料に関する試験研究及び依頼分析などを分担して行っている。本年度の試験概要と成果は次のとおりである。

環境保全関係：①戦略研究「地球温暖化と生産構造の変化に対応できる北海道農林業の構築 3-1)-(1)子実用とうもろこしの栽培法確立－道央地域－」では、道央地域に適する品種を選定し、窒素施肥（土壌診断）、栽植密度、収穫適期に関する試験および病害虫発生状況調査を行った。また、その結果を関連する他場の成果とともに「子実用とうもろこしの栽培法と道央地域における輪作体系への導入効果」として取りまとめ、北海道農業試験会議（成績会議）で指導参考事項として採択された。②「環境保全型有機質資源施用基準設定調査（土壌機能モニタリング調査、地力増進地域対策調査）」では、各場の農業環境関係 G と共同で全道164地点の土壌調査および土壌理化学性の分析を行い全道集約を行った。また、平成23年度までの調査で得られたデータを解析し、平成20～24年度に行った「全国農地土壌炭素調査」の成果と共に「北海道耕地土壌の理化学性の実態・変化とその対応（1959～2011年）および炭素貯留量」としてとりまとめ、北海道農業試験会議（成績会議）で指導参考事項として採択された。③「農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業（農地管理実態調査）」では、平成20～24年度に行った「全国農地土壌炭素調査」を引き継ぎ、各場の農業環境関係 G と共同で、全道253地点の土壌調査と炭素、窒素含量を分析すると共に、耕種状況と肥培管理のアンケート調査を実施し、全道分を取りまとめて（独）農業環境技術研究所に報告し、我国の土壌炭素貯留実態解明の基礎データとして活用された。④「農林水産分野における地球温暖化対策のための緩和及び適応技術の開発～農地下層における炭素長期貯留技術の開発 積雪寒冷地における土層改良による炭素貯留技術」では、土層改良（有材心土改良工やカッティングソイラ）で農地下層にすき込まれた有機質資材による炭素貯留機能を検討するとともに、農業生産や土壌環境に及ぼす影響を解析した。⑤「暗きよの排水対策検討調査」では、石狩、後志、留萌、根室、釧路地域においてモミガラや木質チップを用いた疎水材暗きよ機能の経年変化について水田農業 G と共同で調査を行い、成果を北海道農政部に報告した。⑥「農業農村整備事業等に係る土壌調査」では、各場の農業環境関係 G と共同で、全道で29地区の事業計画調査を実施した。このうち環境保全 G では、増毛町、羽幌町、岩見沢市、由仁町、北竜町の事業計画地区の土壌断面調査ならびに土壌理化学性分析を行い、各担当振興局に報告した。⑦「有機質資材等の分析試験（依頼分析）」では延べ158点の分析を行った。内訳は土壌20点、肥料77点であり、飼料および農畜産製造品又は加工品16点、その他の分析（DNA分析等）43点

は、農産品質 G、遺伝資源 G の協力を得て行った。⑧「肥料分析委託業務」では、登録肥料 7 点、収去肥料 27 点の分析を行った。⑨「多様な地域・用途に対応した飼料用とうもろこし安定栽培マップの作成」では、複数品種の飼料用とうもろこしの道央での生育特性に係るデータを取得し、畜試で解析を行った。⑩「大規模そば栽培のためのリビングマルチを活用した不耕起栽培技術の開発」では、クローバのリビングマルチを活用した新たな栽培様式の可能性を場内と現地で検討し、そば生育と収量に及ぼす影響を調査した。結果的に収量の安定性が不十分であったため試験完了とし、秋まき小麦を用いる次期課題に繋いだ。⑪「土壌環境改善が醸造用ぶどうの品質に与える影響と生産性向上のための技術開発」では、重粘質で排水性に問題を抱える空知の重粘質なぶどう園地で実態調査と改善対策を検討した。しかし、秋季の平年を上回る降雨と有材心土破碎施工の遅れにより期待した排水効果や明確な品質差は得られず、今後の改善対策の再検討が必要とされた。⑫「農薬残留対策総合調査後作物残留に係る調査」では、こまつなに土壌施用殺虫剤 2 種を供試し、環境省が全国で共通的に指示する方法に則り試料採取と分析を行って、結果を国に報告した。

栽培環境関係：①戦略研究「地球温暖化と生産構造の変化に対応できる北海道農林業の構築 3-1)-(2)新規資源作物の特性評価と栽培法 多年生草本の特性把握と導入可能性の検討」では、多年生草本の生育特性を把握し、北海道に適する草種としてススキを選定した。また、ススキ生産におけるエネルギー収支を算出しエネルギー作物としての可能性を示した。本成果は本年度農業試験会議（成績会議）において研究参考事項に採択された。②「有機栽培畑の窒素肥沃度向上を目指した緑肥と堆肥の活用法」では、窒素肥沃度向上に効果的な休閑緑肥と後作緑肥を選定するために、マメ科緑肥を中心に検討した。③「土壌診断の活用による有機栽培畑の生産安定化と環境負荷低減」については、窒素施肥対応技術の実践により、良質な有機農産物の安定生産と環境負荷の低減が両立することを実証すると共に、たまねぎ、ばれいしょの窒素施肥対応技術について検討した。④「移植たまねぎの安定生産のための窒素分施肥技術の確立」では、施肥配分・分施肥時期・肥料形態を検討した。⑤「道央・道北地域における秋まき小麦の窒素施肥技術の総合化」では、土壌型に対応した基肥窒素を設定した。播種量計算モデル、過去実績を用いた窒素施肥設計法、止葉期生育診断の適用を検討し、播種量計算と施肥設計を簡易に行うツールを作成した。本成果は本年度農業試験会議（成績会

議）において普及推進事項に採択された。⑥「転換畑における秋まき小麦「きたほなみ」の大豆畦間ばらまき栽培技術の確立」では、播種量、窒素施肥量及び起生期茎数診断などを検討した。本成果は本年度農業試験会議（成績会議）において指導参考事項に採択された。⑦「ゆめちから」の生育特性に対応した高品質・安定栽培法の確立」では、「ゆめちから」に適した播種期・播種量、窒素施肥法を検討した。⑧「硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立」では、播種期・播種量、窒素施肥が生育・収量に及ぼす影響を検討するため、場内および道央管内 3 カ所に現地試験を設置し、調査を行った。

⑨「農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業」では畑地 20 点の土壌を調査し、耕種状況と肥培管理のアンケート調査を実施した。⑩「農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業（農地管理実態調査）（基準点調査）」では、地域の標準的な作物栽培体系下での有機物管理が土壌の炭素蓄積量にどのような影響を及ぼすかについて検討した。⑪「突発及び新発生病害虫診断試験」では 3 件 9 点の診断をした。⑫「農業農村整備事業に係る土壌調査」では空知管内の 4 地区の調査をおこなった。⑬「土壌機能実態モニタリング調査」定点調査では、深川市・三笠市・栗山町で 20 地点の土壌調査および土壌理化学性の分析を行った。

病虫害部

道央 5 支庁を対象に病虫害防除技術の開発、全道に共通な病虫害の試験対応に係る調整およびクリーン農業に係わる試験研究調整をクリーン病虫害グループを中心に行っている。また、発生予察や病虫害診断業務等の植物防疫事業の一部を、本庁技術普及課との連携しながら予察診断グループが担当し、情報の収集・発信を行っている。なお、本グループは作物ウイルス病対応、薬剤抵抗性害虫対応、果樹病害に対する試験課題も担当し、さらに地域対応試験、クリーン農業技術、減農薬関連試験も継続した。

本年は「平成 25 年度の発生にかんがみ注意すべき病虫害」を含めた 8 課題を取りまとめ試験会議に提出した。

地域対応試験：①穂いもち圃場抵抗性ランクに対応した水稻の穂いもち防除基準では穂いもち圃場抵抗性”やや強”ランクの抵抗性を有する品種の穂いもち防除の考え方を整理し、指導参考事項となった。②水稻の割刈歩合ランク‘少’～‘やや少’品種に対する斑点米カメムシの要防除水準では、斑点米の主な発生要因が割刈率と

割籾発生後のカメムシの密度であることを示し、また割籾歩合ランク‘少’～‘やや少’品種における追加防除の要防除水準を設定し、指導参考事項となった。③小麦の雪腐褐色小粒菌核病および褐色雪腐病に対する殺菌剤の残効性と防除時期では、両雪腐病に対する殺菌剤の残効性を示して根雪前散布によらない防除時期を示し、普及推進事項となった。④かぼちの突起果の発生原因解明と防除対策では、本症状が細菌による果実斑点細菌病の一症状であることを明らかにして防除対策を示し、普及推進となった（一部未登録剤のため表題のみ）。⑤採苗施設と水田転換畑を利用したいちごの自立型採苗方式における病害虫管理指針では、茎頂培養を原苗として隔離生の高い採苗施設と水田転換畑を組み合わせた採苗方式について、苗伝染性の各病害感染リスクの評価と病害虫管理指針の策定し、さらにその有効性を実証し、指導参考事項となった。⑥醸造用ぶどうのつる割細菌病の病因解明と当面の対応では、原因不明のつる割症状が国内新発生の細菌によるつる割細菌病であることを明らかにして当面の対策を示し、指導参考事項となった。⑦子実用とうもろこしの栽培法と道央地域における輪作体系への導入効果（農業環境部会）では、子実用とうもろこしの栽培方法と輪作体系への導入効果と赤かび病のリスク評価を示し、指導参考事項となった。

継続中の課題に関して、水稻では「斑点米カメムシの基幹防除期における減農薬防除技術の確立」（道南農試と共同）試験において、基幹防除時期における最適防除開始時期の再検討を行い、効率的な防除法確立を目指している。とうもろこしでは、「スイートコーン褐色雪腐病腐敗病防除対策の確立」試験において、細菌による新病害の発生実態、発生生態の解明および防除対策の確立試験を開始した。馬鈴しょでは「馬鈴しょの病原ウイルスに対する特異抗体の作製と高感度検定法の確立」試験において、重要な3ウイルスについて特異的検出のためのモノクローナル抗体の作製を行っている。いんげんまめでは、「インゲンマメゾウムシのほ場寄生リスク低減対策」（十勝農試と共同）試験において、圃場における殺虫剤の有効性を査定するとともに、色彩選別も組み合わせた被害粒発生防止技術の開発に取り組んでいる。さらに「薬剤抵抗性ネギアザミウマの発生実態調査と緊急防除対策」試験では、ネギアザミウマの合成ピレスロイド剤抵抗性個体群発生圃場における防除対策の構築に取り組んでいる。

育種協力試験：有望系統の病虫害抵抗性検定を実施している。小麦では赤かび病の抵抗性の育成、かび毒低減対策試験を実施している。馬鈴しょでは品種・系統の特

性検定のうちウイルス病について担当している。さらに線虫関係では「小豆におけるダイズシストセンチュウ抵抗性の特性解明と育種の加速化」において、あずきで見いだされたダイズシストセンチュウ抵抗性について、遺伝様式の解明と抵抗性の解明に携わっている。

また、地域対応の手段のひとつとして、新たな殺菌剤、殺虫剤の計 92 点について実用性評価試験を実施した。

有機・クリーン農業技術開発：有機農業技術開発も視野に入れた「施設栽培ハウレンソウのコナダニ被害を抑制する土壌管理法の確立」試験では、土壌中のコナダニ個体群を制御し作物体の被害を回避する化学農薬に頼らない新たな土壌管理法開発に取り組んでいる。特別栽培農産物のための高度クリーン農業技術の開発では、「キャベツ」で試験を実施しており、本年度からは「ブロッコリー」についても試験を開始した。また、たまねぎでは「たまねぎ突発性病害の灰色腐敗病およびべと病に対する効率的防除体系確立」に関する試験を上川農試・花野セ生産環境 G と協同して担当している。

緊急対応試験：突発病害虫の診断は、普及センターや農業団体等から野菜・畑作・花きを主体として 235 件の依頼点数があった。

発生予察調査：「平成 25 年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫」では次年度注意すべき病害虫として、「秋まき小麦の赤さび病」、「秋まき小麦のなまぐさ黒穂病」、「春まき小麦のムギキモグリバエ」、「たまねぎおよびねぎのネギハモグリバエ」、「各種作物のヨトウガ」を提案し、指導参考事項とされた。新発生病害虫として病害 12 点、虫害 13 点を記載した。さらに、各農試および北海道農政部技術普及課と協同して、16 作物 86 病害虫の発生状況調査を実施し、発生予察情報として、予報 6 回、月報 6 回、発生概況 1 回および注意報 4 回を作成し、北海道病害虫防除所に提出した。

企画調整部地域技術グループ

企画調整部地域技術グループは、農政部食の安全推進室技術普及課中央農試駐在の上席普及指導員、主任普及指導員および主査（地域支援）とともに「技術普及室」を構成し、平成21年度までの技術普及部の機能を引継ぎ、石狩、後志、空知、胆振及び日高の5振興局の地域農業技術支援会議における地域農業支援及びニーズの把握を実施したほか、技術体系化課題の実施、普及センターへの技術支援及び農業試験場における地域対応の窓口機能を果たした。

地域農業技術支援会議： 地域農業技術支援会議では、農業技術に関する情報交換と地域課題の収集を行い、その内容に応じて、対応方針、課題の優先度、振興局、普及センター、農業試験場の役割分担などを整理しながら、課題解決に向けた協議を行い、具体的な活動を行っている。

1) 地域要望課題に対する取り組み

地域課題を収集し、支援会議を構成する研究・普及・行政の各機関が一体となって取り組む課題(地域プロジェクト課題) および研究・普及・行政の各機関が役割分担して取り組む課題、地域で対応すべき課題等に整理分類し対応方針を検討した。

2) プロジェクト課題解決の取り組み

収集した地域課題や地域で重要課題となっているものの中から優先すべき課題を取り上げ、解決の主体となる機関や方法を選択し、構成3者の協力体制の下で改善のためのプロジェクト課題を設定し取り組んだ。

3) 地域が総力を挙げた取り組みへの誘導

地域課題の解決に向けて地域関係者会議を開催し、地域への説明と意見交換を行いながら関係機関の協力・分担を含め、合意形成を進めてきた。

4) 中央農業試験場における活動体制

農業試験場が道央5振興局の地域農業技術支援会議に参画して地域支援に対応するため、場内の「中央農試地域支援運営会議」等により、地域課題の検討、プロジェクト課題への参画、研究ニーズ等に対応した。

技術体系化チーム：技術体系化チームは、地域農業に

密着した試験研究の実施、研究成果の迅速な普及を図ることを目的とし、技術普及室の研究職員と普及指導員および研究グループの研究職員によって組織されたチームにより技術の体系化・現地実証試験を進めた。同時に、実証研究の推進にあたっては、農業改良普及センター、地元市町村、農業関係機関、農家、振興局との協議会などを開催して、試験計画及び成果の検討を行い、試験結果の迅速な普及を図った。

平成25年度は、以下の体系化チームによる現地実証普及活動を実施した。

1) 革新的技術導入による地域支援 空知地域におけるたまねぎの安定生産に向けた土壌管理技術の現地実証(H25年～H26年)

2) 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化(4. 硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立)(H25年～H27年)

3) 道産小麦の用途拡大に向けた「ゆめちから」の高品質安定生産及びブレンド指針策定(H24年～H26年)

普及センター等への技術支援：農業改良普及センターが効率的・効果的な普及活動を展開し迅速な課題解決を図るため、その普及課題に応じて支援要請を受け、専門項目に関する技術支援を行った。また農業試験場等で開発された新技術の普及・定着と普及指導員の資質向上を図るため、普及指導員研修、新技術伝達研修などを実施した。各振興局における地域課題解決研修ではそれぞれの研修課題に参画し課題解決に向けた活動を実施した。

D 試験研究及び地域支援等活動

試験研究及び地域支援等活動 (各部担当課題の項目)

作物開発部

a) 作物グループ

畑作関係

I 品種改良試験

1. 大豆新品種育成試験

(1) 大豆品種開発事業

(平成 25 年～ 31 年)作物グループ (畑作)
(十勝農試と共同)

目 的：耐冷性、耐湿性、病虫害抵抗性等の各種障害抵抗性に強く、加工適性に優れた系統を選抜するための材料を養成し、新優良品種育成の基盤を作る。

(2) 食料自給率向上を目指した豆類優良品種の育成

(平成 23 年～ 25 年)作物グループ (畑作)
(農産品質グループ、十勝農試と共同)

目 的：後期世代系統の特性を調査し、耐湿性、病害虫抵抗性等の各種障害抵抗性に強く、高品質で安定多収な豆腐、煮豆用品種を育成する。新品種の普及を支援する。

(3) 多様な育種目標に対応した品種開発のための検定強化

(平成 25 年)作物グループ (畑作)
(水田農業グループ、農研本部、上川農試、
十勝農試、北見農試と共同)

目 的：効率的で精度の高い検定試験を行うことにより、優良な新品種を早期に育成する。

(4) ゲノム情報を活用した豆類複合抵抗性品種の開発強化

(平成 25 年～ 27 年)作物グループ (畑作)
(生物工学グループ、十勝農試と共同)

目 的：DNA マーカーを積極的に活用して障害抵抗性等の選抜、検定を強化し、育種の効率化を図ることによって、大豆品種の早期育成を促進する。

(5) 大豆有望系統の豆腐加工適性評価とタンパク質サブユニット改変による加工適性の向上

(平成 23 ～ 25 年)作物グループ (畑作)
(農産品質・生物工学グループ、十勝農試と共同)

目 的：中期世代系統の豆腐加工適性について明らかにし、豆腐加工適性が優れる品種育成を加速する。子実蛋白質の質的改変による豆腐加工適性の向上効果を明らかにし、高品質で多収な品種の育成を推進する。

(6) 大豆奨励品種決定現地調査等

(昭和 51 年～継続)作物グループ (畑作)

目 的：大豆の有望系統について、現地における適応性を検定し、優良品種決定に資する。

(7) 寒地向けわい化病・シストセンチュウ抵抗性強化品種・系統の育成と開花期耐湿性QTLの探索

(平成 23 年～ 26 年)作物グループ (畑作)
(生物工学グループと共同)

目 的：病虫害抵抗性を付加した「スズマル」戻し交配系統について、品種化に必要な特性の調査を行う。既存品種に DNA マーカーと戻し交配を使って、病虫害抵抗性を付加する。「植系 32 号」の開花期耐湿性の QTL 解析を行う。

(8) 湿害に強い大豆遺伝資源「植系32号」の耐湿性機作解明

(平成 23 年～ 25 年)作物グループ (畑作)
(作物研、中央農研、東北農研と共同)

目 的：「植系 32 号」の過湿条件に対する根系の応答反応について詳細に調査して機作を特定し、大豆耐湿性育種を推進する。

(9) 豆類育成系統の普及見込み地帯における実規模栽培試験

(平成 25 年)作物グループ (畑作)
(十勝農試と共同)

目 的：豆類の有望系統について、普及見込み地帯で農家慣行法による試験栽培を行い、普及性を明らかにし、優良品種決定に資する。

2. 豆類新品種育成試験

(1) 道央・道南地域に適した小豆の茎疫病圃場抵抗性を含めた耐病性と加工適性の向上

(平成 23 年～ 25 年)作物グループ (畑作)

(農産品質グループ、十勝農試、上川農試と共同)

目 的：道央、道南地域向けの茎疫病圃場抵抗性を含む土壌病害複合抵抗性を有し、規格内収量が高く、外観品質と加工適性に優れた普通小豆および大納言小豆の選抜を強化する。

(2) 小豆地域適応性検定試験

(昭和 40 年～継続) 作物グループ (畑作)

目 的：小豆の有望系統について地域適応性を検定し、優良品種決定に資する。

(3) 小豆奨励品種決定調査

(昭和 46 年～継続) 作物グループ (畑作)

目 的：小豆の有望系統について現地における適応性を検討し、優良品種決定に資する。

3. 麦類新品種育成試験

(1) 赤かび病に強く安定生産できるパン用春まき小麦の育種強化

(平成 24 年～25 年) 作物グループ (畑作)

(農産品質グループ、北見農試と共同)

目 的：赤かび病抵抗性が「春よ恋」「はるきらり」より優る“やや強”以上など病害・障害抵抗性に優れ、製パン作業時の生地物性が「春よ恋」並以上に改良された良質パン用春まき小麦を選抜する。

(2) 高品質で安定生産可能な道産小麦開発のための特性検定強化

(平成 22 年～25 年) 作物グループ (畑作)

(農産品質グループ、北見農試、十勝農試と共同)

目 的：育成系統の適応性を効率的に評価し、高品質で安定生産できる小麦品種を早期に開発するため、国費の特性検定で充当されていない病害・障害抵抗性検定を行う。

(3) 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化

(平成 25 年～27 年) 作物グループ (畑作)

(生物工学・農産品質・予察診断・クリーン病害虫・栽培環境・地域技術グループ、北見・上川・十勝農試と共同)

目 的：高品質で、穂発芽、コムギ縞萎縮病などの抵抗性が優れる小麦を開発促進する。

(4) 平成25年度小麦育成系統特性評価

(平成 25 年) 作物グループ (畑作)

(上川農試と共同)

目 的：北農研が育成した秋まき小麦の有望系統について、生産力その他諸特性を調査し、適応性を検定する。

(5) 食料自給率向上と高品質安定生産を実現する小麦・大麦品種の開発促進と普及促進

(平成 23 年～25 年) 作物グループ (畑作)

(北見農試、上川農試、十勝農試と共同)

目 的：北見農試で育成された有望系統について、生産力およびその他の諸特性を調査し、道央地域における適応性を検定する。

(6) 小麦奨励品種決定基本調査

(昭和 45 年～継続) 作物グループ (畑作)

目 的：試験研究機関により育成された秋まきおよび春まき小麦有望系統について、その特性、生産力、地域適応性を検定し、優良品種決定に資する。

(7) 秋播小麦奨励品種決定現地調査

(昭和 29 年～継続) 作物グループ (畑作)

目 的：試験研究機関により育成された有望系統について、現地における適応性を検定し、優良品種決定に資する。

(8) 畑作物の地域適応性検定試験 (小麦現地)

(平成 15 年～継続) 作物グループ (畑作)

目 的：試験研究機関により育成された有望系統について、現地における適応性を検定し、優良品種決定に資する。

(9) 春まき小麦の品種選定試験

(平成 23 年～27 年) 作物グループ (畑作)

(クリーン病害虫グループ、北見・上川・十勝農試と共同)

目 的：民間育成系統について、その特性、生産力および地域適応性を検定し、優良品種決定に資する。

4. ばれいしょ新品種育成試験

(1) 周年安定供給を可能とする食品加工用バレイショ品種の育成と栽培法の開発

(平成 23 年～25 年) 作物グループ (畑作)

(予察診断グループ、北見農試、北農研センターと共同)

目 的：北農研センターおよび北見農試で育成した有望系統について、道央地域における適応性を検定する。

(2) ばれいしょ奨励品種決定調査

(昭和 42 年～継続) 作物グループ (畑作)

目 的：北農研および北見農試で育成した有望系統について、道央地域の現地における適応性を検定し、優良品種決定に資する。

(3) ばれいしょ輸入品種等選定試験

(平成 23 年～27 年) 作物グループ (畑作)

目 的：生食用、加工用の有望系統について、道央地域における適応性を検定し、優良品種決定に資する。

5. てんさい新品種育成試験

(1) 平成25年度テンサイ 育成系統特性評価

(平成 25 年) 作物グループ (畑作)

(北見農試と共同)

目 的：北農研センター育成系統の黒根病抵抗性を検定し、優良品種決定に資する。

(2) てんさい輸入品種検定試験

(平成 21 年～25 年) 作物グループ (畑作)

目 的：輸入品種の黒根病抵抗性を検定するとともに、現地における適応性を検定し、優良品種決定に資する。

6. 特用作物新品種育成試験

(1) 平成25年度ソバ育成系統特性評価

(平成 25 年) 作物グループ (畑作)

目 的：そば育成系統の地域適応性を検定する。

(2) 畑作物の地域適応性検定試験 (そば現地)

(平成 22 年～継続) 作物グループ (畑作)

目 的：試験研究機関により育成されたそば有望系統並びに主要品種について、主要産地における地域適応性を検定し、優良品種決定に資する。

II 豆類新優良品種普及促進事業

(昭和 41 年～継続) 作物グループ (畑作)

目 的：豆類の有望系統について種子増殖を行い、新品種の早期普及を図る。

III 栽培法試験

(1) 大豆の品種特性に応じた適正な狭畦栽培法の開発

(平成 23 年～25 年) 作物グループ (畑作)

(地域技術グループと共同)

目 的：主要品種等の狭畦栽培における生育特性を明らかにし、望ましい栽植密度を明らかにする。現地の狭畦栽培

における肥培管理、機械作業等の情報を収集、整理し、現状把握と問題点を整理する。

果樹関係

I 果樹品種改良試験

1. おうとう品種改良試験

(平成 2 年～継続) 作物グループ (果樹)

目 的：本道に適した大玉で良品質の優良な品種を育成する。

2. 寒地向けりんご品種の生産安定化試験

(平成 20 年～27 年) 作物グループ (果樹)

(1) 寒地向け新品種選定試験

目 的：りんご導入品種・系統の本道における適応性を明らかにし、本道に適する品種を選定する。

3. ニーズに即した高品質ぶどうの品種選定と安定生産技術の開発

(平成 20 ～27 年) 作物グループ (果樹)

(1) ニーズに即した醸造用および生食用ぶどうの新品種選定

目 的：北海道で高品質果実を安定生産できる醸造用および生食用ぶどう品種を選定する。

4. 果樹地域適応性検定試験

(昭和 56 年～継続) 作物グループ (果樹)

目 的：選抜された有望系統・品種の道内各地における適応性を明らかにする。

5. 特産果樹品種比較試験

(昭和 38 年～継続) 作物グループ (果樹)

目 的：国内・国外から導入した西洋なし、ブルーベリー、プルーン品種について、本道における適応性を明らかにする。

6. 果樹わい性台木の特性調査

(昭和 55 年～継続) 作物グループ (果樹)

目 的：国の内外で育成された台木の特性と本道における適応性を明らかにする。

7. 平成25年度リンゴ育成系統特性調査

(平成 25 年) 作物グループ (果樹)

目 的：農研機構果樹研究所育成のりんご新系統について北海道における適応性を検討する。

II 果樹栽培法改善試験

1. 寒地向けりんご品種の生産安定化試験

(平成 20 年～ 27 年) 作物グループ (果樹)

(2) 寒地における安定生産・省力管理技術の開発

目 的：耐雪型樹形および省力・低コスト栽培法を検討する。

2. ニーズに即した高品質ぶどうの品種選定と安定生産技術の開発

(平成 20 ～ 27 年) 作物グループ (果樹)

(2) 醸造用ぶどうの高品質安定生産を目指した収量制限栽培法の開発

目 的：早期成木化を目的とした栽培管理技術、果実品質と収量の安定性を重視した着果管理技術を検討。

(3) 生食用ぶどう有望系統の特性を生かした省力栽培技術の確立

目 的：遺伝的無核ぶどう系統「GHC1」の植物調節剤による着果管理技術を検討する。

3. 高級醸造用ぶどう品種の地域適応性と高品質栽培法

(平成 25 年～ 28 年) 作物グループ (果樹)

目 的：高級醸造用ぶどう品種の道内産地での適応性および栽培法について検討する。

4. ブルーベリーの高品質安定栽培技術の確立

(平成 24 年～ 29 年) 作物グループ (果樹)

目 的：高品質果実を安定的に生産するために整枝剪定方法や樹勢回復方法、樹形の再構築法を確立する。

b) 生物工学グループ

I 組織培養技術による作物新育種素材・品種の開発

1. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発と生産安定化

1) 道産小麦の需要を拡大する中華めん・パン用品種の開発促進

(平成 25 年～ 27 年) 生物工学グループ
(北見農試と共同)

(1) パン・中華めん用品質の選抜強化

③ 半数体育種法を活用した良質系統の開発促進

目 的：加工適性が優れる硬質小麦品種開発を促進するため、有望な交配組み合わせについて薬培養法等を用いて半数体倍加系統を作出して早期に遺伝的な固定をはかり、育

種年限を短縮化する。この際、作出個体の品質関連遺伝子の有無をDNAマーカーで検定し、効率的な選抜を行う。

2) 日本めん用等小麦の開発促進と生産安定化

(1) 気象変動に対応したコムギ縞萎縮病および赤かび病抵抗性の選抜強化

① DNAマーカーと半数体育種法を活用した抵抗性系統の選抜強化

目 的：コムギ縞萎縮病、赤かび抵抗性がともに“やや強”の抵抗性を有する系統の選抜を強化する。

II 作物の遺伝子解析と利用に関する試験

1. 高度安定性高品質米品種の早期総合開発

3) 中期世代の耐病性・耐虫性強系統の選抜強化

(平成 20 年～ 25 年) 生物工学グループ
(水田農業グループ、上川農試と共同)

目 的：Pi35などのいもち病圃場抵抗性遺伝子導入を目的とした育成材料の DNA マーカー検定を行い、中期世代の耐病性選抜を強化する。

2. 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立

1) 特Aブランド米品種並びに栽培技術の早期開発

(平成 21 年～ 25 年) 生物工学グループ
(上川農試と共同)

目 的：適度なアミロース低下効果を持つ *qAC9.3* を極良食味品種の育成に利用する。DNA マーカーを用いて分離系統の排除および早期固定化を行うとともに、薬培養 A2 世代の選抜を行う。

3. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発と生産安定化

1) 道産小麦の需要を拡大する中華めん・パン用品種の開発促進

(平成 25 年～ 27 年) 生物工学グループ
(北見農試と共同)

(1) パン・中華めん用品質の選抜強化

① 生地物性改良による選抜強化

目 的：パン・中華めん用硬質小麦に対する需要に応えるため、加工適性が優れる硬質小麦品種開発を促進する。

(2) パン・中華めん用小麦の雨害等耐性強化

② 赤かび病抵抗性等の検定強化

目 的：硬質小麦の安定生産のため、雨害や茎葉病害に対する耐性が優れる小麦の開発を強化する。

2) 日本めん用等小麦の開発促進と生産安定化

(平成 25 年～ 27 年) 生物学グループ
(作物開発グループと共同)

(1) 気候変動に対応したコムギ縞萎縮病および赤かび病抵抗性の選抜強化

② 現地多発圃場におけるコムギ縞萎縮病抵抗性の検定

目 的：コムギ縞萎縮病がやや強以上の抵抗性有する系統の選抜を強化する。

(2) 日本めん用および菓子用品質の選抜強化

目 的：品質に優れ、病害抵抗性に優れたポスト「きたほなみ」品種の早期開発のため、製粉性や製めん性に関する選抜を強化する。菓子用小麦品種の開発を促進する。

4. 麦類および飼料作物の有用遺伝子の同定とDNAマーカーの開発

TRS1003 麦類縞萎縮病抵抗性遺伝子の単離と機能解明

(平成 25 年～平成 29 年) 生物学グループ
(生物研、岡山大学、福岡県総試と共同)

目 的：コムギ縞萎縮病抵抗性品種である「Madsen」が有する 2DL、3BS 上の抵抗性遺伝子を単離する。

TRS1004 コムギ赤かび病抵抗性遺伝子の単離と機能解明

(平成 25 年～平成 29 年) 生物学グループ
(ホクレン農総研、九州沖縄農研と共同)

目 的：6B 染色体上のコムギ赤かび病抵抗性遺伝子を単離する。

5. 寒地向けわい化病・シストセンチュウ抵抗性強化品種・育成系統と開花期耐湿性QTLの探索

(平成 23 年～ 26 年) 生物学グループ
(作物グループと共同)

目 的：既存品種に DNA マーカーと戻し交配を使って、耐病虫害抵抗性を付加する。「植系32号」由来の開花期耐湿性についてQTL解析を行う。

6. 大豆有望系統の豆腐加工適性評価とタンパク質サブユニット改変による加工適性の向上

(平成 23 年～ 25 年) 生物学グループ
(作物グループ、農産品質グループと共同)

目 的：子実タンパク質の質的改変による豆腐加工適性の向上効果を明らかにするため、DNA マーカーを利用して解析材料を養成する。

7. シストセンチュウ抵抗性 *rhg3* 関連マーカーの開発と感受

性品種への複合抵抗性導入

(平成 23 年～ 26 年) 生物学グループ
(十勝農試と共同)

目 的：DNAマーカー選抜を利用した戻し交配により、複合抵抗性を導入した有望系統を育成する。

8. ダイズわい化病高度抵抗性遺伝子の同定

(平成 23 年～ 25 年) 生物学グループ

目 的：「WILIS」に由来するダイズわい化病高度抵抗性遺伝子 *Rsdv1* を同定する。

9. ゲノム情報を活用した、ダイズシストセンチュウと低温着色に強い大豆の開発

(平成 25 年) 生物学グループ
(十勝農試と共同)

目 的：遺伝子座が同じ染色体にあるダイズシストセンチュウ・レース1抵抗性と低温着色抵抗性について、組換え系統の表現型の確認およびゲノム情報を利用した周辺領域の解析を行う。

10. ゲノム情報を活用した豆類複合抵抗性品種の開発強化

(平成 25 年～ 27 年) 生物学グループ
(作物グループ、十勝農試と共同)

目 的：ゲノム情報を活用しながら抵抗性遺伝資源の探索および新たなマーカーの開発を行うとともに、既存のマーカーも利用して豆類の耐病虫性・障害抵抗性を効率的に選抜する。

11. DNAマーカー選抜による小豆の土壌病害複合抵抗性系統の選抜強化

(平成 23 年～ 25 年) 生物学グループ
(十勝農試、上川農試と共同)

目 的：DNA マーカーを利用して効率的かつ高精度に落葉病抵抗性を選抜するとともに、アズキ萎凋病抵抗性の新たなマーカー開発を行う。

12. 小豆の耐冷性高度化を目指した選抜とその遺伝様式の解明

(平成 25 年～ 26 年) 生物学グループ
(十勝農試と共同)

目 的：効率的な選抜手法の開発のため、高度耐冷性とその他不良形質に関する連鎖地図を作成する。

13. インゲンマメかさ枯病菌の道内レース同定および室内

検定手法の開発

(平成 25 年～ 26 年) 生物工学グループ
(クリーン病害虫グループ、十勝農試と共同)

目 的：抵抗性遺伝資源の利用に向けた道内発生レースを同定し、圃場を使用しない通年で利用できる室内検定手法を開発する。

14. 高精度DNAマーカーを利用した馬鈴しょ複合抵抗性品種の開発強化

(平成 21 年～ 25 年) 生物工学グループ
(北見農試と共同)

目 的：DNA マーカー選抜に供試する個体数を前課題より増加し、複合抵抗性を持つ品種の開発を強化する。

15. 長期貯蔵性に優れたポテトチップス用馬鈴しょ品種の開発強化

2) ジャガイモシストセンチュウ抵抗性選抜試験

(平成 23 年～ 27 年) 生物工学グループ
(北見農試と共同)

目 的：長期貯蔵可能なポテトチップ原料用の有望系統の速やかな品種化と普及のために、DNA マーカーにより早期世代系統のジャガイモシストセンチュウ抵抗性を検定する。

16. 大豆及び畑作物の有用遺伝子の同定とDNAマーカーの開発

SFC3002 バレイショ重要病害虫の抵抗性遺伝子を選抜するDNAマーカーの開発及びそれらを利用した育種素材の開発

(平成 25 年～ 29 年) 生物工学グループ
(北農研、長崎県農技センターと共同)

目 的：PVY抵抗性遺伝子、PCN抵抗性遺伝子を選抜する既存のDNAマーカーをより高精度化し育種の効率化を図る。

c) 農産品質グループ

1. 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立

1) 特Aブランド米品種並びに栽培技術の早期開発

(2) 特Aブランド米品質評価

イ) 育成系統特A米品質検定

(平成 21 年～ 25 年) 農産品質グループ
(上川農試と共同)

目 的：新規食味評価手法による良食味米育成系統の品質検定を実施し、品種開発に寄与する。

2) 安定多収業務用・加工用米品種並びに栽培技術の早期開発

(3) 業務用・加工用米品質評価

(平成 21 年～ 25 年) 農産品質グループ
(水田農業グループと共同)

目 的：業務用米の新たな品質評価法の開発を行う。また、業務用・加工用途米育成系統の品質評価を実施し、品種開発に寄与する。

2. 道産小麦の需要を拡大する中華麺・パン用品種の開発強化

1) 中華麺・パン用等小麦の品質選抜強化

(平成 25 年～ 27 年) 農産品質グループ
(北見農試、生物工学グループと共同)

目 的：中華めん・パン用高品質秋まき硬質小麦の品質選抜をより効率的に行うため、加工適性に関わる要因について解析する。

2) 生産安定化に向けた障害耐性品種の開発強化

(平成 25 年～ 27 年) 農産品質グループ
(北見農試、生物工学グループと共同)

目 的：春まきおよび秋まき小麦品種系統のαアミラーゼ活性検定を実施する。

3. 手亡あん着色機構の解明と色調変化評価法の開発

(平成 23 ～ 25 年) 農産品質グループ
(十勝農試、農産品質グループと共同)

目 的：煮熟後の粒色、煮崩れ等の加工適性を明らかにし、選抜に利用可能な加工適性評価法を開発する。

4. 菜豆のサラダ用加工特性の解明と加工適性・耐病性に優れる品種開発の強化

(平成 25 ～ 27 年) 農産品質グループ
(十勝農試、農産品質グループと共同)

目 的：煮熟後の粒色、煮崩れ等の加工適性を明らかにし、選抜に利用可能な加工適性評価法を開発する。

5. エチレン処理による生食用馬鈴しょの長期貯蔵技術の開発

(平成 22 ～ 25 年) 農産品質グループ
(十勝農試と共同)

目 的：エチレン雰囲気下での長期貯蔵が馬鈴しょの品質に及ぼす影響を検討する。

6. 北海道の総合力を活かした付加価値向上による食産業活性化の推進（戦略研究）

(3) 加工適性や機能性に優れた農産物の選別技術の確立と高付加価値食品の製品化

(平成 22 年～ 26 年) 農産品質グループ
(北見農試・食加研と共同)

目的：道産農産物（豆類・馬鈴しょ・小麦）の有する機能性や加工適性を活かした加工食品づくりを推進するため、加工原料の適性に応じた選別が容易となる技術を開発する。また、最新の加工技術や評価技術を活用して、良食味、高機能性等の特性を有する新規食品群を開発し、その普及を図ることにより、道内食産業の活性化と一層の競争力向上に資する。

7. 道産小麦の用途拡大に向けた「ゆめちから」の高品質安定生産及びブレンド指針の策定

(平成 24 年～ 26 年) 農産品質グループ
(十勝農試・上川農試・食加研と共同)

目的：超強力秋まき小麦品種「ゆめちから」の高品質安定栽培技術を明らかにするとともに、中力粉とのブレンド使用する場合の技術指針を策定する。

8. ケルセチン・イソフラボンの生活習慣病予防機能の科学的エビデンス強化と高含有農作物の作出

(平成 23 年～ 25 年) 農産品質グループ
(北見農試と共同)

目的：高イソフラボン大豆品種である「ゆきぴりか」を主な素材とし、栽培条件によるイソフラボン含量の変動性を明らかにするとともに、イソフラボン含量の全国統一分析法確立に関するバリデーション分析に参画する。

9. 食糧自給率向上を目指した豆類優良品種の育成

(平成 23 年～ 25 年) 農産品質グループ
(十勝農試と共同)

目的：豆腐加工適性に優れた品種開発のための品質分析を行う。

遺伝資源部

I 植物遺伝資源に関する試験

1. 植物遺伝資源の保存管理

(平成 22 年～ 26 年) 遺伝資源 G

(1) 種子遺伝資源の増殖

目的：新規導入した種子遺伝資源の一次増殖を図るとともに、保存量あるいは発芽力の低下した登録済の種子遺伝資源を再増殖する。

(2) 遺伝資源の保存

目的：植物遺伝資源の保存と品種開発や研究利用に供するため、遺伝資源の長期保存を図る。

(3) 遺伝資源の提供

目的：道総研農試、道内外の関係機関、研究機関等からの依頼（試験研究用、教育用、普及展示用、地域振興用）に応じて、道総研農試植物遺伝資源提供要領に則り、保存遺伝資源を提供する。

(4) 遺伝資源の発芽力検定

目的：新規導入及び長期貯蔵の遺伝資源種子について、定期的（保存開始後 3,000 日程度経過後）に発芽力を検定し、再生産の実施に関する情報を得る。

(5) 遺伝資源の情報管理

目的：植物遺伝資源の利活用を図るため、そのパスポートデータ、在庫管理情報、特性情報を収集し、保存、管理する。

2. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化

一褐色雪腐病抵抗性の検定一

(平成 25 年～ 27 年) 遺伝資源 G
(北見農試等と共同)

目的：パン・中華めん用小麦の改善点である耐雪性のうち、褐色雪腐病の抵抗性について検定し、“中”を目標に系統の選抜を強化する。

3. 馬鈴しょ育種母材の超低温保存

(平成 23 ～ 27 年) 遺伝資源 G

目的：馬鈴しょの新たな品種開発には多くの遺伝資源の利用が必須であるため、超低温保存により、それらの遺伝資源保存の一部を中央農試遺伝資源部で分担し、長期安定保存を図るとともに品種開発に利用する。

II 優良品種種子生産事業

1. 基本系統・育種家種子の維持増殖

(昭和 27 年～継続) 遺伝資源 G

目的：水稻、麦類および豆類の優良品種について、基本系統の選定により育種家種子を作出するとともに、基本系統と育種家種子の維持増殖を行う。

2. 食用ゆりウイルスフリー原原種親球の維持

(昭和 53 年～継続) 遺伝資源 G

目的：ウイルスフリー化処理を行った食用ゆりの原原種球を維持する。

III 予備増殖および新優良品種普及促進事業

(昭和 41 年～継続) 遺伝資源 G

目的：水稻、麦類および豆類の新品種の普及促進のため、

担当農試において優良品種候補の有望系統について、原種圃および一般採種圃へ供給する種子を予め準備するために増殖を行う。

IV その他の試験

1. 食用ユリ原原種のエライザ検定

(平成8年～継続) 遺伝資源G

目的：ホクレン農業協同組合連合会が実施している食用ユリ原原種生産の増殖球について、エライザ法を用いてウイルス病の感染がないことを確認する。

2. 水稻種子の粒厚が苗形質に与える影響の評価

(平成24年～25年) 遺伝資源G

目的：粳の粒厚の違いが種子の品質や発芽、苗形質に及ぼす影響を明らかにする。

生産研究部

I 水稻新品種育成試験

1. 水稻品種開発事業

(平成25年～平成31年) 水田農業グループ

目的：本道中央部は、初期生育が不良でいもち病が多発しやすい生育環境にある。このため、耐冷良質で、なおかつ初期生育が旺盛でいもち病耐病性を具備した道央地帯向けの中晩生品種を育成する。

2. 高度安定性高品質米品種の早期総合開発

(3) 中期世代の耐病性・耐虫性強系統の選抜強化

(平成20年～25年度) 水田農業グループ

目的：中期世代の耐病性・耐虫性強系統選抜を強化することにより、良食味と耐病性・耐虫性を併せ持つ品種育成を目指す。

(4) 中期世代の業務用良食味系統の選抜強化

(平成20年～25年度) 水田農業グループ

目的：中期世代の食味検定を強化し、業務用良食味系統の選抜を行い、北海道米全体の安定生産に寄与する業務用良食味品種を開発する。

3. 水稻直播栽培用高度安定性良食味品種の開発促進

(2) 育成系統の直播栽培による地域適応性検定試験

(平成21年～25年度) 水田農業グループ

目的：上川農業試験場で育成された系統について、直播栽培による生産力検定試験を行い、道央地帯における適応性を検定し、直播栽培に適した良食味品種育成の資とする。

4. 耐冷性といもち病抵抗性を兼ね備えた極良食味米及び業務用米品種の開発とその普及

I. 寒地における安定良質水稻新品種の開発

2) 業務用及び加工用品種の開発

(1) 中生業務用及び中生酒造好適米に替わる有望系統の特性調査

(平成23年～25年度) 水田農業グループ

目的：当场育成系統の特性を明らかにする。

5. 耐冷性といもち病抵抗性を兼ね備えた極良食味米及び業務用米品種の開発とその普及

I. 寒地における安定良質水稻新品種の開発

3) 有望系統の早期開発のための特性検定試験及び選抜技術の向上

(1) 特性検定試験

(平成23年～25年度) 水田農業グループ

目的：北農研センターで育成した有望系統について、道央地帯における適応性を検定するとともに、北農研センターおよび上川農試で育成した有望系統について、穂いもちに対する抵抗性を検定し、品種育成の資とする。

6. 水稻奨励品種決定調査

(昭和29年～継続) 水田農業グループ

目的：道内各試験機関で育成した有望品種・系統の特性を明らかにし、奨励品種決定の資とする。

7. 水稻奨励品種決定現地調査

(昭和29年～継続) 水田農業グループ

目的：道内各試験機関で育成した有望な系統について、地域適応性と生産力を調査し、奨励品種並びにその普及範囲決定の資とする。

8. 水稻新優良品種普及促進事業

(昭和42年～継続) 水田農業グループ

目的：新品種を早急に普及するため、有望系統の種子を予備増殖する。

II クリーン・高度クリーン・有機農業技術開発

1. 有機栽培トマトの導入条件と導入効果の解明

(平成23年～25年) 生産システムグループ

目的：有機栽培トマトの収益性を明らかにするとともに、有機栽培トマトの導入が経営にもたらす所得増効果と効果が発現するための経営的な条件を明らかにする。

2. クリーン農産物の流通経路における有利販売制約要因の特定と効果的対策の検討

(平成25年～26年) 生産システムグループ

目的：クリーン農業の普及・拡大を促進するため、流

通段階におけるクリーン農産物の差別化に向けた必要条件を提示する。

Ⅲ 多様なニーズに対応する品種改良並びに栽培技術早期確立

1. 特Aブランド米品種並びに栽培技術の早期開発

3)「ゆめぴりか」のブランド産地育成指針の策定

(平成21年～25年度 上川農試生産環境グループと共同)

水田農業グループ

目 的：気象・土壌条件の異なる地域の「ゆめぴりか」を広く調査し、食味・品質管理目標を設定する。また、アミロース含量を制御し、その他の栽培特性上の短所を出させないための栽培技術指針を明らかにする。

2. 安定多収業務用・加工用米品種並びに栽培技術の早期開発

1) 業務用・加工用米品種の開発促進

(平成21年～25年) 水田農業グループ

目 的：安定多収業務用・加工用米品種の開発を促進する。「きらら397」に代わる多収で耐冷性に優れた業務用品種や、一般炊飯米以外の用途の冷凍米飯等加工用品種や高品質な酒造好適米を早急に開発する。

Ⅳ 水稻栽培研究

1. 成苗ポット苗における早期異常出穂抑制技術の確立

(平成23年～25年度 上川農試生産環境グループと共同)

水田農業グループ

目 的：成苗ポット苗移植栽培における早期異常出穂の発生要因を解析し、早期異常出穂のリスクが低い苗形質を明らかにするとともに、これに対応する北海道水稻機械移植栽培基準を策定する。

2. 水稻乾田直播栽培に対する肥効調節型肥料「セラコート」の施用技術

(平成23年～25年度) 水田農業グループ

目 的：乾田直播における肥効調節型肥料「セラコート」の施用効果を明らかにする。

3. 肥効調節型緩効性肥料の水稻育苗箱表面施肥の開発

(平成25年～27年度) 水田農業グループ

目 的：育苗箱表面施肥の効果と、これによる側条施肥減肥可能量を明らかにするとともに、効果を発揮させるために望ましい施肥から田植えまでの日数を、苗の種類(成苗・中苗)を変え、各苗の種類に適した肥効調節型緩効性肥料で明らかにする。

Ⅴ その他水田関連事業

1. 積雪寒冷地における土層改良による炭素貯留技術

(平成22年～26年度、環境保全グループと共同)

水田農業グループ

目 的：積雪寒冷地帯である北海道において、土層改良や暗渠などの農地整備を活用し、農地下層に有機質資材による炭素を長期に貯留する技術を開発するとともに、農業生産や土壌環境に及ぼす影響を明らかにする。

2. 暗きよの排水対策検討調査委託業務

暗きよの排水対策検討調査

(平成22年度、環境保全グループと共同)

水田農業グループ

目 的：疎水剤暗きよ整備圃場における排水機能低下要因を明らかにし、簡易な土壌調査による機能診断を取り入れた、排水機能低下要因に対応した機能回復手法を確立する。

3. 農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業(農地管理技術検証)

水田における有機物の施用に関する調査

(平成25年～28年度) 水田農業グループ

目 的：土壌や気象条件が異なる積雪寒冷地である北海道の水田地帯において、有機物施用に伴う炭素貯留とメタン・一酸化二窒素排出のトレードオフの関係を調査する。また、温室効果ガスの吸収・排出と合わせ、農業生産性確保の観点から、より望ましい営農体系を検証する。

Ⅵ 転作作物等の栽培研究

1. 大豆・麦等需要拡大対策及び生産体制強化対策

集中管理孔を有する暗渠システムを活用した転換作物の水分供給技術の実証

(平成25年度) 水田農業グループ

目 的：現地圃場において転作作物に対する集中管理孔を活用した地下灌漑の実証試験を行うことで、地下灌漑技術の速やかな現地導入を図る。

2. 新たな行政ニーズに対応した緊急技術開発促進事業 土着菌根菌利用による大豆栽培におけるリン酸減肥技術の開発

(平成23年～25年度 十勝農試生産環境グループと共同)

水田農業グループ

目 的：多様な土壌・栽培条件下におけるAM菌(アーバスキュラー菌根菌)の感染と大豆のリン酸減肥反応を検討し、リン酸減肥可能量およびその条件を明らかにする。

3. 春まき小麦に対するけい酸加里肥料の施用効果

(平成23年～25年度) 水田農業グループ

目 的：春まき小麦の収量・品質に対するけい酸加里肥

料の施用効果を検討する。

Ⅶ 農業機械研究

1. 汎用コンバインによるなたね収穫の高精度化

(平成25年) 生産システムグループ

目的：汎用コンバインによるなたね収穫における収穫損失の低減を図るために、刈取部の改良の効果や刈り高さの影響を明らかにする。

2. 農作業体系における燃料消費量の評価

(平成23年～25年) 生産システムグループ

十勝農試生産システムグループ

根釧農試地域技術グループ

目的：農作業におけるエネルギーコストや農業分野が排出する温暖化ガス発生量推定の基礎となる燃料消費量を作業負荷条件と燃料消費量の関係から推定する手法を開発する。

3. 高度通信制御技術を活用した次世代型ポテトプランタの開発

(平成24～26年度) 生産システムグループ

工業試験場情報システム部

目的：ISO-BUS通信により播種を高精度に制御するプランタ通信制御ユニットとこれを利用した高精度・高能率全粒たねいも対応ポテトプランタの播種機構を開発し、これを基に四半期のベースとなるプロトタイプを製作する。

4. 農業機械におけるシンプル化と情報化・高度化を両立する通信制御共通化技術の開発

(平成24～25年度) 生産システムグループ

目的：水田・転換畑用機械について通信制御技術の共通化による効果の検証を行う。

5. 果樹園向け除草ロボットの研究開発6) 果樹種、栽培様式に対応した効率的な除草機能の検討と評価

(平成23～25年) 生産システムグループ

工業試験場情報システム部

目的：果樹園における除草作業の支援を目的として試作・開発される自走式ロボット及び関連技術を確立するため、試作機の圃場試験により有効性を検証する。

Ⅷ 農業経営研究

1. トマトの秋季安定生産に向けた3段密植栽培技術の確立

(平成23年～25年)

花・野菜技術センター花き野菜グループ

生産システムグループ

目的：慣行ポット苗に替わりセル成形苗を密植で直接定植し、9月以降に収穫を開始し第3果房まで収穫する作型の開発を行ない、経営改善効果を検証する。

2. 地球温暖化と生産構造の変化に対応できる北海道農林業の構築

農林バイオマス資源の特性評価と有効利用策の検討

(1) 新規資源作物栽培の環境・経済性評価

(平成23年～25年) 生産システムグループ

目的：道央水田地帯の土壌物理性改善を図るため、子実とうもろこしを栽培し、家畜用飼料として供給することについて実証地域を対象として経済性を明らかにし、温暖化負荷の評価を行なう。

3. ホタテ貝殻・牛糞堆肥の安定製造技術と草地での施用法確立

(4) 開発技術の経済性と導入条件の検討

(平成23年～26年) 生産システムグループ

目的：開発された「ホタテ貝殻・牛糞堆肥」製造技術の経済性を評価するとともに、ホタテ貝殻・牛糞堆肥の地域循環資源利用モデルを構築し、開発技術の地域への導入効果・費用を試算するとともに、導入条件を明らかにすることにより、事業化への基礎資料とする。

4. 戸別所得保障制度下における水田策・畑作経営の規模拡大に向けた経営指標の策定

(平成24～26年度) 生産システムグループ

十勝農試生産システムグループ

目的：北海道の主要水田作地帯と畑作地帯を対象に、現状の経営耕地規模における戸別所得補償制度導入の影響を評価する。さらに、大規模水田作経営モデルと大規模畑作経営モデルを構築し、戸別所得補償制度下における規模拡大の推進に向けた個別経営体の経営指標を策定する。

Ⅸ バイオマスの有効利用に係る研究

1. 家畜排せつ物処理における温室効果ガス排出削減方策の総合評価

(平成22年～26年) 生産システムグループ

目的：実証もしくは開発中のGHG削減技術を基軸とした、家畜排せつ物起源のGHG削減量を評価して全国レベルの削減策として提案する。

2. メタン濃度の変動に対応できる小型三相200Vバイオガスコジェネの技術開発

(平成25年) 生産システムグループ

目的：メタン濃度の変動に対応でき、市販機の半分以下の定格出力9.9kW、三相200Vのコージェネレーション

・システムを開発し、その性能を評価する。

3. バイオガスの地域利用計画策定手法の検討

(平成25年) 生産システムグループ

目的：具体的な地域を対象に、バイオガスの地域利用計画に必要なデータを収集し、GIS上で情報を可視化するとともに、導入可能性を判断するための評価手法を検討する。

X 農業機械性能調査

1. トラクタ及び作業機械施設性能試験

A. とうもろこしX線選別装置「SX2550W」

(昭和54年～継続) 生産システムグループ

目的：新規に導入されるトラクタ、作業機、施設などの性能を明らかにし、導入利用上の参考に供する。

XI 新農業資材実用化試験

1. 除草剤及び生育調節剤

1) 水稲用除草剤

(平成22年～継続) 水田農業グループ

目的：新水稲除草剤の実用性を検討する。

農業環境部

I. 環境保全に関する調査及び試験

1. 地球温暖化と生産構造の変化に対応できる北海道農林業の構築 3-1) -(1) 子実用とうもろこしの栽培法確立一道央地域一

(平成 21 ～ 25 年度) 環境保全 G

(クリーン病害虫 G と共同)

目的：道央地域に適する品種を選定し、窒素施肥（土壌診断）、栽植密度、収穫適期に関する試験および病害虫発生状況調査を行う。また、現地圃場における導入効果実証試験（収量、土壌環境及び作付け体系改善効果等の解析）を行う。

2. 環境保全型有機質資源施用基準設定調査（土壌機能モニタリング調査、地力増進地域対策調査）

(平成 11 年度～) 環境保全 G、栽培環境 G

(各場の農業環境関係 G と共同)

目的：営農活動が土壌のもつ環境保全機能、物質循環機能などに及ぼす影響を評価し、土壌特性の変化を経年的に明らかにする。また、昭和 59 年に施行された地力増進地域指定制度の下で、指定地域に対する地力増進を図るための必要な調査を実施する。

3. 農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業（農地管理実態調査） (平成 25 ～ 32 年) 環境保全 G、栽培環境 G (各場の農業環境関係 G と共同)

目的：国際指針に準じた温室効果ガスの吸収量算定方式に基づく土壌データ収集のために、国内の農地土壌炭素の実態調査が求められている。このため、農耕地における土壌炭素の貯留量と営農管理による変動を明らかにする。

4. 農林水産分野における地球温暖化対策のための緩和及び適応技術の開発 12110 農地下層における炭素長期貯留技術の開発 積雪寒冷地における土層改良による炭素貯留技術

(平成 22 ～ 26 年) 環境保全 G

(水田農業 G と共同)

目的：積雪寒冷地帯である北海道において、土層改良や暗渠などの農地整備を活用し、農地下層に有機質資材による炭素を長期に貯留する技術を開発するとともに、農業生産や土壌環境に及ぼす影響を明らかにする。

5. 暗きよの排水対策検討調査

(平成 25 年) 環境保全 G

(水田農業 G と共同)

目的：モミガラ、木質チップ、ビリ砂利などの各種疎水材について、耐用年数の把握や機能保全のための調査を行う。

6. 農業農村整備事業に係る土壌調査

(昭和 40 年～) 環境保全 G、栽培環境 G

(各場の農業環境関係 G と共同)

目的：道営農業農村整備事業における水田、畑地、草地の土地改良事業の地区計画樹立にあたり、適切な土地改良方策を実施するための指針を示すため、土壌調査を行う。また、整備済み地域における経済効果を検討するため土壌調査を行う。

7. 有機質資材分析（依頼分析）

(明治 41 年～) 環境保全 G

目的：農業関連団体、自治体、民間会社、農業者、一般人等の依頼により、土壌、肥料、農畜産物等について、専門的知識、経験と分析機器を用いて各種分析を行う。

8. 肥料分析

(平成元年～) 環境保全 G

目的：北海道農政部の委託により、収去肥料、登録肥料についての分析業務を肥料取締法に基づいて行い、分析結果を報告する。

9. 多様な地域・用途に対応した飼料用とうもろこし安定栽培マップの作成

(平成 25～27 年度) 環境保全 G

(畜試・根釧農試・上川農試・北見農試と共同)

目的：飼料用とうもろこしの生育、登熟と気象条件の関係モデルを作成し、用途別安定栽培マップを開発すると共に、品種熟期の統一表示法を策定する。

10. 大規模そば栽培のためのリビングマルチを活用した不耕起栽培技術の開発

(平成 24～25 年度) 環境保全 G

(地域技術 G と共同)

目的：そばがクローバとの生育競合に優る、そばの播種期、播種方法およびクローバ品種を検討する。

11. 土壌環境改善が醸造用ぶどうの品質に与える影響と生産性向上のための技術開発

(平成 25 年度) 環境保全 G

(作物 G・農産品質 G と共同)

目的：重粘土の醸造用ぶどう園地において、土壌水分環境がぶどうの収量および品質に及ぼす影響と、安価で簡便な排水改良工法による排水性改善効果を検討する。

12. 農薬残留対策総合調査 後作物残留に係る調査

(平成 25 年度) 環境保全 G

目的：土壌に残留した農薬が後作物に与える影響を的確に把握する手段を確立するための基礎データを収集することにより、後作物残留の評価法の確立を目指す環境省の施策に貢献し、農作物の基準値超過リスクを減少させる。

II. 栽培環境に関する調査及び試験

1. 地球温暖化と生産構造の変化に対応できる北海道農林業の構築 3-1) - (2) 多年生草本の特性把握と導入可能性の検討

(平成 21 年～25 年) 栽培環境 G

目的：多年生草本の生育特性や養分吸収特性を把握するとともに、それらの栽培法を検討し、北海道に適した好適草種を選定する。

2. 有機栽培畑の窒素肥沃度向上を目指した緑肥と堆肥の活用法

(平成 23～26 年) 栽培環境 G

目的：有機栽培畑において、効率的に窒素肥沃度を向上させるための緑肥と堆肥の活用法を開発する。

3. 土壌診断の活用による有機栽培畑の生産安定化と環

境負荷低減

(平成 23～26 年) 栽培環境 G

目的：窒素施肥対応技術の実践により、良質有機農産物の低コスト安定生産と窒素溶脱などの環境負荷の低減が両立できることを実証する。また、たまねぎ、ばれいしょに対する窒素施肥対応技術を新たに開発する。

4. クリーン農業普及拡大促進事業 1) 移植たまねぎの安定生産のための窒素施肥技術の確立

(平成 25～27 年度) 栽培環境 G

(北見農試と共同)

目的：たまねぎの安定生産および環境への窒素負荷の低減を図る効率的な施肥法として、現行の基肥を基本とする体系に代わる窒素施肥技術を確立する。

5. 道産小麦の需要を拡大する品質向上・安定化技術の開発促進 3. 高品質低コスト安定生産のための栽培技術の確立

1) 道産小麦安定供給のための栽培技術の確立

I 道央・道北地域における秋まき小麦の窒素施肥技術の総合化

(平成 22～24 年度) 栽培環境 G

(地域技術 G・上川農試と共同)

目的：道央・道北地域における秋まき小麦の高品質安定生産を図るために、土壌・生育診断の活用や肥料の効率的利用により窒素施肥法を高度化するとともに、これら技術を組み合わせて窒素施肥技術を総合化する。

6. 道産小麦の需要を拡大する品質向上・安定化技術の開発促進 3. 高品質低コスト安定生産のための栽培技術の確立

1) 道産小麦安定供給のための栽培技術の確立 II 転換畑における秋まき小麦「きたほなみ」の大豆畦間ばらまき栽培技術の確立

(平成 22～24 年度) 栽培環境 G

(技術体系化チームと共同)

目的：秋まき小麦の高品質安定生産を図るために、「きたほなみ」の栽培特性に合った大豆畦間ばらまき栽培技術を確立する。

7. 道産小麦の用途拡大に向けた「ゆめちから」の高品質安定生産及びブレンド指針の策定 1) 「ゆめちから」の生育特性に対応した高品質・安定栽培法の確立

(平成 24～26 年度) 栽培環境 G

(地域技術 G・十勝農試・上川農試と共同)

目的：「ゆめちから」の生育特性に応じた安定栽培法を明らかにし、用途別評価基準値を満たすための播種期・播種

量・窒素施肥法等を提示する。

8. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化 1) パン・中華めん用小麦の開発促進と普及支援 (4) 硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立

(平成 25 ～ 27 年度) 栽培環境 G
(地域技術 G・十勝農試・北見農試と共同)

目 的：硬質秋まき小麦「つるきち」の安定多収、適正タンパク質含有率が確保できる栽培法を確立する。また、生産実績を活用した窒素施肥設計技術の「つるきち」への適用性を検討し、汎用性の高い窒素施肥設計ツールを提示する。

9. 突発及び新発生病害虫診断試験

(昭和 50 年度～) 栽培環境 G
(クリーン病害虫 G・予察診断 G と共同)

目 的：突発または新発生病害虫の診断を行い、農作物の被害を最小限にとどめる。

病虫害部

予察診断グループ

I 水稲病害虫試験

1. 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立

2. 安定多収業務用・加工用米品種並びに栽培技術の早期開発 2) 業務用・加工用米安定性強化

(4) 病害虫抵抗性ランクに対する圃場レベルでの実用性評価
(平成 21 年～ 25 年) クリーン病害虫 G
(上川農試生産環境 G と共同)

目 的：いもち病と斑点米（割粃歩合）の抵抗性ランクに対して圃場レベルでの抵抗性を確認し評価することで病害虫抵抗性選抜の効率化を図る。

2. 斑点米カメムシの基幹防除期における減農薬防除技術の確立

(平成 24 年～ 26 年) クリーン病害虫 G
(道南農試生産環境 G と共同)

目 的：斑点米カメムシによる斑点米の形成時期を明らかにして、基幹防除期における防除開始適期を解明し、効率的な防除法を確立する。

II 畑作病害虫試験

1. 北海道の春まき小麦地帯におけるT-2トキシン、HT-2ト

キシシン産生菌の分布実態の解明

(平成 25 年～ 29 年) クリーン病害虫 G

目 的：これまでその実態が不明であった、石狩・空知地方を中心とした春まき小麦地帯における小麦のT-2トキシン、HT-2トキシン汚染に關与する*Fusarium*属菌（赤かび病菌）の分布実態を明らかにする。

2. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化

1) パン・中華めん用小麦の開発促進と普及支援

(2) パン・中華めん用小麦の雨害等耐性強化

2) 赤かび病抵抗性等の検定強化

(2) 赤かび病抵抗性検定

(平成25年～27年) クリーン病害虫 G
(北見農試等と共同)

目 的：赤かび病は病原菌が産生するかび毒（デオキシニバレノール；DON）の暫定基準値が設定され、重要病害となっている。本病に対する小麦の抵抗性は十分とはいえず、抵抗性の優れる品種開発が求められている。そこで、早い世代からのDNAマーカー選抜の利用や抵抗性検定により、効率的に赤かび病抵抗性“やや強”以上および「春よ恋」よりもDON汚染程度の低い系統を選抜する。

3. 春まき小麦の品種選定試験

(平成 23 年～ 27 年) クリーン病害虫 G
(作物 G 等と共同)

目 的：ホクレン育成系統の特性、生産力および地域適応性を検定し、奨励品種決定に資する。

4. 地球温暖化と生産構造の変化に対応できる北海道農林業の構築

3-1) -①子実とうもろこしの栽培法確立—道央地域—

(平成 21 年～ 25 年) クリーン病害虫 G
(環境保全 G 等と共同)

目 的：道央地域に適する品種を選定し、窒素施肥、栽培密度、収穫適期に関する試験および病害虫発生状況調査を行う。また、現地圃場における導入効果実証試験を行う。

5. 小豆におけるダイズシストセンチュウ抵抗性の特性解明と育種の加速化

(平成 24 年～ 26 年) クリーン病害虫 G
(十勝農試豆類 G 等と共同)

目 的：道内ダイズシストセンチュウ個体群に対する抵抗性の評価および抵抗性の要因を検討するとともに、栽培前後の土壌中の線虫密度を比較することにより、小豆遺伝資源のダイズシストセンチュウ抵抗性の特性を明らかにする。

6. インゲンマメかさ枯病菌のレース同定および室内抵抗性検定手法の開発

(平成 25 年～ 26 年) クリーン病害虫 G
(中央農試生物工学 G・十勝農試豆類 G 等と共同)

目 的：抵抗性遺伝資源の利用に向けた道内発生レースを同定し、圃場を使用しない通年で利用できる室内検定手法を開発する

7. インゲンマメゾウムシのほ場寄生リスク低減対策

(平成 24 年～ 26 年) 予察診断 G
(十勝農試生産環境 G と共同)

目 的：インゲンマメゾウムシのインゲンマメほ場における寄生リスク軽減対策を明らかにする。

8. 馬鈴しょの病原ウイルスに対する特異抗体の作製と高感度検定法の確立

(平成 22 ～ 25 年) 予察診断 G
目 的：ばれいしょの重要な 3 ウイルスについて、それぞれの外被タンパクを大腸菌に発現させ、これを用いて各ウイルスに特異性の高いモノクローナル抗体の作製を行う。

9. 周年安定供給を可能とする加工用バレイショ品種の育成と栽培法の確立

1. 北海道向け病害虫抵抗性食品加工用品種の育成と栽培法の確立

4. 有望系統の病害虫抵抗性評価

(平成 23 年～ 25 年) 予察診断 G
目 的：ばれいしょ育成系統のウイルス病に対する抵抗性を明らかにし、品種育成に資する。

10. 馬鈴しょ輸入品種等選定試験

(平成 23 年～ 27 年) 予察診断 G
目 的：ばれいしょ輸入品種等のウイルス病に対する抵抗性を明らかにし、品種育成に資する。

Ⅲ 園芸病害虫試験

1. 採苗施設と水田転換畑を利用したいちごの自立型新採苗方式の確立 (平成 23 年～ 25 年) 予察診断 G

(クリーン病害虫 G、花・野セ生産環境 G と共同)
目 的：茎頂培養親株を元に、採苗施設と水田転換畑を組み合わせた自立型新採苗方式において、BL0、ウイルス病および炭疽病の各育苗段階における感染リスク評価と媒介虫動態の解明を行い、その有効性を実証する。

2. たまねぎ突発性病害の灰色腐敗病およびべと病に対す

る効率的防除体系確立

(平成 23 年～ 26 年) クリーン病害虫 G
(北見農試・花野セ生産環境 G と共同)

目 的：たまねぎ灰色腐敗病およびべと病の多発要因を明らかにし、効率的な防除体系を確立する。

3. かぼちゃの突起果の発生原因解明と防除対策の確立

(平成 23 年～ 25 年) クリーン病害虫 G
目 的：かぼちゃ突起症状の原因菌を明らかにし、原因菌の発生生態の解明、防除対策を明らかにすることによって本症の発生を軽減し、かぼちゃの安定生産を図る。

4. 薬剤抵抗性ネギアザミウマの発生実態調査と緊急防除対策

(平成 24 年～ 26 年) 予察診断 G
目 的：合成ピレスロイド剤抵抗性ネギアザミウマによる被害に早急に対応するため、全道的な発生実態を把握し、たまねぎ、ねぎ、キャベツにおける既存の防除体系を基本にした緊急防除対策として代替薬剤の活用法を提案する。

Ⅳ 果樹病害虫試験

1. 醸造用ぶどうの安定生産を阻害する病害対策

(平成 23 年～ 25 年) 予察診断 G
(クリーン病害虫 G、作物 G、地域技術 G と共同)
目 的：道内の醸造用ぶどうで被害の大きい根頭がんしゅ病および国内で新発生の B B G 類似症に対する総合的防除技術を確立して安定生産に資する。

Ⅴ クリーン農業開発促進事業

1. 特別栽培農産物のためのばれいしょ疫病の防除体系の確立と現地実証

(平成 23 年～ 25 年) クリーン病害虫 G
(十勝農試生産環境 G と共同)
目 的：疫病の感受性品種におけるばれいしょの疫病に対する化学合成農薬を慣行レベルに対し 5 割以上削減した減農薬防除技術を開発する。

2. 特別栽培農産物のためのキャベツ病害虫の防除体系

(平成 23 年～ 26 年) クリーン病害虫 G
目 的：野菜類の中でも化学合成農薬の使用回数が多いキャベツについて、化学合成農薬を 5 割以上削減した高度クリーン農業技術を開発し、特別栽培キャベツの生産安定化を図る。

Ⅵ 有機農業技術開発推進事業

1. 施設栽培ハウレンソウのコナダニ被害を抑制する土壤管理法の確立

(平成 25 年～ 27 年) クリーン病害虫 G

目的：有機栽培を含む施設栽培ハウレンソウにおいて、土壌中のコナダニ個体群を制御し作物体の被害を回避する、化学農薬に依らない新たな土壌管理法を開発する。

VII 農業資材に関する試験

1. 新農業資材の実用化試験

(1) 殺菌剤・殺虫剤

(昭和 44 年～継続) クリーン病害虫、予察診断 G
(各農試病虫部門と共同)

目的：殺菌剤と殺虫剤について、各種病害虫に対する防除効果を査定し、実用性について検討する。

VIII 作物病害虫診断試験

1. 農作物病害虫診断試験

突発病害虫および生理障害

(昭和 50 ～継続)

予察診断 G、クリーン病害虫 G
(各農試病虫部門と共同)

目的：突発的に発生する病害虫による被害を防止するため、それらの診断を行うとともに、道内で新たに発生した病害虫の情報を記録し蓄積する。

IX 病害虫発生予察および植物防疫事業

1. 病害虫発生予察調査

(昭和 19 年～継続) 予察診断 G

(各農試病虫部門、北海道農政部技術普及課と共同)

目的：植物防疫法に基づいて、指定及び指定外病害虫の発生状況を調査して関係機関に情報提供し、病害虫防除の適正化を図る。

企画調整部地域技術グループ

I 地域農業技術支援会議の活動

1. 中央農試の地域支援体制

農業試験場が道央 5 振興局の地域農業技術支援会議に参画して地域支援に対応するため、中央農業試験場内に設置された運営体制である「地域支援運営会議」を平成 25 年 4 月 15 日に開催し、支援会議の活動、プロジェクト課題の進捗状況と成果、普及センターへの支援等について協議した。

2. 地域要望課題の収集と研究ニーズの検討

地域農業技術支援会議で収集した地域要望課題数と、それらのうち研究ニーズに分類された課題数(カッコ内)

は以下のとおり。

空知地域農業技術支援会議：8 課題 (5 課題)

石狩地域農業技術支援会議：10 課題 (9 課題)

後志地域農業技術支援会議：3 課題 (2 課題)

胆振地域農業技術支援会議：0 課題 (0 課題)

日高地域農業技術支援会議：7 課題 (2 課題)

3. 地域農業技術支援会議によるプロジェクト課題

(1) 土壌透排水改善技術の現地実証①そば(空知地域農業技術支援会議) H24～25 年度

目的：空知管内には粘質な土壌が広く分布しており、透排水性改善対策が必要なほ場が多い。さらに近年、多雨や長雨が頻発する傾向にあり、それに伴い畑作、露地園芸作物では湿害が多発している。そのため、深川市宇摩地区のそばほ場において土壌透排水性改善技術(大規格明渠、サブソイラ、カッティングドレイン)を実施し、それらがそばの多収に貢献することを実証する。

(2) 土壌透排水改善技術の現地実証②たまねぎ(空知地域農業技術支援会議) H24～26 年度

目的：空知管内には粘質な土壌が広く分布しており、透排水性改善対策が必要なほ場が多い。さらに近年、多雨や長雨が頻発する傾向にあり、それに伴い畑作、露地園芸作物では湿害が多発している。そこで、本課題では空知地域のたまねぎ圃場において、排水改良を含めた各種土壌管理技術の有効性を現地実証する。

(3) 水稻直播栽培技術の展示実証(空知地域農業技術支援会議) H24～26 年度

目的：担い手の減少と高齢化、1 戸当たり作付面積の拡大、温暖化の進行等の変化から導かれる 10 年後・20 年後の地域農業の姿を想像した中で、将来的に空知農業を維持するために今どのような技術を導入しなければならないかを支援会議メンバー、指導農業士、JA 職員等と十分に話し合い、水稻直播栽培導入の必要性が高いとの結論を得たことから、平成 25 年度から水稻直播栽培の展示実証を深川市内で実施する。

(4) 石狩北部地域における秋まき小麦「きたほなみ」の安定確収技術の確立(石狩地域農業技術支援会議) H24～25 年度

目的：「きたほなみ」導入後の 3 年間は、多収性が発揮されていない。低収要因は、極端な気象経過の影響の他、は種量や肥培管理も考えられる。当地域に適したは種量と追肥体系を明らかにし、安定多収栽培法を確立する。

(5) たまねぎほ場の透排水改善(石狩地域農業技術支援会議) H24～25 年度

目的：札幌市では古くからたまねぎ栽培が行われているが、下層土の粘質が強いため透排水性が悪化し、湿害によりたまねぎの生育が抑制され、収量性、収益性が低下している。高齢化により大がかりな再投資が困難なため、

簡易な透排水性改善方法を検討する。

(6) 西胆振地域における秋まき小麦「つるきち」の高品質安定栽培法の確立（胆振地域農業技術支援会議） H25年度

目的：縞萎縮病発生地帯である西胆振地域では、「きたもえ」を作付しているが、近年気象変動により容積重が低下するなど品質基準を満たせない状況が増えている。このため「きたもえ」の品質不良の欠点を補った「つるきち」が優良品種として認定されたことから、地域にあった起生期以降の追肥量を検討し、高品質安定生産の栽培法を確立する。

4. 各支庁地域農業技術支援会議の活動状況

(1) 空知地域農業技術支援会議

事務局会議等(12回)、3者会議(1回)によりプロジェクト課題の進行管理、地域要望課題の整理等を実施した。
1月10日に開催した地域関係者会議（長沼町、滝川市）では支援会議の活動成果等を報告するとともに意見交換を実施した。

(2) 石狩地域農業技術支援会議

事務局会議等(8回)、3者会議(2回)によりプロジェクト課題の進行管理、地域要望課題の整理等を実施した。
3月7日に開催した地域関係者会議（北広島市）では支援会議の活動成果等を報告するとともに意見交換を実施した。

(3) 後志地域農業技術支援会議

事務局会議等(9回)、3者会議(1回)によりプロジェクト課題の進行管理、地域要望課題の整理等を実施した。
3月6日に開催した地域関係者会議（倶知安町）では支援会議の活動成果等を報告した。

(4) 胆振地域農業技術支援会議

事務局会議等(8回)、3者会議(1回)によりプロジェクト課題の進行管理、地域要望課題の整理等を実施した。
3月18日に開催した地域関係者会議（室蘭市）では支援会議の活動成果等を報告するとともに意見交換を実施した。また、「つるきち」ラーメンの試食を行った。

(5) 日高地域農業技術支援会議

事務局会議等(9回)、3者会議(2回)によりプロジェクト課題の進行管理、地域要望課題の整理等を実施した。
3月4日に開催した地域関係者会議（新ひだか町）では支援会議の活動成果等を報告するとともに意見交換を実施した。

II 技術体系化チーム

1. 革新的技術導入による地域支援 空知地域におけるたまねぎの安定生産に向けた土壌管理技術の現地実証

担当機関：技術体系化チーム（地域技術G、栽培環境G）
協力分担：空知農業改良普及センター、JAいわみざわ、

スガノ農機

実施期間：H25年～H26年

目的：たまねぎの生産性向上を図り安定化させるため、排水改良や輪作等の土壌管理技術を効果的・効率的に導入・実証する。

2. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化

(4)硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立

担当機関：技術体系化チーム（地域技術G、栽培環境G）

協力分担：空知農業改良普及センター

実施期間：H25年～H27年度

目的：硬質秋まき小麦「つるきち」の安定多収、適正タンパク質含有率が確保できる栽培法を確立する。また、生産実績を活用した窒素施肥設計技術の「つるきち」への適用性を検討し、汎用性の高い窒素施用設計ツールを提示する。

3. 道産小麦の用途拡大に向けた「ゆめちから」の高品質安定生産及びブレンド指針策定

1)「ゆめちから」の生育特性に応じた高品質・安定栽培法の確立

担当機関：中央農試技術体系化チーム（地域技術G、農産品質G、栽培環境G）

協力分担：石狩農業改良普及センター、J A道央、北海道農業研究センター

実施期間：H22年～H26年度

目的：「ゆめちから」の生育特性に応じた安定栽培法を明らかにし、用途別評価基準値を満たすための播種期・葉資料及び窒素施肥法等を提示する。

III 普及センターへの技術支援等

1. 普及センターに対する支援要請など連携活動

年度当初に各普及センターから技術支援の要請を受け、普及センター主任普及指導員と実施内容を協議し対応した。

要請課題数

空知普及センター： 8課題

石狩普及センター：13課題

後志普及センター：10課題

胆振普及センター： 8課題

日高普及センター： 4課題

また、158件の病虫害や生理障害等の診断依頼に対応した。

（上記の数字は、農政部食の安全推進室技術普及課中央農試駐在の普及指導員が対応した課題数・件数を含む）

2. 普及指導員研修支援

(1) 技術普及課が実施する普及指導員研修

技術普及課が実施する普及指導員スペシャリスト機能強化研修などの研修計画作成、研修時の講師などに対応した。

- ・専門技術研修（稲作、土壌・病害虫、果樹）
- ・高度専門技術研修（稲作、畑作、クリーン農業、経営）

(2) 新技術伝達研修

中央農試駐在の普及指導員と連携し、振興局が主催する研修会において、平成25年度北海道農業試験会議（成績会議）で普及奨励事項等になった成果を各専門担当が講師となり紹介した。

空知：平成26年2月4日（岩見沢市 空知総合振興局）

石狩：平成25年2月6日（江別市 勤労者研修センター）

胆振・日高：平成25年2月5日（むかわ町 四季の館）

後志：平成25年2月7日（倶知安町 後志総合振興局）

3. 行政・関係機関との連携

(1) 関係機関・団体との連携

中央農試駐在の普及指導員と連携し、ホクレン、JA中央会、北植防、米麦改良協会、除草剤協会、道果樹協会、農業共済組合など関係機関の活動を支援した。

(2) 農大との連携活動

中央農試駐在の普及指導員と連携し、農業の担い手確保・育成の視点から、農大が行う各種研修・教育に対し講師など支援活動を行った。

E 普及・参考事項並びに試験研究の成果

1. 平成 26 年普及奨励事項、普及推進事項、指導参考事項、研究参考事項並びに行政参考事項

平成 25 年度北海道農業試験会議（成績会議）において、当年度までに完了した試験研究成績について、普及、研究、行政に提供される事項を決定した。そのうち、当場が担当または分担した提出課題（農業資材・農業機械性能調査関係課題を除く）は次のとおりである。

(1) 普及奨励事項

－優良品種－

（作物開発部会）

○水稲新品種候補「空育180号」（生産研究部水田農業グループ）

○水稲新品種候補「きたしずく」（空育酒177号）（生産研究部水田農業グループ）

(2) 普及推進事項

－優良品種－

（作物開発部会）

○ぶどう新品種候補「GHC 1」（作物開発部作物グループ）

－推進技術－

（生産システム部会）

○成苗ポット苗における早期異常出穂抑制技術（上川農試生産環境グループ、生産研究部水田農業グループ）

（農業環境部会）

○秋まき小麦「きたほなみ」の生産実績を活用した窒素施肥設計法と生育管理ツール（農業環境部栽培環境グループ、農業研究本部企画調整部地域技術グループ、上川生産環境グループ、上川地域技術グループ）

（病虫部会）

○小麦の雪腐褐色小粒菌核病および褐色雪腐病に対する殺菌剤の残効性と防除時期（病虫部クリーン病害虫G、上川農試生産環境G）

○かぼちゃの突起果の発生原因解明（病虫部クリーン病害虫G、上川農試地域技術G）

(3) 指導参考事項

（作物開発部会）

○道央転換畑地帯の大豆狭畦栽培における適正な栽植密度（作物開発部作物グループ、農業研究本部企画調整部地域技術グループ）

○硬質秋まき小麦「つるきち」の品種特性に対応した当面の栽培法（中央農試作物開発部作物グループ、北見農試研究部麦類グループ、上川農試研究部地域技術グループ、十勝農試研究部地域技術グループ）

○りんごの品種特性（作物開発部作物グループ）

○西洋なしの品種特性（作物開発部作物グループ）

（花野菜部会）

○秋季安定生産に向けたトマト3段密植栽培技術と経済性（花野菜・花き野菜グループ、生産研究部生産システムグループ）

（農業環境部会）

○近赤外分光法による大豆イソフラボン含量の非破壊評価法（作物開発部農産品質グループ、食品加工研究センター食品バイオ部食品バイオグループ）

○超強力小麦「ゆめちから」の品質変動とブレンド粉の加工適性（中央農試作物開発部農産品質グループ、農業環境部栽培環境グループ、農業研究本部企画調整部地域技術グループ、上川農業試験場研究部生産環境グループ・地域技術グループ、十勝農業試験場研究部生産環境グループ・地域技術グループ、食品加工研究センター食品開発部食品開発グループ）

○エチレン処理による生食用馬鈴しょの長期貯蔵技術（作物開発部農産品質グループ、十勝農試地域技術グループ）

○水稲種子の粒厚が発芽および苗形質に与える影響（遺伝資源グループ）

○大豆作付け圃場におけるアーバスキュラー菌根菌の感染実態と前作を考慮したリン酸減肥指針（生産研究部水田農業グループ、十勝農試生産環境グループ）

○春まき小麦に対する「けい酸加里」の施用効果（生産研究部水田農業グループ）

○子実用とうもろこしの栽培法と道央地域における輪作体系への導入効果（農業環境部環境保全グループ、生産研究部生産システムグループ、病虫部クリーン病害虫グループ、十勝農試研究部生産環境グループ、畜試基盤研

究部飼料環境グループ)

○北海道耕地土壌の理化学性の実態・変化とその対応
(1959～2011年)および炭素貯留量(農業環境部環境
保全グループ、農業環境部栽培環境グループ、生産研究
部水田農業グループ、上川農試研究部生産環境グループ、
上川農試天北支場地域技術グループ、道南農試研究部生
産環境グループ、十勝農試研究部生産環境グループ、根
釧農試研究部飼料環境グループ、北見農試研究部生産環
境グループ、花野センター研究部生産環境グループ)

○道央水田転換畑における秋まき小麦「きたほなみ」の
大豆畦間ばらまき栽培技術(農業環境部栽培環境グルー
プ、企画調整部地域技術グループ)

○子実用とうもろこしの栽培法と道央地域における輪作
体系への導入効果(中央農試・農業環境部・環境保全グ
ループ、病虫部・クリーン病害虫グループ、生産研究部
生産システムグループ、畜試・基盤研究部・飼料環境グ
ループ、十勝農試・研究部・生産環境グループ)

(病虫部会)

○平成25年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫(北
海道立総合研究機構農業研究本部、北海道農政部技術
普及課、北海道農業研究センター)

○穂いもち圃場抵抗性ランクに対応した水稻のいもち病
本田防除基準(病虫部クリーン病害虫G、上川農試生産
環境G)

○水稻の割粳歩合ランクに対する圃場レベルでの実用性
評価(病虫部クリーン病害虫G、上川農試生産環境G)

○特別栽培のためのばれいしょ疫病の防除体系(病虫部
クリーン病害虫G、十勝農試生産環境G)

○採苗施設と水田転換畑を利用したいちごの自立型採苗
方式における病害虫管理指針(病虫部予察診断G、ク
リーン病害虫G、花・野菜技術センター、そらち南農
業協同組合、千葉県農林総合研究センター)

○醸造用ぶどうのつる割細菌病の病因解明と当面の対応
(病虫部予察診断G、作物開発部作物G、企画調整部
地域技術G)

(生産システム部会)

○有機トマトを導入する小規模経営の安定化方策(生産
研究部生産システムグループ)

○ハイブリッド型膜モジュール内蔵バイオガス精製装置
(生産システムグループ)

○「ゆめぴりか」のアミロース含有率早期予測法(上川
農試生産環境グループ、生産研究部水田農業グループ)

(4) 研究参考事項

(作物開発部会)

○北海道米の業務用適性評価(作物開発部農産品質グ
ループ、生産研究部水田農業グループ)

○手亡あん着色要因の解明と簡易あん色評価法(作物開
発部農産品質グループ、十勝農試研究部豆類グループ)
(農業環境部会)

○エネルギー作物としての多年生草本の生育特性と導入
の可能性(農業環境部栽培環境グループ、根釧農試研究
部飼料環境グループ)

(5) 行政参考事項

2. 論文ならびに資料

(1) 研究論文、試験成績

作物開発部

○Kazuyuki Okamoto, Noriaki Aoki, Haruka Fujii, Tetsuji
Yanagihara, Aiko Nishi, Hikaru Satoh, Takayuki Umemoto.

Characterization and Utilization of Spontaneous Deficiency
in Starch Branching Enzyme I of Rice (*Oryza sativa* L.).
Journal of Applied Glycoscience. Vol.60 No.1 p53-60 (2013)

○小林哲也, 青山好男. 次亜塩素酸ナトリウムで前処
理を受けた好熱性好酸性菌芽胞の耐熱性. *日本防菌防
黴学会誌*. 42, (3), p.117-120 (2014)

○Suzuki, T., Yoshii, T., Fujita, S., Shimada, H., Takeuchi,
T., and Kondo, N. DNA markers linked to *Pga1*, an adzuki
bean gene that confers resistance to *Cadophora gregata* race
1. *Breeding Science* 63, p. 353-357 (2013)

○Yamashita, Y., Takeuchi, T., Ohnishi, S., Sasaki, J., and
Tazawa, A. Fine mapping of the major *Soybean dwarf virus*
resistance gene Rsdv1 of the soybean cultivar 'Wilis'.
Breeding Science 63, p. 417-412 (2013)

生産研究部

○鈴木 剛. ドイツ バイエルン地方で行われているト
ランスボーダーファーミングとは?. *グリーンテクノ情
報* vol.9 No. 2. p. 27-32 (2013. 10)

○濱村寿史、白井康裕、三宅俊輔. クリーン農業技術導
入による温室効果ガス排出量変化の推計. *北農*. 80-4,
p. 40-48 (2013. 10)

○原圭祐, 稲野一郎. 光学式選別機を組み込んだ小麦の
効率的な調製体系. *農業食料工学会誌*. 76 (1), p. 92-9
8

○長田亨, 五十嵐俊成, 吉田慎一. ブランド米生産に向けた「ゆめぴりか」の栽培指針. 北農. 80, p.241-248(2013)

○木下雅文. 冷凍米飯(ピラフ)に適する米品種とその加工適性. 日本冷凍空調学会誌「冷凍」. 89, p.13-19(2013)

○塚本康貴. 道総研農業試験場における農業農村工学研究. 農業農村工学会誌. 81-5, p.7-10(2013)

○塚本康貴. 地域農業の発展と持続的な農業生産活動のための基盤整備の役割. 農業農村工学会誌. 81-10, p.9-12(2013)

農業環境部

Keiko Minato, Yasuyuki Kouda, Masaaki Yamakawa, Satoshi Hara, Tadashi Tamura and Takashi Osada. Determination of GHG and ammonia emissions from stored dairy cattle slurry by using a floating dynamic chamber. *Animal Science Journal*. 84, p.165-177

○ budgets Ryuichi Hirata, Akira Miyata, Masayoshi Manoa, Mariko Shimizu, Takatoshi Arita, Yasuyuki Kouda, Shoji Matsuura, Mitsuhiro Niimi, Toshiya Saigusa, Akinori Mori, Masayuki Hojito, Osamu Kawamura, Ryusuke Hatano. Carbon dioxide exchange at four intensively managed grassland sites across different climate zones of Japan and the influence of manure application on ecosystem carbon and greenhouse gas budgets. *Agricultural and Forest Meteorology*. 177, p.57-68

○ Mariko Shimizu, Ryusuke Hatano, Takatoshi Arita, Yasuyuki Kouda, Akinori Mori, Shoji Matsuura, Mitsuhiro Niimi, Tao Jin, Alexey R. Desyatkin, Osamu Kawamura, Masayuki Hojito, Akira Miyata. The effect of fertilizer and manure application on CH₄ and N₂O emission from managed grasslands in Japan. *Soil Science and Plant Nutrition*. 59, p.69-86

○細淵幸雄, 日笠裕治. 温泉水で加温される周年被覆ハウス土壌のホウ素蓄積およびトマト、キュウリの過剰症状発生とその軽減対策. 日本土壌肥科学雑誌. 84(4), p.293-298(2013)

○古館明洋, 濱村寿史, 小野寺政行, 平石学, 日笠裕治. 粘質たまねぎ畑の下層土改善に及ぼす秋まき小麦・後作緑肥導入の影響と経済性評価. 北農. 80(3), p.270-278(2013)

○古館明洋, 小野寺政行, 須田達也, 日笠裕治. 晩春まきブロッコリー及び秋まき小麦「きたほなみ」に対する被覆尿素肥料を用いた省力的施肥法. 北農. 80(4), p.391-397(2013)

○岡元英樹, 古館明洋, 吉澤晃, 大橋優二. イタリアンライグラスを用いた無除草剤雑草防除技術は天北地方へも適用できる. 北農. 80(2), p.159-163(2013)

○岡元英樹, 古館明洋, 吉澤晃, 大橋優二, 内田幸司・雲義美, 谷口智哉. 天北地方の鉱質土壌草地におけるイタリアンライグラスを用いた無除草剤更新技術の適用性. 北農. 80(3), p.294-300(2013)

○鈴木慶次郎, 中村隆一. オホーツク地域におけるタマネギ畑の耕盤層破砕が窒素収支の改善などの環境保全に及ぼす効果. 日本土壌肥科学雑誌. 85(1), p.17-25(2014)

○山名利一, 小野寺政行, 鈴木慶次郎. タマネギの紅色根腐病に対する品種の抵抗性評価とかん水処理の効果. 北農. 81(1), p.19-25(2014)

○櫻井道彦, 中辻敏朗, 日笠裕治. 有機栽培露地野菜畑の土壌診断に基づく窒素施肥対応の構築. 日本土壌肥科学雑誌. 84(4), p.285-292(2013)

病虫部

○齊藤美樹・高久元. ホウレンソウ圃場で確認されたヤドリダニ類のホウレンソウケナガコナダニ捕食能力. 日本ダニ学会誌. 22 巻, p.37-43(2013)

○橋本庸三. 登熟期の玄米吸汁がアカヒゲホソミドリカスミカメの卵休眠性に及ぼす影響. 北日本病害虫研究会報. 64, p.140-142(2014)

○荻野瑠衣・橋本庸三. 北海道におけるアカヒゲホソミドリカスミカメに対する1回散布防除の適期と適用薬剤の検討. 北日本病害虫研究会報. 64, p.136-139(2014)

○栢森美如, 堀田治邦. *Pseudocercospora capsellae* によるコマツナ白斑病(新称). 北日本病害虫研究会報. 64, p.57-59(2014)

○小野寺鶴将. ダイズ子実の粒大とマメシクイガによる被害粒率との関係について. 北日本病害虫研究会報. 64, p.153-156(2013)

○岩崎暁生, 荻野瑠衣, 小野寺鶴将. 北海道におけるアズキゾウムシの野外寄生の確認と産卵時期の推定. 北日本病害虫研究会報. 64, p.171-175(2013)

○三澤知央, 小松 勉, 辻 英敏. *Rhizoctonia solani* AG-1 IC によるニンジン苗立枯病. 北日本病害虫研究会報. 64, p.76-80(2013)

企画調整部地域技術グループ

○田中一生. 平成25年度NATEC(地域農業技術センター連絡会議)の活動. 北農81(2), p.74~76(2014)

企画調整部企画課

○杉本昌仁. 肉牛生産における自給飼料の活用に関する

研究について. 北海道畜産草地学会報 1, p.39-46. (2013)

(2) 口頭発表(ポスター発表含む)

作物開発部

○藤田正平, 鴻坂扶美子, 大西志全, 田中義則, 三好智明, 越智弘明, 手塚光明, 白井和栄, 萩原誠司. 多収、極大粒でシストセンチュウ抵抗性の黒ダイズ新品種「つぶらくろ」の育成. 育種学研究. 15(別2). p. 180 (2013.10.13)

○木口忠彦, 相馬ちひろ, 藤田涼平, 中山輝. ポテトチップ用バレイショ新品種「北育 15 号」における施肥量・栽植密度反応の地域間差異. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 54, p99-100(2013.12.7)

○Kousaka, F., Shimamura, S., Nakamura, T., Hiraga, S., Maekawa, T., Shimada, S., Fujita, S. Response of soybean (*Glycine max*) waterlogging tolerant variety - "Shoku-kei32" to short-term soil flooding. 11th conference of the international society for plant anaerobiosis. Program and Abstract book. p. 121 (2013)

○小谷野茂和, 中道浩司, 中川良二, 黒崎英樹, 小宮山誠一, 柳原哲司, 加藤淳, 近赤外分光法による大豆イソフラボンの非破壊評価法. 日本食品科学工学会 2014 年北海道支部大会講演要旨集 p.14 (2014)

○Minako Iketani-Saito, Toshikazu Yamana, Seiji Yamada, Tadahiko Kiguchi, Toshimichi Okubo, Ryuichi Nakamura, Toshio Tsuchiya. Occurrence conditions and control measures of rhizomania in sugar beet in Okhotsk District of Hokkaido. 9 th Symposium of the International Working Group on Plant Viruses with Fungal Vectors (IWGPVVFV). (2013.8.20-22)

○小倉玲奈, 田澤暁子, 島田尚典. アズキ萎凋病菌レース 4 抵抗性の遺伝資源の探索. 北日本病害虫研究会第 67 回研究発表会 (2014.2.20)

○鈴木孝子, 足利奈奈, 神野裕信. 6B 染色体に座乗する「蘇麦 3 号」由来の赤かび病抵抗性 QTL. 日本育種学会第 125 回講演会. 育種学研究 16(別1), p.243 (2014.3.22)

○梅本貴之, 幸谷かおり, 藤井はるか, 柳原哲司, 池ヶ谷智仁, 芦田(吉田)かなえ, 石井卓朗. デンプン易糊化変異の導入による餅の硬化抑制. 日本作物学会紀事別号(講演会要旨・資料集)第 237 回日本作物学会講演会. P252-253 (2014)

○山下陽子, 船附秀行, 山口直矢, 大西志全, 鴻坂扶美

子. 高温年に発生する「トヨムスメ」特有の裂皮に関する QTL. 日本育種学会第 124 回講演会. 育種学研究 15(別2), p. 299 (2013.10.13)

○山下陽子, 鴻坂扶美子. 「植系 32 号」由来の開花期耐湿性 QTL. 日本育種学会第 125 回講演会. 育種学研究 16(別1), p. 199(2014.3.22)

○竹内 徹. 北海道における病害防除戦略. 第 1 回生態と防除研究会(2013.12.17)

遺伝資源部

○浅山聡. コムギ褐色雪腐病抵抗性の圃場検定法の開発: 基準品種の選定. 日本作物学会第 237 回講演会. 日作紀 83 (別 1). p.220-221 (2014)

○平井泰. ガラス化法(PVS2 法)の長期保存事業(ジャガイモ遺伝資源)への展開. 第 31 回日本植物細胞分子生物学会(札幌)シンポジウム(2013.9.12)

生産研究部

○Takahisa Hinata. A Current State of Carbon Footprinting and Case Study of Dairy Farming in Japan ~Focusd on Producing. IDF World Dairy Summit 2013, Dairy Summit Abstract p.13-14(2013.11.1)

○白旗雅樹. 近年の気象条件が作業可能日数に及ぼす影響の解析. 日本気象学会北海道支部2013年大会講演要旨集, B15-16(2013)

○日向貴久. 集落営農法人と地域における支援組織との関係. 道総研第1回集落活性化研究会資料集, p. 1-6(2013.11.7)

○日向貴久. 喜茂別の農業の動向と地域振興策. 道総研第1回集落活性化研究会資料集, p. 7-27(2013.11.7)

○平石学. 北海道水田農業の規模拡大の可能性. 2013年度北海道農業経済学会大会シンポジウム資料集, p. 7-13 (2013.9.14)

○平石学. 農業センサスから予測するオホーツク農業・農村の近未来. 「オホーツク農業の将来とたまねぎ生産」講演要旨集, p. 1-2 (2013.11.13)

○塚本康貴. 道央転換畑での暗渠清掃用施設を利用した地下灌漑技術. 日本土壌肥料学会講演要旨集. 59, p. 5 (2013)

○塚本康貴. 大区画圃場における基盤整備技術. 農業農村工学会北海道支部第34回シンポジウム要旨集. p. 83-86 (2013)

○尾崎洋人. 酒造好適米開発の取り組み経過と今後の展望. 北醸研. 43, p. 7-13(2013)

○尾崎洋人. イネいもち病抵抗性強品種「きたくりん」の育成. 日本植物病理学会北海道部会年報. 41, p. 7-12

(2013. 10).

農業環境部

○板垣英祐・笛木伸彦・渡辺祐志・武田尚隆・中住晴彦・日笠裕治. 大規模そば栽培のためのリビングマルチを活用した不耕起栽培技術の開発. 日本土壌肥料学会講演要旨集. 59, p.116 (2013)

○岡元英樹, 古館明洋, 新宮裕子, 大橋優二. ペレニアルライグラス単播草地における兼用利用時の窒素施肥配分—実放牧試験による実証—. 日本土壌肥料学会講演要旨集. 60, p.123(2013)

○岡元英樹, 古館明洋. チモシー晩生品種に対する1番草刈取後の利用形態と施肥が牧草生産と植生に及ぼす影響. 日本草地学会誌. 60別, p.146(2014)

池田成志, 鈴木慶次郎, ○河原誠, 高橋直和, 皆川彰, 能代昌雄. ウレアホルム入り肥料で栽培したタマネギ鱗茎部およびテンサイ主根部の微生物群集構造解析. 日本土壌微生物学会講演要旨集. p. 33(2013)

○ Makoto Kawahara, Keijiro Suzuki, Naokazu Takahashi, Masao Noshiro and Seishi Ikeda. A Urea-Formaldehyde Fertilizer Increases the Diversity of Bacterial Communities in Onion and Sugarbeet. 第18回国際窒素固定会議(2013)

○櫻井道彦, 中辻敏朗, 日笠裕治. 有機栽培タマネギの窒素肥効に及ぼす有機質資材種と分施の影響. 日本土壌肥料学会講演要旨集. 59, p.133 (2013)

○杉川陽一, 中辻敏朗, 岡崎圭毅, 田中福代, 日笠裕治. 有機・慣行栽培コマツナにおける生育日数の経過が品質成分に及ぼす影響. 日本土壌肥料学会講演要旨集. 59, p.89(2013)

病虫部

○齊藤美樹. 複数回耕起のハウレンソウケナガコナダニ密度低減効果. 第58回日本応用動物昆虫学会大会 (2014).

○齊藤美樹. 粒状有機質肥料の土壌表面散布によるハウレンソウケナガコナダニ被害軽減効果. 2013年度日本応用動物昆虫学会・日本昆虫学会共催北海道支部大会(2014).

○東岱孝司・田澤暁子. ダイズシストセンチュウ抵抗性アズキ遺伝資源栽培による密度低減効果 (予報). 日本線虫学会(2013).

○東岱孝司. アズキ茎腐細菌病の同定・生態と防除. 第1回生態と防除研究会 (2013)

○橋本庸三. 2013年のイネと小麦と畦畔雑草におけるアカヒゲホソミドリカスミカメの産卵消長. 第67回北日本病害虫研究発表会(2014).

○橋本庸三. アカヒゲホソミドリカスミカメのイネとスズメノカタビラにおける産卵消長. 第58回日本応用動物昆虫学会大会 (2014).

○荻野瑠衣・橋本庸三. 道央におけるアカヒゲホソミドリカスミカメに対する1回散布防除の適期の検討. 第67回北日本病害虫研究発表会(2014).

○野津あゆみ, 児玉不二雄. 北海道におけるタマネギ灰色腐敗病菌の再同定. 日本植物病理学会報. 80, p62. (2013)

○清水基滋. 北海道における気象データを活用した病害虫発生予察の現状と課題. 日本農業気象学会 2014年全国大会, オーガナイズドセッション. (2014)

○武澤友二. 北海道のタマネギで多発したネギハモグリバエの被害. 第66回北日本病害虫研究発表会. (2014)

企画調整部地域技術グループ

○田中一生, 岩間和人. 北海道と府県の酒造好適米における醸造適性の比較 第2報 各品種における産地変異. 日本作物学会第236回講演会要旨集・資料集. 作物学会紀事82(別2), p. 106-107(2013)

○田中一生, 岩間和人. 北海道の酒造好適米と府県米の醸造適性の比較 第2報 各品種における産地変異. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報. 54, p. 5-6 (2013)

○稲川 裕. 新たな果実加工品の開発の取り組み 道産果実を使った無添加フルーツコンポート. 北海道果樹懇話会第15回研修会資料. p. 19-21 (2013)

企画調整部企画課

○糟谷広高・大井幹記・齋藤早春・遠藤哲代・及川学・杉本昌仁・宝寄山裕直. 濃厚飼料中のイアコーンサイレージ混合割合が黒毛和種去勢肥育牛の飼料摂取量、血液成分および枝肉成績に及ぼす影響. 日本畜産学会第116回大会. (2013)

○大井幹記・齋藤早春・遠藤哲代・杉本昌仁・藤川朗. 小麦を原料とした乾燥エタノール蒸留残渣の黒毛和種経産肥育牛への給与効果. 肉用牛研究会第51回大会. (2013))

(3) 専門雑誌記事

作物開発部

○阿部珠代. 農学校1年1組小麦の時間, ニューカントリー. 717, p86-87(2013)

○藤田正平. 北海道におけるアズキ土壌病害抵抗性育種の現状. 植物防疫. 67, p423-430 (2013)

○藤田正平. 多収で裂皮が少ない極大粒大豆新品種「ゆ

めのつる」. 農業日誌 (平成 26 年). p202-203 (2013)

○藤田正平. 粒が極めて大きい大豆品種「タマフクラ」. 農業日誌 (平成 26 年). p332-333 (2013)

○木下雅文, 藤井はるか, 熊谷 聡, 西村 努. 平成 25 年度水稻府県生産流通調査報告書. 北海道米麦改良. 97, p.1-7(2013)

○小宮山誠一. 秋まき小麦「きたほなみ」近赤外分光法によるフォーリングナンバー迅速評価, ニューカンントリー. 712, p54-55(2013.7)

○前野眞司. 畑地の主要雑草と防除体系. ニューカンントリー. 2 月号, p.13-16(2014)

○小倉玲奈, 山下陽子. 生物工学セミナー(90). 北農. 80, p.101(2013)

○齋藤優介. 新規利用向け菜豆(赤インゲンマメ)の品質評価に関する研究. 豆類時報, 72, p.9-15(2013)

○内田哲嗣. 西洋なしの半追熟出荷技術. 農家の友 8 月号. p.29-31 (2013)

○内田哲嗣. 西洋なしの半追熟出荷技術. 果実日本 8 月号. p.81-84 (2013)

○内田哲嗣. 西洋なしの半追熟出荷技術. あぐりぼと. 2 月号, p.14(2014)

遺伝資源部

○鈴木和織. 大豆の出芽不良に係る種子の要因解析. ニューカンントリー. 1 月号 (718 号), P100-101(2014)

生産研究部

○濱村寿史. 温暖化ガス排出量の簡易な推計手順確立. ニューカンントリー3月号 p. 50-51(2014)

○平石学. 農業センサスから見た農業・農村の動向予測と対策. 農家の友11月号, p. 100-102 (2013)

○稲野一郎. けん引爪耕起作業機の特徴と土壌物理性の効果. あぐりぼと. 107, p. 4-5 (2014)

○稲野一郎. 排水改善のポイント②砕土・整地. ニューカンントリー. 9月号, p. 36-37(2013)

○鈴木 剛. 小麦の時間【収穫と乾燥調製】. ニューカンントリー7月号. 712, p. 52-53(2013)

○鈴木 剛. 野菜栽培の機械化の現状と課題. ニューカンントリー2013年秋季臨時増刊号. p. 63-66(2013)

○鈴木 剛. 排水改善のポイント③心土破碎. ニューカンントリー10月号. 715, p. 32-33(2013)

○鈴木 剛. 排水改善のポイント④管理機械の活用. ニューカンントリー11月号. 716, p. 30-31(2013)

○鈴木剛. ートランスボーダーファーミングとはー 仮想的のうち集約に取り組む. 機械化農業, p. 21-26(2014. 1)

○長田亨. ブランド米生産に向けたアミロースとタンパクの目標設定. ニューカンントリー. 711, p. 54-55(2013)

○長田亨. ブランド米生産に向けた「ゆめぴりか」の栽培指針. アグリポート. No106 p. 6-7(2013)

○塚本康貴. 道央転換畑での後作緑肥や密植・培土・追肥によるダイズ生産性向上技術. 土づくりとエコ農業4/5月号 p. 2-7(2013)

○塚本康貴. 干ばつなんて怖くない! 地下灌漑で転作作物の安定生産. 農家の友7月号, p. 34-35(2013)

○塚本康貴. 排水改善のポイント⑥圃場内明渠の施工. ニューカンントリー. 718, p. 38-39(2013)

○塚本康貴. 土づくりによる対策①作付けの工夫. ニューカンントリー. 719, p. 38-39(2013)

○塚本康貴. 土づくりによる対策②堆肥と緑肥の活用. ニューカンントリー. 720, p. 38-39(2013)

農業環境部

○加藤 淳. 小豆「きたろまん」の特徴を活かした商品開発. 農家の友. 10 月号, p.36-38(2013)

○竹内晴信. 機械を使いこなし, 水はけ改善「水田転換畑の排水対策」. ニューカンントリー. 711, p.50-51 (2013)

○富沢ゆい子. 有機栽培に対応した果菜類の育苗培土作製法. 土づくりとエコ農業. 25(2), p.33-37(2013)

○古館明洋. 秋まき小麦・後作緑肥導入による粘質たまねぎ畑の下層土改善. あぐりぼと. 102, p.8(2013)

○古館明洋. 技術特集 たまねぎの安定生産 根張り深い秋まき小麦が浅部堅密層を縮小させる[土壌物理性の改善で増収]. ニューカンントリー 6 月号, p.12-14(2013)

○古館明洋. 秋まき小麦および後作緑肥導入でタマネギ増収. 農家の友 7 月号, p.42-44(2013)

○古館明洋. 第 8 回農学校 1 年 1 組小麦の時間【新しい栽培技術】粘質な転換畑では簡易耕や不耕起栽培を活用しよう. ニューカンントリー月号, p.952-53(2013)

○古館明洋. ブロッコリー・秋まき小麦肥効調節型「被覆尿素肥料」の窒素溶出率と施用法. ニューカンントリー 11 月号, p.34-35(2013)

○古館明洋. 被覆尿素肥料を利用して追肥を省略 北海道における秋まき小麦と晩春まきブロッコリーへのセラコート R の施用法. 北から南から (セントラル化成の農業だより). 339, p.2-7(2013)

○坂口雅己. 農業試験場における有機農業研究の成果. 北海道有機農研. 94, p.4-5 (2013)

○杉川陽一. こまつな 有機栽培による高品質化を実現 生育日数を長くすることで, 糖分高まり, 硝酸塩も低下. ニューカンントリー. 711, p.52-53 (2013)

○杉川陽一. 有機コマツナの収量と品質を高める栽培法. 北海道有機農研. 94, p.6-7 (2013)

○杉川陽一. 小麦の穂水分測定による成熟期予測法と

2013 年「ゆめちから」の穂水分低下傾向. 農家の友. 65(12), p.38-39 (2013)

○杉川陽一. 有機コマツナの品質を高める栽培法—ゆつくり育てて、糖分上昇・硝酸塩低下—. 土づくりとエコ農業. 46(2), p.28-30 (2013)

病虫部

○齊藤美樹. ホウレンソウケナガコナダニ防除における捕食性ヤドリダニ類利用の可能性. 植物防疫. 67. p. 631-636 (2013)

○相馬潤. 農学校1年1組 小麦の時間 病害虫防除 ニューカンントリー6月号. p82-83

○東岱孝司. アズキ茎腐細菌病の発生生態と防除. 植物防疫. 68. 36-43 (2014)

○小松 勉. 平成25年に特に注意を要する病害虫. あぐりぽーと. p. 103, p. 8-9 (2013)

○小野寺鶴将. 大豆のマメシクイガに対する防除適期の判断手法と被害軽減対策. グリーンレポート. 530, p. 10-11 (2013)

○小野寺鶴将. 評価高い道産大豆を安定供給-病害虫の発生を想定して防除技術を組み合わせる. ニューカンントリー. 716, p. 15-18 (2013)

○武澤友二. ネギアザミウマ 被害多発と合成ピレスロイド剤抵抗性部尾除対策. 農家の友. 65(9), p.42-43 (2013)

○清水基滋. 北海道畑作地帯の農産物加工場で発生する排出土およびジャガイモでん粉粕の消毒. 植物防疫. 67, p.602-606 (2013)

○清水基滋. 特集 2013 作物展望 病害虫. ニューカンントリー. 706, p.54-55 (2013)

○道総研中央農試病虫部予察診断グループ. 平成 25 年度に北海道で新たに発生を認めた病害虫. 農家の友 66(3), p.4-11 (2014)

企画調整部地域技術グループ

○田中一生. イネばか苗病の緊急対策. 農家の友. 65(9), p. 36-38 (2013)

○笛木伸彦. 高収量・高糖分のてん菜づくり. 生産者自らが実施可能な排水改良. ニューカンントリー 7月号. 712, p.17-20 (2013)

○笛木伸彦. 畑作における塩化カリ活用の可能性. 農家の友 10月号. p.39-41 (2013)

○笛木伸彦. 「耕うん」という技術を見直そう. あぐりぽーと. 107, p.1-3 (2014)

○笛木伸彦. 水稻収穫後のほ場管理. 北海道米麦改良. (2013)

企画調整部地企画課

○竹中秀行. 北海道における技術開発の足跡と今後の展望. 機械化農業 10月号. p55-p59, (2013)

○山崎敬之. (地独) 北海道立総合研究機構農業研究本部中央農業試験場の取り組み. 農林水産技術同友会報. 56, p. 76-79 (2013)

(4) 著編書資料

遺伝資源部

○竹内徹, 長尾明宣, 南橋昭, 白井滋久編. 農作物優良品種の解説 (2005-2013). 道総研農試資料. 41, p.1-192 (2014)

○浅山聡. 付表 種苗生産の流れ. “農作物優良品種の解説 (2005-2013)”. 竹内徹, 長尾明宣, 南橋昭, 白井滋久編. 農作物優良品種の解説 (2005-2013). 道総研農試資料. 41, p.188-192 (2014)

生産研究部

○濱村寿史. 野菜の流通と販売. 北海道の野菜づくり. 北海道農業組合通信社. p. 144-148 (2013)

農業環境部

○加藤 淳. 小豆の力. キクロス出版. 2013. p.1-158

○加藤 淳. すべてがわかる! 「豆類」事典. 食材の教科書シリーズ. 世界文化社. 2013. p.1-120, p.179-190 (監修)

○加藤 淳. 土壌と肥料. “北海道の野菜づくり”. ニューカンントリー秋季臨時増刊号. 北海道協同組合通信社. 2013. p.72-103 (監修)

○加藤 淳. 土づくり Q&A 「総括編」. 北海道農業を支える土づくりパートIV. 北海道農協「土づくり」運動推進本部. 2014. p.1-191 (監修)

○富沢ゆい子. 土壌養分バランスと栄養障害. “北海道の野菜づくり”. ニューカンントリー秋季臨時増刊号. 北海道協同組合通信社. 2013. p.89-92

○富沢ゆい子. リーキ. “北海道の野菜づくり”. ニューカンントリー秋季臨時増刊号. 北海道協同組合通信社. 2013. p.208-209

○日笠裕治. 床土のつくり方と園芸培土. “北海道の野菜づくり”. ニューカンントリー秋季臨時増刊号. 北海道協同組合通信社. 2013. p.18-21.

○坂口雅己. 生育に合わせた施肥と栄養診断技術. “北海道の野菜づくり”. ニューカンントリー秋季臨時増刊号. 北海道協同組合通信社. 2013. p.75-79

○櫻井道彦. ハウス栽培における生産性の維持と土壌診断. “北海道の野菜づくり”. ニューカンントリー秋季臨時

増刊号. 北海道協同組合通信社. 2013. p.93-97.

○杉川陽一. 有機物や緑肥を活用したほ場管理. “北海道の野菜づくり”. ニューカンントリー秋季臨時増刊号. 北海道協同組合通信社. 2013. p.80-83

病虫部

○清水基滋. 北海道の野菜づくり, ニューカンントリー 2013 年秋季臨時増刊号. p. 121-124 (2013)

企画調整部地域技術グループ

○笛木伸彦. 北海道の野菜づくり 経営と産地のための最新栽培マニュアル 第1部第2章: 土壌と肥料 クリーン農業・有機農業と土壌肥料. ニューカンントリー 2013 年秋季臨時増刊号. 2013. p. 100-103

○笛木伸彦. 良食味米を目指した土壌管理、施肥技術. 平成26年産に向けての米づくり. 北海道米麦改良協会編. 同発行, 2014. p. 86-107

○笛木伸彦. 良質小麦生産のための施肥および土壌管理. 北海道の小麦づくり. 北海道米麦改良協会編. 同発行, 2014. p. 54-88

○菅原章人. 北海道の野菜づくり 経営と産地のための最新栽培マニュアル 第2部 第2章 葉茎菜類第, 第5章 洋菜類. ニューカンントリー 2013 年秋季臨時増刊号. 2013. p. 232-235, 309-314

○清水基滋. 病害虫図鑑 テンサイ黒根病. 日本農業新聞. 2013. 4. 10 (2013)

○小松 勉. 平成25年度に新たに発生した病害虫. 農業共済新聞. 2013. 4. 24 (2013)

○小松 勉. 平成26年に特に注意を要する病害虫. 農業共済新聞. 2013. 5. 1 (2013)

○小松 勉. メロン黒点根腐病の緊急防除対策. 農業共済新聞. 2013. 7. 17 (2013)

(5) 新聞等記事

作物開発部

○小宮山誠一. だいこん, ほっかいどう宝島, FM 北海道 (2013.11.3 放送)

○内田哲嗣. 西洋なしの半迫熟出荷技術. 農業共済新聞 (2013.10.9)

遺伝資源部

○鈴木和織. 優良種子生産および出芽向上には基本技術が重要. 農業共済新聞「北海道営農技術版」. 3 月 4 週号, P17 (2014)

生産研究部

○佐々木亮. 無代かき表面播種湛水出芽法による水稻直播栽培技術. 農業共済新聞 (2014. 3. 5)

○佐々木亮. 水稻乾田直播における硝化抑制剤入り肥料の施用効果. 農業共済新聞. (2014. 3. 12)

農業環境部

○古館明洋. 秋まき小麦導入で粘質たまねぎ畑の下層土改善. 農業共済新聞. (2013.7.3)

病虫部

○相馬潤. 北海道における小麦赤かび病の発生動向と防除のポイント. 日本農業新聞. 平成 26 年 3 月 24 日

F 研究企画・調整・情報システム・出版・広報

1. 研究の企画・調整・評価

(1) 農業研究本部場長会議

1) 第1回農業研究本部場長会議

期日：平成25年5月17日(金) 14:30～16:30

場所：農政部第1中会議室

議題：

①協議事項

- ・平成25年度の作物育種予算について
- ・機動的調査について
- ・北海道立総合研究機構 農業試験場 基本種苗配付要領の一部改正について
- ・企画課における年報の集約及び配付の中止について
- ・平成25年度 北海道農業試験会議(新規課題検討会議)の開催について

②報告事項

- ・職員の採用について
- ・研究課題：革新的技術導入による地域支援(経常(各部))について
- ・大豆・麦等生産体制緊急整備事業について
- ・平成24年度計画に係る自己点検・評価について
- ・基本構想第6章に係る平成25年度研究推進チームについて

③その他

- ・本庁ニーズ検討会の進め方変更について

2) 第2回農業研究本部場長会議

期日：平成25年6月10日(月)13:00～15:30

場所：農政部大会議室

議題：

①協議事項

- ・農業研究本部の次期研究基本計画の策定について

②報告事項

- ・平成26年度 新規課題設定に係る検討経過について
- ・農林水産委託プロジェクト及び農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業の採択状況について
- ・研究成果刊行物について
- ・平成25年度 試験研究用備品(目的積立金)要望・採択一覧

3) 第3回農業研究本部場長会議

期日：平成25年10月2日(水)13:30～16:30

場所：農政部第1中会議室

議題：

①協議事項

- ・中期計画Ⅱ策定に向けた農業研究本部の対応方針(研究目標)について
- ・中期計画Ⅱ策定に向けた農業研究本部の対応方針(研修・普及)について
- ・畑作物奨励品種決定基本調査等に係る経常研究予算課題の再編について
- ・平成26年度 経常研究費に係る新規課題予算について

②報告事項

- ・平成25年度 農業研究本部 場別試験研究費について
- ・平成26年度 一般管理費予算の配分枠について
- ・大豆・麦等生産体制緊急整備事業の実施状況について
- ・平成25年度 下半期の主な予定について
- ・植物遺伝資源の取扱について

③その他

- ・厳正な服務規律の確保について

4) 第4回農業研究本部場長会議

期日：平成25年11月18日(月)13:00～16:30

場所：農政部第1中会議室

議題：

①協議事項

- ・平成26年度 目的積立金活用事業について
- ・地域農業技術支援会議等における対応方針(研究目標)の説明について

②報告事項

- ・植物防疫法に基づく輸入時の検査を受けていない種子について

③その他

- ・基本構想第8章に係る意見照会について

5) 第5回農業研究本部場長会議

期日：平成26年3月24日(月)13:30～17:00

場所：農政部第1中会議室

議題：

①協議事項

- ・中期計画Ⅱ策定に向けた農業研究本部の対応方針(案)に

について

・道総研における研究開発の基本構想に係る乳牛、肉用牛研究について

②報告事項

- ・作物育種の予算調整について
- ・攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業について
- ・各種プロジェクトの運営状況及び次年度運営計画について
- ・地域農業技術センター連絡会議(NATEC)の活動状況について

- ・平成26年度 施設整備・備品整備 関係予算について
- ・平成26年度 道総研農業研究本部 当初予算概要
- ・平成26年度の新規実施課題について
- ・公募型研究課題の応募・採択状況について
- ・平成26年度の主な日程について

③その他

- ・研究開発の見直し方針（修正案）について
- ・産業用大麻について

(2) 研究調整会議

1) 第1回研究調整会議

期日：平成25年4月25日(木)13:00～16:05

場所：中央農業試験場 大会議室

①協議事項

- ・平成25年度の作物育種予算について
- ・道総研における研究開発の基本構想に係る乳牛、肉用牛研究について
- ・設計会議 概要書印刷に係る場別予算負担について
- ・北海道立総合研究機構 農業試験場 基本種苗配布要領の一部改正について

②報告事項

水稻及び大豆育種の再編経過について

研究課題：革新的技術導入による地域支援(経常(各部))について

経常研究及び重点研究に係る平成25年度終了課題について

道総研 第1期における重点研究課題別取り組み状況について

平成25年度地域要望課題の概要について

平成25年度北海道農業試験会議（新規課題検討会議）の開催について

③その他

- ・基本構想6章の検討について
- ・本庁ニーズ検討の持ち方について

2) 第2回研究調整会議

期日：平成25年7月10日(火)13:00～15:45

場所：中央農業試験場 大会議室

①協議事項

- ・中期計画Ⅱ策定に向けた農業研究本部の対応方針(仮)について
- ・平成25年度新規課題の検討及び調整について
- ・奨励品種決定現地調査等の実施に当たっての基本的考え方について

②報告事項

- ・平成24年度 研究課題事後評価（経常研究等）の検討経過について
- ・平成25年度新規課題における重点研究課題実施項目と課題別目標について
- ・公募型研究課題の応募採択状況について

③その他

- ・道州制特区提案に係るアイディア募集について
- ・農林業センサスを用いた北海道農業・農村の動向予測

3) 第3回研究調整会議

期日：平成25年9月17日(火)13:00～17:25

場所：中央農業試験場 大会議室

①協議事項

- ・中期計画Ⅱ策定に向けた農業研究本部の対応方針について
- ・畑作物奨励品種決定基本調査等に係る経常研究予算課題の再編について

- ・平成26年度 経常研究費に係る新規課題予算について

②報告事項

なし

③その他

(特になし)

4) 第4回研究調整会議

期日：平成25年10月25日(金)13:30～15:30

場所：中央農業試験場 大会議室

①協議事項

- ・平成25年度 北海道農業試験会議（成績会議）の開催日程（案）等について
- ・研究参考の活用状況について
- ・平成25年度 成績会議に向けた対応について

②報告事項

- ・第1回植物遺伝資源管理手法等検討委員会について

③その他

(特になし)

5) 第5回研究調整会議

期日：平成25年12月19日(木)13:00～15:30

場所：中央農業試験場 大会議室

①協議事項

・平成25年度 北海道農業試験会議（設計会議）に向けた対応について

・革新的技術導入による地域支援（経常各部）の平成26年度新規課題について

・中期計画Ⅱ策定に向けた農業研究本部の対応方針について（研究推進体制等）

②報告事項

・平成25年度北海道農業試験会議（成績会議）の運営等について

・平成26年（第32回）農業新技術発表会の開催について

③その他

（特になし）

6) 第6回研究調整会議

期日：平成26年2月14日(金)13:00～15:30

場所：中央農試大会議室

①協議事項

・中期計画Ⅱ策定に向けた農業研究本部の対応方針(案)について

・革新的技術導入による地域支援（経常各部）の平成26年度新規課題について

・平成26年度成績会議に向けて

・平成25年度設計会議及び研究課題評価（中間・事後）に向けて

・新規課題検討会を経なかった新規課題（受託試験研究課題等）の検討について

②報告事項

・各種プロジェクトの運営状況及び次年度運営計画について

・平成26年度追加課題の課題別目標について

・公募型研究課題の平成25年度採択結果および平成26年度応募・採択状況について

・攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業について

③その他

（特になし）

(3) 北海道農業試験会議

1) 研究課題検討会議

○ 北海道農業技術推進委員会において決定された重点的研究推進方針に基づき、平成26年度新規提案課題について検討し、農業研究本部として自己点検評価（事前評価）を行った。

部会の開催日程及び検討課題数

部 会	日 程	会 場	課題数
作物開発	H25.7.16～17	自治労会館	23(8)
花・野菜	H25.7.16～17	プレスト1.7	17(11)
畜 産	H25.7.16～17	自治労会館	20(4)
農業環境	H25.7.18～19	自治労会館	27(22)
病 虫	H25.7.18～19	第二水産ビル	17(12)
生産システム	H25.7.18～19	プレスト1.7	9(6)

※括弧内の数値は、検討課題数の内、新規課題数である。

2) 成績会議

各部会に提出され検討した課題について、総括会議で新農業技術として判定された結果は次のとおりであった。本会議における検討は、今年度終了課題における農業研究本部としての自己点検評価（事後評価）にも活用した。

		普及 奨励	普及 推進	指導 参考	研究 参考	行政 参考	保留 成績	完了 成績	合 計
作物 開発	計 (品種)	4 (4)	2 (2)	18	2	0	0	0	26
花・ 野菜	計 (品種)	0	1 (1)	11	1	0	0	0	13
畜産	計 (品種)	7 (7)	1	9	3	0	0	0	20
農業 環境	計 (品種)	0	1	24	1	0	0	0	26
病虫	計 (品種)	0	4	110	0	0	0	1	115
生産 システム	計 (品種)	0	3	29	0	1	0	0	33

3) 設計会議

北海道における農業関係試験研究機関が行う試験研究課題について、平成26年度の設計を決定するための専門部会を平成26年3月10日～3月14日にわたり開催した（てん菜分科会は2月19日）。各部会に提出された

検討課題数は、次のとおりであった。本会議における検討は、農業研究本部における自己点検評価（中間・事後評価）にも活用した。

部会	分科会	課題数
作物開発	稲	50
	豆類	70
	てんさい	32
	麦類・特用作物	62
	ばれいしょ・果樹	72
花・野菜		69
畜産	畜産総合	23
	飼養・管理・家畜育種	20
	家畜衛生・繁殖	36
	草地・品種・生産	59
農業環境		36
病虫		31
生産システム		76
合 計		636

(4) 地域農業技術センター連絡会議

1) 平成25年度地域農業技術センター連絡会議定期総会

- ・日 時：平成25年2月20日 13:30～14:15
- ・場 所：かでの2・7 1040会議室
- ・出席者：33名
- ・議 事：平成25年度事業実績及び収支予算
平成25年度事業計画（案）及び収支予算（案）
役員改選
その他

2) 平成25年地域農業技術センター連絡会議研究交流会

- ・日 時：平成25年2月20日14:30～17:15
- ・場 所：かでの2・7 1040会議室
- ・出席者：57名
- ・内 容
- ① 話題提供

【テーマ】北海道における秋まき硬質小麦の生産拡大ならびに消費拡大に向けて

- ・秋まき硬質小麦の育成について
北海道農業研究センター 田引 正 氏
- ・道産秋まき硬質小麦の品質変動およびブレンド技術

について

- 中央農業試験場 阿部 珠代 氏
- ・道産小麦の流通、販売について
ホクレン農業協同組合連合会 松本 吉史 氏
- ・道産硬質小麦の製粉特性と課題
道産小麦研究会（江別製粉(株)）松原 弘之 氏
- ・道産秋まき硬質小麦の製パン適性と要望
株式会社 どんぐり 村上 弘晃 氏

3) 平成25年度地域農業技術センター研究情報交換会

- ・日 時：平成25年9月5日～9月6日
- ・場 所：札幌サンプラザ、他現地
- ・出席者：55名
- ・内 容

① 話題提供

【テーマ】都市近郊農業の将来展望について

- ・札幌市近郊農業の将来展望について
札幌市農業支援センター 中田 三喜男 氏
- ・果肉色を指標としたカボチャの調理法等に対する情報提供

公益法人農業・環境・健康研究所

- 名寄研究農場 中川 祥治 氏
- ・帯広における都市近郊型農業の取り組み
帯広市農業技術センター 浜田 洋平 氏
- ・草地の植生改善の取り組み（元年）
オホーツク農業科学研究センター
宿野部 猛 氏

② 現地視察

- ・(株)アド・ワン・ファーム（葉菜類植物工場）
- ・J Aさっぽろ、緑肥投入たまねぎ栽培ほ場
- ・札幌市農業支援センター施設

2. 情報システムの活用

(1) 道総研農業研究本部のホームページ（農業技術情報広場）の管理

各ページ作成、更新を行った。また、広く道民に対し、関係イベントの周知や研究成果の公開等、情報発信を行った。

(2) 営農指導支援システムの整備開発

本年における開発は実施していない。

(3) 中央農試ホームページの作成・更新

入札情報や公開データ情報など、広く道民に対して場業務等の情報公開や研究成果の公開等、情報発信を行った。

3. 図書・資料

(1) 受入状況（冊）

資料名	購入	寄贈	合計
単行本（国内）	5	7 2	7 7
単行本（外国）	4	4	8
逐次刊行物（国内）	3 0 3	1 7 5	4 7 8
逐次刊行物（外国）	2 5 4	3 9	2 9 3

(2) 資料提供

室外貸出 1 8 5 件

4. 印刷刊行物

資 料 名	発行年月	頁数	部数
平成 24 年度北海道農業試験会議議事概要 平成 25 年度設計会議	25.5	139	220
平成 26 年農業新技術発表会要旨（第 31 回）	26.2	44	500
平成 26 年道央圏農業新技術発表会要旨	26.2	32	400
平成 25 年度北海道農業試験会議議事概要 平成 25 年度成績会議	26.5	70	220
平成 24 年度植物遺伝資源開発研究成績書	25.12	101	200
北海道立総合研究機構農業試験場資料 第 41 号	26.3	192	500

(3) 図書資料購入費（千円）

逐次刊行物 （国内）	逐次刊行物 （外国）	製本	消耗品	計
912	2,956	71	57	3,996

5. 広報活動

(1) 平成 25 年度中央農業試験場公開デー

- ・ キヤッチフレーズ
「来てハッケン！知ってナットク！食と農」
- ・ 日 時：平成 25 年 8 月 1 日(金) 9:30 ～ 15:00
- ・ 場 所：中央農業試験場庁舎、ほ場、果樹園
- ・ 主 催：中央農業試験場
- ・ 協 力：北海道農政部、北海道病害虫防除所
北海道空知農業改良普及センター
森林研究本部、水産研究本部
- ・ 後 援：岩見沢市、南幌町、由仁町、長沼町、栗山町
JA いわみざわ JA なんぼろ JA そらち南 JA ながぬま
- ・ 来場者：573 名
(大人 345 名、子供 228 名、農業者 23 名)
- ・ 内 容：

○夏休み☆公開実験室（目で見る植物のDNA、身近な植物や食べ物の「ミクロな世界」、ナンを焼いてみよう、作物の病害・害虫コーナー、虫のフェルトマスコットづくり）○おはしを使って豆つかみ、畑の土でどろあそび、電子レンジで手作り簡単クッキー、食育、クリーン農業関係などのパネル紹介、「道総研」（農試、林試、水試）紹介・水辺にすむ生き物たちを観察しよう○試食コーナー（「きたくりん」と「ななつぼし」を使った道産豆カレー、道産極大粒大豆の煮豆と果樹園のくだもの）○農試・普及センターによる「何でも相談」（作物生育相談・土壌診断、病害虫診断）○どん菓子製造実演○試験ほ場のバス見学（畑作ほ場、果樹園）○農試産「ななつぼし」プレゼント（キーワードをさがせアンケートで）

(2) サイエンスパーク 2013

- ・ 日 時：平成 25 年 8 月 7 日(水)9:30 ～ 16:30
- ・ 場 所：札幌駅前地下歩行空間
- ・ 主 催：北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構
- ・ 参加機関：中央農業試験場、上川農業試験場、花・野菜技術センター、畜産試験場、北海道ガス株式会社、株式会社NTTデータ北海道、株式会社島津製作所 他
- ・ 後 援：札幌市、札幌市教育委員会、北海道市長会、北海道町村会、北海道教育委員会
- ・ 参加者：10,127 名
- 展示コーナー
[中央農業試験場（作物G）]
植物を顕微鏡で見てみよう
[上川農業試験場（水田G）]

お米の品種改良の説明、昔ながらの精米体験
進級品種の食べ比べ

[畜産試験場（技術支援G）]

ペーパークラフトで動物を作ろう

[花・野菜技術センター]

顕微鏡を使って野菜の害虫や病気を観察しよう

○体験コーナー

[中央農業試験場] 作ってみよう！タネアート

(3) アグリビジネス創出フェア in Hokkaido

- ・ 日時：平成 25 年 11 月 29 日(金)10:00 ～ 17:00
11 月 30 日(土)10:00 ～ 16:00
- ・ 場所：サッポロファクトリー アトリウム会場他
- ・ 主催：NPO 法人グリーンテクノバンク、農林水産省
- ・ 共催：(独)農研機構北海道農業研究センター
- ・ 後援：北海道開発局、北海道経済産業局、北海道、札幌市、帯広畜産大学、東京農業大学、藤女子大学、北海道大学、酪農学園大学、産総研北海道センター、北海道立総合研究機構、中小企業基盤整備機構北海道本部、北海道中小企業家同友会、北海道経済連合会、北海道科学技術総合振興センター、北海道バイオ産業振興協会、ホクレン農業協同組合連合会、日本政策金融公庫札幌支店農林水産事業、北海道銀行、北洋銀行、北海道新聞社
- ・ 参加者：2,500 名
- ・ 出展内容
《ファクトリールーム会場》
 - ①農業研究本部（各農業試験場）の紹介
(農業研究本部)
 - ②開発品種の紹介（十勝農業試験場）
「ほまれ大納言」の品種特性及び製品の紹介試食
 - ③サイレージ給餌技術の紹介（畜産試験場）
開発技術により飼育した黒毛和牛肉の紹介、試食
 - ④道総研「食産業」戦略の紹介（戦略研究チーム）
北海道産の小麦、大豆、ばれいしょ及びホッケを素材とした食品開発の紹介
- (4) 平成 26 年道央圏農業新技術発表会
 - ・ 日 時：平成 26 年 2 月 28 日(金)13:00 ～ 16:00
 - ・ 場 所：深川市経済センター 3 階ホール
 - ・ 主 催：中央農業試験場
 - ・ 後 援：深川市、きたそらち農業協同組合、北海道空知総合振興局
 - ・ 出席者：153 名（うち農業者 22 名）
 - ・ 発表課題：
 - ① 外食・中食向け！たくさんとれる北海道米「^{くういく}空育

180 号」

中央農業試験場生産研究部水田農業G

研究主任 木下 雅文

- ② 省力大規模化を目指すあなたへ 転作大豆の狭畦栽培

中央農業試験場作物開発部作物G

主査(畑作) 藤田 正平

- ③ スターチス・シヌアータの黄化クレームをなくすには？

花・野菜技術センター研究部技術研修G

主査(技術指導) 鈴木 亮子

- ④ 道産和牛の明日を拓く！雌牛の新改良法と種雄牛「勝早桜^{かつはやざくら}5」

畜産試験場家畜研究部肉牛G

研究主幹 宝寄山裕直

- ⑤ 過去のデータから「きたほなみ」の最適施肥量がわかる！

中央農業試験場農業環境部栽培環境G

研究職員 杉川 陽一

- ⑥ 北海道発！隔離施設と転換畑で育った健全ないちご苗

中央農業試験場病虫部予察G

研究主任 野津 あゆみ

- ⑦ 小規模でも高収益！有機トマト導入経営の安定方策

中央農業試験場生産研究部生産システム

研究職員 濱村 寿史

- ⑧ 若い苗で田植えしよう！早期異常出穂の抑制対策

中央農業試験場生産研究部水田農業G

研究主任 佐々木 亮

G 研修及び技術指導

1. 研修生の受け入れ

(1) 実務研修、派遣研修等

作物開発部

○小林哲也（食品加工研究センター）：実務研修生（H25.6.1～H26.3.31）

遺伝資源部

○吉村徹．遺伝資源部の業務内容と役割並びに水稲遺伝資源の保護．北海道立農業大学校稲作経営専攻コース1学年研修（10名）．（2013.8.9）

生産研究部

○濱村寿史．動向予測・経営分析・水稲直播栽培の経済性について．平成25年度高度専門技術研修（稲作）（岩見沢試験地）．（2014.6.13）

○塚本康貴．排水対策による生産性向上．平成25年度高度専門技術研修（畑作）（岩見沢試験地）．（2013.6.12）

○塚本康貴．水田土壌と施肥管理．平成25年度高度専門技術研修（稲作）（岩見沢試験地）．（2013.6.12）

○尾崎洋人・中村隆一．稲の品種改良について．平成25年度自治体職員協力交流事業研修（2013.7.2）

○中村隆一．総合的な学習の時間（南幌中学）（岩見沢市試験地）．（2013.10.4）

○其田達也．岩見沢を知ろう．岩見沢市立光陵中学校1学年フィールドワーク農業コース（岩見沢試験地）．（2013.10.22）

○尾崎洋人．「きたくりん」の特性について．23038コンソーシアム（実用技術：水稲）に係るきたくりん現地調査について（岩見沢試験地）．（2013.8.23）

○尾崎洋人．新たな耐冷性といもち病抵抗性を兼ね備えた極良食味および業務用米品種の開発とその普及について．新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業に係わる研修（岩見沢試験地）．（2013.11.22）

農業環境部

○杉川陽一．秋まき小麦の高品質安定栽培法に関する試験の概要．平成25年度普及指導員高度専門技術研修（畑作）講師（中央農試）．（2013.6.14）

病虫部

○小野寺鶴将、野津あゆみ．「畑作物および野菜の病害虫について」．酪農学園大作物保護学実習（中央農試）（2013.7.18）

○小野寺鶴将．「道央管内で問題となっている害虫」．平成25年度高度専門技術研修（畑作）（中央農試）（2013.6.14）

(2) JICA研修

遺伝資源部

研修項目	国名	研修者名	研修日
国別研修「農村振興」コース 「種子の保存と管理とその重要性」	モザンビーク	Mr. LANGA Arnaldo Anastacio	2013.8.24
		Mr. BUNUA Eduardo Paulo	
		Ms. NHANTUMBO Gracieta Salomao	
		Ms. CARLOS Gracinda Natalia	
		Mr. ARONE Joao	
		Mr. CHIOGHO Jose Domingos Dos Santos	
(遺伝資源部)	モンゴル	Mr. BIE Tomas Rafael	2013.7.24
		Mr. AGE Dinis Nuro	
自治体職員交流事業「種子の保存と管理とその重要性」	ベトナム	Ms. Davaasambu GENEENDULAM	2013.8.27
		Ms. Namjilsuren ALTANTSETSEG	
集団研修「農民参加による農業農村開発(A)ベトナム」コース 「遺伝資源部の役割と概要～種子の保存と管理とその重要性～」	ベトナム	Mr. NGUYEN Duy Dung	2013.8.27
		Mr. HA Xuan Mung	
		Mr. NGUYEN Y Enuol	
		Ms. LE Thi Huyon	
		Mr. TANG Manh Liep	
		Mr. PHAM Thanh Binh	
(遺伝資源部)		Mr. LE Van Son	
		Mr. VU A Thong	

生産研究部

○塚本康貴．水田地帯における農業者主体の用水利用技術．平成25年度JICA地域別研修「農民主体型用水管理システム」（岩見沢試験地）．（2013.6.28）

○尾崎洋人・中村隆一．平成24年度課題別研修「稲作技術開発コース」（岩見沢試験地）．（2013.7.24）

農業環境部

○竹内晴信．農地基盤改良について．JICA「中央アジア地域・農民組織強化コース」研修講師（中央農試）．（2013.5.17）

○日笠裕治．北海道における環境保全型農業．JICA「中央アジア地域・有機農業技術コース」研修講師（中央農試）．（2013.5.17）

(3) 民間研修

農業環境部

○長谷川寛．北海道農材工業株式会社．土壌分析に関する研修．（中央農試環境保全G）（2013.8.1～8.13）

2. 技術指導

作物開発部

○藤田正平．中央農試の畑作研究の概要．普及指導員高度専門技術研修（畑作）．（2013.6.14）

○藤田正平．普通大豆の出芽向上について・新品種紹介．

JA 北いしかり豆類振興部会。(2013.4.11)

○藤田正平. 大豆新品種の育成状況と今後の方向. 北海道豆類振興会(札幌市).(2014.1.16)

○鴻坂扶美子. 平成 25 年産てん菜の生産実績と低糖対策について. てん菜技術講習会.(2014.2.13)

○黒崎英樹. 豆類栽培の基本技術と品種の紹介. 豆作り講習会.(2014.2.4)

○黒崎英樹. 栽培技術講習会. JA なんぼろ.(2014.3.6)

○相馬ちひろ. 小麦新品種「つるきち」について. JA なんぼろ産地検討会.(2014.3.7)

○池永充伸. 北海道果樹協会青年部冬期研修会(札幌市).(2013.4.19)

○内田哲嗣. 北海道果樹協会総会(札幌市).(2013.4.24)

○吉田昌幸. 仁木町桜桃結実対策プロジェクト推進会議(仁木町).(2013.6.25)

○池永充伸. 全道果樹生産者研修会(深川市).(2013.8.23)

○池永充伸. 平成 25 年度空知醸造用ぶどうセミナーワークショップ(岩見沢市、三笠市).(2013.9.14)

○内田哲嗣, 吉田昌幸, 池永充伸. 北海道果樹懇話会第 15 回研修会(札幌市).(2013.11.28)

○吉田昌幸. JA よいちりんご部会研修.(余市町).(2013.12.2)

○吉田昌幸. 全道桜桃剪定講習会(札幌市).(2014.2.3)

○内田哲嗣. 農村ゼミナール新規就農者(醸造用ぶどう)コース/第 5 回研修会(余市町).(2014.2.19)

○内田哲嗣. 北海道ワインぶどうブランド力強化事業栽培評価検討会(札幌市).(2014.2.27)

○内田哲嗣, 吉田昌幸, 池永充伸. 平成 25 年度果樹対策懇談会(札幌市).(2014.3.7)

(以下、於中央農試)

○藤田正平. 納豆向け小粒大豆品種の開発状況について. 株式会社ミツカンサンミ、全農札幌麦類農産事務所、ホクレン雑穀課.(2013.6.19)

○黒崎英樹、相馬ちひろ. 小麦「ゆめちから」と「つるきち」の栽培法、小麦・大豆の有望系統について. 空知農業改良普及センター畑作部会.(2013.6.25)

○藤田正平. 小麦「ゆめちから」の栽培法、小麦と大豆の新品種について. 江別市畑作生産部会.(2013.6.28)

○相馬ちひろ. 小麦「つるきち」栽培法について. 胆振農業改良普及センター課題解決研修.(2013.6.28)

○藤田正平. 小麦の栽培法と有望系統について. 芽室町小麦生産集団協議会.(2013.7.1)

○相馬ちひろ. 小麦作柄視察調査. 北海道米麦改良協会.(2013.7.4)

○鴻坂扶美子、相馬ちひろ. 小麦「ゆめちから」栽培法

と大豆の狭畦栽培と有望系統について. 北海道畑作研究懇話会.(2013.7.5)

○鴻坂扶美子. 大豆新品種「とよみづき」について. 南幌町大豆振興会.(2013.7.12)

○藤田正平. 畑作 3 品の病害虫や新品種について. 常呂町農協土佐地区営農集団.(2013.7.12)

○鴻坂扶美子. 大豆、小豆の生育状況と新品種について. 長谷部商事株式会社.(2013.7.18)

○黒崎英樹. 大豆新品種(中育 69 号)について. むかわ町スズマル生産組合.(2013.7.22)

○前野眞司. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化について. 清里町農業協同組合営農集団長連絡協議会.(2013.7.31)

○藤田正平. 道内主要農産物の品種改良について. いしかり地産地消を楽しむ会(一般消費者).(2013.8.20)

○藤田正平. 小麦、豆類の新品種等について. JA とまこまい広域青年部追分支部会.(2013.12.15)

○藤田正平. 大豆の狭畦栽培について. 石狩農業技術検討会.(2014.3.7)

○吉田昌幸, 池永充伸. 剪定研修. 滝川果樹協会わい化部会.(2013.4.10)

○吉田昌幸, 池永充伸. おうとう育種に関する視察研修. 山形県園芸試験場.(2013.5.15)

○内田哲嗣. 北海道土壌肥料協議会現地検討会. 北海道土壌肥料協議会.(2013.6.20)

○内田哲嗣, 吉田昌幸, 池永充伸. 平成 25 年度普及指導員スペシャリスト機能強化研修(高度専門技術研修(果樹)・前期). 後志農業改良普及センターおよび留萌農業改良普及センター果樹担当者.(2013.7.22 ~ 7.26)

○内田哲嗣, 吉田昌幸, 池永充伸. 北海道に適した果樹優良品種の調査研修. 空知農業改良普及センター園芸部会果樹担当者.(2013.10.29)

○内田哲嗣, 池永充伸. 平成 25 年度普及指導員スペシャリスト機能強化研修(高度専門技術研修(果樹)・中期). 後志農業改良普及センターおよび留萌農業改良普及センター果樹担当者.(2013.11.12 ~ 11.15)

○内田哲嗣, 吉田昌幸, 池永充伸. 平成 25 年度普及指導員スペシャリスト機能強化研修(高度専門技術研修(果樹)・後期). 後志農業改良普及センターおよび留萌農業改良普及センター果樹担当者.(2014.2.24 ~ 3.6)

○内田哲嗣, 吉田昌幸, 池永充伸. 平成 25 年度果樹剪定研修会. 空知・留萌・後志・石狩・上川各農業改良普及センター果樹担当者.(2014.3.5)

○内田哲嗣, 吉田昌幸, 池永充伸. 剪定研修. 滝川果樹協会わい化部会.(2013.4.10)

○阿部珠代. 硬質小麦品種「つるきち」の加工適性検討会. (平成 25 年 11 月 8 日)

○阿部珠代. 十勝産小麦フォーラム. (平成 26 年 3 月 1 日)

○阿部珠代. 麦チェンネットワーク会議幹事会. (平成 26 年 3 月 25 日)

○小宮山誠一. 「農産物から食べ物」その栄養とおいしさ. 石狩管内放課後児童会・学童クラブ指導員研修会 (2013.10.20)

遺伝資源部

○浅山聡. 秋まき小麦の休眠打破方法、異型の抜きとり方法. 平成 25 年度秋まき小麦種子審査研修会～北海道農政部主催～ (中央農試遺伝資源部). (2013.7.8)

○浅山聡. 秋まき小麦新品種の形態的特性について (ホクレン滝川種苗生産センター). (2013.7.18)

○吉村徹. 本年の異型出現状況の見通し. 平成 25 年度水稻種子生産技術現地研修会 (JA ふらの). (2013.8.7)

○浅山聡. 秋まき小麦原原種に発生したうどんこ病の防除について (ホクレン滝川種苗生産センター). (2013. 10.12)

生産研究部

○岡田直樹. 農業と農村の連動した振興について. 道南地域農業技術支援セミナー (大野町). (2013. 7. 29)

○白旗雅樹. 農作業安全研修. 北いぶき農業協同組合. (2013. 5. 10)

○鈴木 剛. トランスボーダファーマーミングの概要と展望. 鹿追町農業協同組合. (2013. 7. 30)

○濱村寿史. 平成25年度普及指導員研修(高度専門技術研修・稲作) (岩見沢試験地). (2013. 6. 13)

○濱村寿史. 水稻直播栽培の経済性と導入効果. ピンネ農業公社 (新十津川町) (2013. 6. 26)

○濱村寿史. 農業マーケティング論. 北海道立農業大学校 (本別町). (2013. 10. 25)

○濱村寿史. 経営分析に係る講習. 板谷コミュニティセンター (北竜町) (2013. 10. 31)

○濱村寿史. 道央圏における今後の農業動向予測. 恵庭・北広島地区指導農業士研修会 (恵庭市). (2013. 11. 29)

○濱村寿史. 経営分析に係る講習. 板谷コミュニティセンター (北竜町) (2014. 2. 25)

○平石学. 平成24年経営分析結果について. 豊里地区活性化協議会経営部会研修会 (岩見沢市). (2013. 4. 12)

○平石学. 宗谷振興局における今後の農業動向予測. 宗谷南部農業推進協議会講習会 (中頓別町). (2013. 6. 12)

○平石学. 道南地区の今後の農業動向予測. 道南地域農

業技術支援セミナー (大野町). (2013. 7. 29)

○平石学. 日高農業の動向予測と今後検討課題. 日高農業の今後の検討課題に関する講演会 (静内町). (2013. 10. 16)

○平石学. 経営分析の手順について. 空知農業改良普及センター北空知支所講習 (深川市). (2013. 10. 31)

○平石学. やってみよう経営分析!. 北村直播南研修会 (岩見沢市). (2014. 2. 28)

○平石学. 北海道農業の動向予測・今後なにをやるか. 経営アドバイザー研修会 (長沼町). (2014. 3. 4)

○平石学. 子実用とうもろこしの導入効果. とうもろこし講習会 (栗山町) (2014. 3. 4)

○平石学. 平成25年経営分析結果について. 豊里地区活性化協議会経営部会研修会 (岩見沢市). (2014. 3. 14)

○石井耕太. 平成25年度北海道農業指導士認定研修. 散布 (施用) 技術 (札幌市). (2014. 2. 7)

○佐々木亮. 水稻乾田直播における硝化抑制剤入り肥料について. びばい直播研究会 (美唄市). (2013. 4. 10)

○塚本康貴. 平成24年度疎水材暗渠機能保全検討調査報告. 平成24年度疎水材暗渠機能保全検討調査報告会 (札幌市). (2013. 6. 14)

○塚本康貴. 転作物に対する集中管理孔を活用した地下灌漑技術について. J Aいわみざわ研修会. (岩見沢市). (2013. 6. 14)

○塚本康貴. 転換作物に対する集中管理孔を活用した地下かんがい技術について. 地域第一係重点地区 (夏季) 研修会 (奈井江町). (2013. 6. 26)

○塚本康貴. 暗きょ排水効果の長寿命化について. 平成25年度十勝管内農業農村整備担当者会議 (帯広市). (2013. 7. 1)

○塚本康貴. 集中管理孔を活用した地下灌漑について. 岩見沢土地改良推進連合会研修 (岩見沢市). (2013. 7. 11)

○佐々木亮. 水稻乾田直播における硝化抑制剤入り肥料について. びばい直播研究会 (美唄市). (2013. 8. 27)

○佐々木亮. 鉄コーティング種子を利用した水稻直播栽培について. (2013. 8. 30)

○塚本康貴. 転作物に対する集中管理孔を活用した地下灌漑技術. 平成25年度産きたほなみ1トン獲りプロジェクト技術検討会 (岩見沢市). (2013. 9. 6)

○塚本康貴. 地下灌漑含め灌漑、暗渠など排水対策について. 滝上町畑作振興会研修 (中央農業試験場). (2013. 11. 14)

○塚本康貴. 北海道における大区画圃場の整備. 農業農村工学会北海道支部平成25年度シンポジウム (札幌

市). (2013.12.3)

○佐々木亮. 水稲乾田直播における硝化抑制剤入り肥料について. 水稲直播栽培等に係る技術研修会(旭川市). (2013.12.6)

○佐々木亮. 水稲乾田直播における硝化抑制剤入り肥料について. いわみざわ直播研究会(岩見沢市). (2013.12.1)

○中村隆一. 水稲の栽培管理. 平成25年度水稲施肥防除技術セミナー(札幌市). (2014.1.14).

○木下雅文. 外食、中食向け!たくさんとれる北海道米「空育180号」. H26新技術発表会(札幌市). (2014.2.8)

○其田達也. 乾杯の新たなラインアップ 新酒米「きたしずく」. 平成25年度水稲施肥防除技術セミナー(札幌市). (2014.1.14).

○尾崎洋人. イネいもち病抵抗性強品種「きたくりん」の育成. 全国肥料商連合会北海道地区部会(札幌市). (2014.2.21)

○塚本康貴. 集中管理圃について. ながぬま土地改良区国営農地再編事業南長沼地区期成会研修会(長沼町). (2014.2.27)

○木下雅文. 外食、中食向け!たくさんとれる北海道米「空育180号」. H26道央圏新技術発表会(深川市). (2014.2.28)

○其田達也. 乾杯の新たなラインアップ 新酒米「きたしずく」. H26道央圏新技術発表会(深川市). (2014.2.28)

○佐々木亮. 若い苗で田植えしよう!早期異常出穂の抑制対策. H26道央圏新技術発表会(深川市). (2014.2.28)

○佐々木亮. 無代かき表面播種湛水出芽法による水稲直播栽培技術について. 平成25年度北海道直播稲作ネットワーク会議(札幌市). (2014.3.7)

○佐々木亮. 無代かき表面播種湛水出芽法による水稲直播栽培技術について. 平成25年度道南地区水稲直播冬季研修会(北斗市). (2014.3.3)

○佐々木亮. 水稲乾田直播における硝化抑制剤入り肥料ならびに湛水直播における施肥法について. JA北いぶき妹背牛支所水稲直播栽培講習会(妹背牛町). (2014.3.25)

農業環境部

○加藤淳. 北海道フードマイスター検定運営委員会(上級編). 札幌商工会議所(札幌市). (2013.5.15, 2013.7.1, 2013.12.4)

○加藤淳. 平成24年度土づくり技術資料編纂委員会. 北海道土づくり運動推進本部(札幌市). (2013.5.16,

2013.10.17)

○加藤淳. 小豆の健康機能性と選別技術について. 第62回日本製餡組合連合会総会(東京). (2013.5.28)

○加藤淳. 北海道における農業生産と豆類の健康機能性. 食と健康シンポジウム(札幌市). (2013.9.3)

○加藤淳. 北海道産じゃがいもの調理・加工特性とその魅力. 北海道フードビジネスセミナー2013(東京都). (2013.10.10)

○加藤淳. 豆が育む元気な家族. 北海道豆トークショー2013(函館市). (2013.10.26)

○加藤淳. 北海道の素材の魅力～北海道産豆類の機能性と付加価値の向上～. 機能性食品開発セミナー(札幌市). (2013.11.8)

○加藤淳. 豆類の機能性と付加価値向上戦略. 地域バイオ育成講座(千歳市). (2013.11.26)

○加藤淳. 北海道産大豆の魅力. おいしい納豆を作る会新春講演会(札幌市). (2014.1.15)

○加藤淳. 北海道フードマイスター検定(上級試験)受験対策セミナー. 札幌商工会議所(札幌市). (2014.1.19)

○加藤淳. 北海道産小麦の加工特性とその可能性について. 札幌市フードビジネスセミナー(東京都). (2014.2.12)

○加藤淳. 小豆等豆類の成分・機能性と和菓子の健康性. 全国和菓子協会シンポジウム(岩手県一関市). (2014.3.29)

○竹内晴信. 北海道における農地土壌と圃場の改良技術. 札幌地域計画センター社内研修会(札幌市). (2013.7.24)

○竹内晴信. 土壌物理性の改善について. ホクレン農業協同組合連合会新任者技術研修会. (2013.7.31)

○富沢ゆい子. 麦・豆の輪作体系に子実用とうもろこしを導入した際の効果とその栽培法について. JAそらち南 麦・豆講習会. (栗山町) (2014.3.4)

○富沢ゆい子. 露地栽培ねぎにおけるチェーンポット内施肥技術について. JA道央露地ネギ講習会. (札幌市) (2014.3.20)

○日笠裕治. 北海道における有機農業の試験研究の現状. 大地を守る会生産者会議講演会(新得町). (2013.8.1)

○日笠裕治. 地球温暖化が北海道農業に与える影響. 南富良野市農業委員会(中央農試). (2013.11.22)

○日笠裕治. 地球温暖化が北海道農業に与える影響. 平成25年度全道養豚経営研修会(札幌市). (2013.11.29)

○日笠裕治. 今後の気象変動による作物ごとの変化と対応. 日の丸会農薬部会(札幌市). (2014.1.17)

○古館明洋. 後作緑肥導入によるたまねぎ畑の土づくり.

平成 26 年度地域農業技術センター連絡会議（NATEC）研究交流会（札幌市）。（2014.2.17）

○古館明洋．秋まき小麦・後作緑肥導入によるたまねぎ畑の土づくり．北海道農協「土づくり」運動推進本部主催 平成 25 年度 土づくり推進研究会【新しい土づくり技術】（札幌市）。（2014.3.6）

○古館明洋．道央水田転換畑における秋まき小麦「きたほなみ」の大豆畦間ばらまき栽培技術．ながぬま麦・大豆生産流通協議会栽培講習会（長沼町）。（2014.3.12）

○坂口雅己．土壌分析法に係る研修．洞爺湖町洞爺総合支所（中央農試）。（2013.7.17）

○坂口雅己．農業試験場における有機農業研究の成果．有機農業技術開発研究班会議（洞爺湖町）。（2013.8.20）

○杉川陽一．有機栽培コマツナの品質を高める栽培法．有機農業技術開発研究班会議（洞爺湖町）。（2013.8.20）

○坂口雅己．北海道における有機農業の現状と技術的対応．北海道大学農学部生物資源科学科（中央農試）。（2013.9.24）

○櫻井道彦．北海道における環境保全型農業．平成 25 年度 JICA「中央アジア地域 未利用有機物資源を活用した持続型農業」コース（中央農試）。（2013.7.9）

○櫻井道彦．有機栽培露地野菜畑の土壌診断に基づく窒素施肥基準．いぶり・ひだか有機農業ネットワーク技術情報交換会（苫小牧市）。（2014.2.12）

○櫻井道彦．有機栽培に応用できる施肥技術と生物性．平成 25 年度後志有機農業ネットワーク冬期研修会（倶知安町）。（2014.2.14）

○杉川陽一．有機栽培コマツナの品質を高める栽培法．平成 25 年度有機農業技術に関する現地研修会 in 洞爺湖町（洞爺湖町）。（2013.8.20）

○杉川陽一．有機栽培コマツナの品質を高める栽培法．いぶり・ひだか有機農業ネットワーク技術情報交換会（苫小牧市）。（2014.2.12）

○杉川陽一．有機栽培コマツナの品質を高める栽培法．有機農業ネットワーク冬季研修会（倶知安町）。（2014.2.14）

病虫害部

○相馬潤．「小麦の雪腐病に対する殺菌剤の残効性と防除時期」北海道植物防疫協会研修会．（札幌市）（2014.3.7）

○東岱孝司「豆類の線虫被害の現状と対策」豆作り講習会（ニセコ町）（2014.2.4）

○東岱孝司「良質水稻生産のための病虫害防除」良質米麦生産技術講習会（岩見沢市）（2014.3.6）

○東岱孝司「病虫害に強く、おいしい、水稻新品種「き

たくりん」」2014 北海道クリーン農業セミナー（札幌市）（2014.3.12）

○小野寺鶴将．「大豆の虫害を防ぐ」．豆・麦・輪作研究会会研修（岩見沢市）（2014.2.3）

○清水基滋．「作物の病害とその防除」．平成25年度北海道認定特別研修（道農政部）（札幌市）（2014.2.7）

○清水基滋．「北海道における殺菌殺虫剤耐性問題と病害虫の情報について」．平成 25 年度北海道認定一般研修（道農政部）（札幌市）（2014.2.28）

○清水基滋．「平成 26 年に特に注意が必要な病害虫」．春季研修会（北海道植物防疫協会）（札幌市）（2014.3.7）

○小松 勉．「醸造用醸造用ぶどうにおけるブドウつる割細菌病の生態解明と防除対策」．春季研修会（北海道植物防疫協会）（札幌市）（2013.3.7）

企画調整部地域技術グループ

（1）普及指導員対象

○田中一生．石狩農業改良普及センター本所支援要請（水稻直播栽培技術の定着）．（恵庭市）。（2013. 4. 18）

○田中一生．石狩農業改良普及センター北部支所支援要請（水稻無代かき湛水直播栽培の普及と定着）．（中央農試岩見沢試験地）．（2013. 4. 22）

○田中一生．後志農業改良普及センター本所支援要請（高品質な酒米生産技術の普及）．（ニセコ町）．（2013. 5. 1）

○田中一生．後志農業改良普及センター本所支援要請（後志における水稻直播導入の可能性検討）．（倶知安町）．（2013. 5. 2, 6. 6）

○田中一生．普及指導員スペシャリスト機能強化研修、高度専門技術研修（稲作）．（岩見沢市）．（2013. 6. 10）

○田中一生．日高農業改良普及センター日高西部支所支援要請（日高西部支所管内における水稻難防除雑草対策支援）．（平取町）．（2013. 6. 24）○田中一生．スペシャリスト機能強化研修（専門技術研修（稲作））．（岩見沢市）．（2013. 7. 2）

○田中一生．空知農業改良普及センター本所支援要請（酒米品種「吟風」の品質向上支援）．（深川市）．（2013. 8. 24）

○田中一生．空知農業改良普及センター中空知所支援要請（中空知酒米適期刈り取り講習）．（新十津川町）．（2013. 8. 24）

○稲川 裕、内田哲嗣、吉田昌幸、池永充伸、小松 勉、武澤友二．スペシャリスト機能強化研修、高度専門技術研修（果樹）．（長沼町、余市町、仁木町、滝川市）．（2013. 7. 22～7. 26、11. 12～15、2. 24～3. 6）

○笛木伸彦、（松本 勇）．スペシャリスト機能強化研修（専門技術研修（土壌・病害虫））．（本別町）．（2013. 8.

5～8.7)

○笛木伸彦、(松本 勇). スペシャリスト機能強化研修
(高度専門技術研修(クリーン農業)). (滝川市). (2013.
7.25～7.25)

○稲川 裕、内田哲嗣、吉田昌幸、池永充伸. 空知農業
改良普及センター本所支援要請 (北海道に適した果樹優
良品種の調査研修). (長沼町). (2013.10.29)

○田中一生. 石狩農業改良普及センター本所支援要請(石
狩管内の水稻の食味及び収量の安定化). (恵庭市). (20
13.6～12月)

○菅原章人. 石狩農業改良普及センター北部支所支援要
請 (高糖度トマト栽培技術における第1段果房の尻腐果
および高温による花飛び対策の修得). (新篠津村). (20
13.6.5)

○菅原章人. 石狩農業改良普及センター北部支所支援要
請(アスパラガス伏せ込み栽培安定生産技術の修得). (新
篠津村). (2013.11.12)

○中住晴彦、菅原章人. 石狩農業改良普及センター本所
・江別分室支援要請 (高品質たまねぎの生産技術の修
得). (石狩市、札幌市). (2013.7.13、8.21、12.10)

○稲川 裕. 農業改良普及センター(共通)支援要請(果
樹栽培及び病虫害防除技術習得). (長沼町、札幌市). (2
013.5.1、5.28、7.23、8.8、10.29、3.5)

○稲川 裕. 後志農業改良普及センター北後志支所支援
要請 (ぶどう省力栽培方法の導入). (仁木町). (2013.6.
17)

○稲川 裕、内田哲嗣、吉田昌幸、池永充伸. 後志農業
改良普及センター北後志支所支援要請(果樹の有望品種、
新品種の導入). (余市町、長沼町). (2013.10.28、10.29、
12.2)

○稲川 裕、吉田昌幸. 後志農業改良普及センター北後
志支所支援要請 (新規有望品種 「紅秀峰」の情報提供
と剪定技術習得に対する支援). (長沼町). (2014.3.5)

○菅原章人. 胆振農業改良普及センター支援要請 (園芸
作物の病虫害及び生理障害初期診断のポイント整理).
(伊達市). (2013.8.30、11.22)

○菅原章人、坂口雅己. 胆振農業改良普及センター支援
要請 (トマト栽培における肥培管理技術の向上). (伊達
市). (2013.6.5)

○笛木伸彦、杉川陽一、櫻井道彦. 後志農業改良普及セ
ンター本所支援要請 (クリーン・有機). (倶知安町). (2
014.2.14)

○笛木伸彦. 後志農業改良普及センター本所支援要請 (J
Aようてい職員研修会、土壌肥料研修). (倶知安町). (2
013.6.17)

○笛木伸彦. 石狩農業改良普及センター本所支援要請(移
植てん菜のリン酸減肥による低コスト生産技術の定着).
(恵庭市、千歳市). (2013.6.19)

○笛木伸彦. 後志農業改良普及センター本所支援要請(秋
まき小麦低収要因の解析手法と具体的対策技術). (共和
町). (2013.7.22～23)

(2) 一般対象

○田中一生. 空知地区水稻安定生産に向けた深水キャラ
バン. (新十津川町、美瑛市、南幌町). (2013.6.27)

○田中一生. 空知産米価値向上検討会研修. (岩見沢市).
(2013.7.2)

○田中一生. 中空知エコ米生産共和国現地研修会. (奈
井江町). (2013.7.17)

○稲川 裕. 滝川果樹協会わい化部会研修. (滝川市).
(2013.12.3)

○笛木伸彦. 肥料農薬講習会(ホクレン主催). (札幌市).
(2013.4.16)

○笛木伸彦. 北海道農業の海外展開の可能性に関する調
査検討会に出席(北海道経済産業局主催). (札幌市). (2
013.10.8)

○笛木伸彦. 北海道農業の海外展開の可能性に関する調
査検討会に出席(北海道経済産業局主催、2013.10のロシ
ア現地圃場土壌調査結果の報告). (札幌市). (2014.1.2
9)

○笛木伸彦. JA とまこまい広域第7回農業総合研修会
講師(安定収量確保に向けた土壌診断の活用). (厚真町).
(2013.11.20)

○笛木伸彦. 北海道土壌肥料懇話会シンポジウム講師「改
めて問うー北海道農業発展に土壌肥料はどのように貢献
するのか」、「北海道農業と土壌肥料 今まで、そしてこ
れから」. (2013.12.5)

○笛木伸彦. 石狩地区施防協成績検討会講師. (「有機
物の肥効評価と局所施肥を活用した畑作物・野菜に対す
るリン酸減肥指針」ならびに「被覆尿素肥料の畑地にお
ける窒素溶出特性とブロッコリー、秋まき小麦に対する
施用法」) (札幌市). (2013.12.6)

○笛木伸彦. 系統肥料研修会. (札幌市). (2014.3.18)

3. 参観人

本場	45 件	941 人
遺伝資源部	11 件	66 人
岩見沢試験地	33 件	491 人
計	89 件	1,498 人

4. 職員研修

1) 職員研修

(1) 一般研修

氏 名	研 修 項 目	期 間	研 修 場 所
荻野 瑠衣	新規採用職員研修	H25. 4. 18 ～ H25. 4. 19	道総研 産業技術研究本部 工業試験場
竹中 秀行	研究進行管理能力向上研修	H25. 5. 31 ～ H25. 5. 31	北海道大学創成研究機構
竹内 徹	研究進行管理能力向上研修	H25. 5. 31 ～ H25. 5. 31	北海道大学創成研究機構
白井 滋久	研究進行管理能力向上研修	H25. 5. 31 ～ H25. 5. 31	北海道大学創成研究機構
奥村 正敏	研究進行管理能力向上研修	H25. 5. 31 ～ H25. 5. 31	北海道大学創成研究機構
加藤 淳	研究進行管理能力向上研修	H25. 5. 31 ～ H25. 5. 31	北海道大学創成研究機構
田中 文夫	研究進行管理能力向上研修	H25. 5. 31 ～ H25. 5. 31	北海道大学創成研究機構
鴻坂 扶美子	新任主査級研修	H25. 7. 29 ～ H25. 7. 30	北海道大学創成研究機構
坂口 雅己	新任主査級研修	H25. 7. 29 ～ H25. 7. 30	北海道大学創成研究機構
黒崎 英樹	新任主査級研修	H25. 7. 29 ～ H25. 7. 30	北海道大学創成研究機構
吉村 徹	新任主査級研修	H25. 7. 29 ～ H25. 7. 30	北海道大学創成研究機構
千崎 利彦	法令遵守研修	H25. 10. 22 ～ H25. 10. 22	道総研 産業技術研究本部 工業試験場
齋藤 優介	農業研究本部新人研修	H25. 10. 29 ～ H25. 10. 30	中央農業試験場大会議室
板垣 英祐	農業研究本部新人研修	H25. 10. 29 ～ H25. 10. 30	中央農業試験場大会議室
荻野 瑠衣	農業研究本部新人研修	H25. 10. 29 ～ H25. 10. 30	中央農業試験場大会議室
梶田 路津子	農業研究本部新人研修	H25. 10. 29 ～ H25. 10. 30	中央農業試験場大会議室
藤井 はるか	農業研究本部新人研修	H25. 10. 29 ～ H25. 10. 30	中央農業試験場大会議室
栢森 美如	農業研究本部新人研修	H25. 10. 29 ～ H25. 10. 30	中央農業試験場大会議室
小林 哲也	農業研究本部新人研修	H25. 10. 29 ～ H25. 10. 30	中央農業試験場大会議室
白井 滋久	法令遵守研修	H25. 12. 18 ～ H25. 12. 18	中央農業試験場大会議室
玉掛 秀人	法令遵守研修	H25. 12. 18 ～ H25. 12. 18	中央農業試験場大会議室
竹中 秀行	植物遺伝資源の導入に係る専門研修	H25. 12. 20 ～ H25. 12. 20	道総研 産業技術研究本部 工業試験場
竹内 徹	植物遺伝資源の導入に係る専門研修	H25. 12. 20 ～ H25. 12. 20	道総研 産業技術研究本部 工業試験場
白井 滋久	植物遺伝資源の導入に係る専門研修	H25. 12. 20 ～ H25. 12. 20	道総研 産業技術研究本部 工業試験場
奥村 正敏	植物遺伝資源の導入に係る専門研修	H25. 12. 20 ～ H25. 12. 20	道総研 産業技術研究本部 工業試験場
玉掛 秀人	植物遺伝資源の導入に係る専門研修	H25. 12. 20 ～ H25. 12. 20	道総研 産業技術研究本部 工業試験場
千崎 利彦	北海道 新任課長級研修	H25. 5. 28 ～ H25. 5. 28	道庁別館
千葉 義幸	北海道 新任主査級研修	H25. 6. 4 ～ H25. 6. 5	道庁別館
長谷山 知樹	北海道 新任主査級研修	H25. 6. 17 ～ H25. 6. 18	道庁別館
木村 良	北海道 リスクマネジメント研修	H25. 7. 10 ～ H25. 7. 10	空知総合振興局
木村 良	北海道 新任主幹級研修	H25. 7. 24 ～ H25. 7. 25	道庁赤レンガ
瀬川 琴美	北海道 文章作成力向上研修	H25. 10. 9 ～ H25. 10. 9	道庁別館
白井 滋久	広報研修	H26. 1. 27 ～ H26. 1. 27	北海道大学創成研究機構
齊藤 吉明	北海道 クレーム対応研修	H26. 1. 31 ～ H26. 1. 31	道庁別館

(2) 専門研修

①海外研修

氏 名	研 修 項 目	期 間	研 修 場 所
鈴木 剛	専門研修海外研修	H25. 9. 6 ～ H25. 9. 27	デンマークオーフス大学、ドイツミュンヘン工科大学等

②国内研修 I

氏 名	研 修 項 目	期 間	研 修 場 所
塚本 康貴	専門研修国内研修 I	H25. 8. 5 ～ H25. 9. 6	北海道大学農学研究院

③国内研修 II

氏 名	研 修 項 目	期 間	研 修 場 所
板垣 英祐	平成25年度作物及び土壌残留農薬分析研修	H25. 8. 26 ～ H25. 8. 30	茨城県常総市 残留農薬研究所
田中 一生	日本作物学会第236回講演会	H25. 9. 9 ～ H25. 9. 12	鹿児島市(鹿児島大学)
杉川陽一	農業気象研究会	H25. 11. 13 ～ H25. 11. 14	茨城県つくば市(中央農研)
中村 隆一	農研機構シンポジウム「田畑輪換と地力」及びバイオ炭課題設定打合せ	H25. 11. 19 ～ H25. 11. 21	東京都・大阪市
櫻井道彦	2013年度日本土壌肥料学会北海道支部秋季大会および北海道土壌肥料懇話会シンポジウム	H25. 12. 4 ～ H25. 12. 5	北海道札幌市(かでる2. 7)
東岱孝司	生態と防除研究会(植物病害カンファレンス)	H25. 12. 15 ～ H25. 12. 17	富山県富山市(明治安田生命ホール)
竹内 徹	第1回 生態と防除研究会	H25. 12. 16 ～ H25. 12. 17	富山県富山市(明治安田生命ホール)
鈴木 剛	再生可能エネルギーに関する専門技術セミナー	H26. 2. 26 ～ H26. 2. 28	東京都
鈴木和織	日本育種学会(第125回講演会)	H26. 3. 21 ～ H26. 3. 22	宮城県仙台市
岡田 直樹	2014年農業問題研究学会春期大会	H26. 3. 27 ～ H26. 3. 29	兵庫県神戸市
田中 一生	日本作物学会第237回講演会	H26. 3. 28 ～ H26. 3. 31	千葉県千葉市(千葉大学)
浅山 聡	日本作物学会第237回講演会	H26. 3. 28 ～ H26. 3. 30	千葉県(千葉大学)

2) 職場研修

(1) 集団指導

なし

(2) 集合研修

研修名	実施年月日	実 施 場 所	出席人数
農作業安全研修	H25. 4. 18	講堂	80
健康づくりセミナー	H25. 10. 3	講堂	41
交通安全研修(長沼)	H25. 11. 15	講堂	85
交通安全研修(岩見沢)	H25. 11. 21	水田農業グループ	25
「植物遺伝資源の導入に係る専門研修」伝達研修	H25. 12. 24	講堂	33
「法令遵守研修」伝達研修	H25. 12. 25	講堂ほか	111

5. 海外出張

氏 名	用 務 名	期 間	出 張 先
鴻坂扶美子	国際学会「International Society for Plant Anaerobiosis 11th conference」出席	H25.10.6 ～ H25.10.11	フィリピン (IRRI)

6. その他

1) 表彰

(1) 職員永年勤続表彰

氏 名	表 彰	表彰年月日
竹中 秀行	北海道立総合研究機構職員表彰（永年勤続）	H25.12.6
白旗 雅樹	北海道立総合研究機構職員表彰（永年勤続）	H25.12.6
木村 良	北海道職員表彰（永年勤続）	H25.11.15
深瀬 秀太郎	北海道職員表彰（永年勤続）	H25.11.15

(2) 研究成果表彰

氏 名	表 彰	表彰年月日
小林哲也	平成25年度日本缶詰協会技術賞	H25.11.5
鈴木孝子、竹内徹、堀田治邦	道総研職員表彰（理事長表彰）	H25.12.6
小倉玲奈、美濃健一、白井佳代	第6回北日本病害虫研究会賞	H26.2.20
鈴木剛、白旗雅樹	日本農業気象学会（論文賞）	H26.3.19
後藤英次、古原洋、長田亨	2014年度日本作物学会技術賞（第6回）	H26.3.29
山下陽子	第11回日本作物学会論文賞	H26.3.29

H 行 事

月	日	行 事 等	月	日	行 事 等
4	11	研究本部長・場長会議(札幌)	10	18	北海道農業試験研究推進会議・本会議企画部会(北農研)
4	15	定例部長会議	10	22	監事監査
4	18	農作業安全研修	10	23	二場連絡協議会(北農研・農研本部)(北農研)
4	22	研究本部長会議(工試)	10	25	研究調整会議(中央農試)
4	25	研究調整会議(札幌)	10	29 ~ 30	新人研修(中央農試)
5	10	北海道農業技術推進委員会分科会(札幌)	11	7 ~ 8	ビジネスEXPO(札幌)
5	14	研究本部長会議(工試)	11	11	研究本部長会議(北総研)
5	17	農業研究本部場長会議(札幌)	11	11 ~ 12	監査法人監査
5	27	農政部ニーズ検討会(札幌)	11	15、21	交通安全講習(中央農試)
6	3	二場連絡協議会(北農研・農研本部)(中央農試)	11	18	農業研究本部場長会議(札幌)
6	11	研究本部長会議(工試)	11	28	農業試験研究・技術普及検討懇話会(札幌)
6	10	農業研究本部場長会議(札幌)	11	29 ~ 30	アグリビジネス創出フェア(札幌)
6	10	北海道農業技術推進委員会(札幌)	12	6	道総研職員表彰式(札幌)
6	13	定例部長会議	12	11	研究本部長会議(工試)
6	25 ~ 26	全国農業関係試験研究場所長会議(東京)	12	18	定例部長会議
7	10	研究調整会議(中央農試)	12	18	法令遵守研修(中央農試)
7	11	研究本部長会議(工試)	12	19	研究調整会議(中央農試)
7	16 ~ 19	新規課題検討会議(札幌)	12	24	植物遺伝資源の導入に係る専門研修(中央農試)
8	1	臨時部長会議	12	25 他	法令遵守研修(中央農試)
8	2	中央農試公開デー	1	20 ~ 24	成績会議(札幌)
8	6	北海道農業・農村振興審議会(札幌)	1	30	北海道農業・農村振興審議会(札幌)
8	7	みんなで科学を楽しもう サイエンスパーク(札幌)	1	31	北海道優良品種認定委員会(札幌)
8	20	道監査	1	31 ~ 5	北海道農業試験研究推進会議・推進部会(北農研)
8	27 ~ 28	新規候補課題に係る本部長ヒアリング(中央農試)	2	12	研究本部長会議(道総研プラザ)
9	5 ~ 6	NATEC研究情報交換会(札幌市)	2	14	研究調整会議(中央農試)
9	11	研究本部長会議(花・野菜技術センター)	2	17	NATEC総会・研究交流会(札幌)
9	17	研究調整会議(中央農試)	2	18	農業新技術発表会(札幌)
9	19	避難訓練	2	28	道央圏農業新技術発表会(美唄)
10	2	農業研究本部場長会議(札幌)	3	10 ~ 14	設計会議(北農研)
10	3	健康づくりセミナー(中央農試)	3	11	研究本部長・場長会議(道総研プラザ)
10	7	定例部長会議	3	17	北海道農業試験研究推進会議本会議(北農研)
10	11	研究本部長会議(工試)	3	24	農業研究本部場長会議(札幌)
10	18	北海道地域行政研究連携会議(行政企画委員会)(札幌)	3	27	定例部長会議
			3	31	辞令交付

I 自己点検への対応表

連番	項目番号	事項	農業本部	地域 G	作開	遺伝	生シ	農環	病虫
95	15	研究成果発表会・企業等向けセミナーの開催件数 (H25)	2	0	0	0	0	0	0
99	15	研究成果発表会・企業等向けセミナーへの延べ参加者数 (H25)	391	0	0	0	0	0	0
103	15	研究会等の開催件数 (H25)	1	0	1	0	2	0	0
107	15	研究会等への延べ参加者数 (H25)	59	0	50	0	44	0	0
111	15	発表会・展示会等への出展件数 (H25)	5	0	0	0	0	4	1
115	16	研究報告書の発行種類数 (H25)	3	0	0	2	0	0	0
119	16	技術資料の発行種類数 (H25)	1	0	0	1	0	0	0
126	17	学会やシンポジウム等での発表件数 (H25)	0	2	9	2	26	8	15
130	17	学術誌や専門誌への投稿論文数 (H25)	0	0	3	0	5	10	8
134	18	普及組織との連絡会議等開催件数 (H25)	0	59	0	0	0	2	0
138	20	技術相談件数 (H25)	2	122	35	0	31	67	2
146	21	技術指導件数 (H25)	2	147	13	4	10	32	8
147	21	うち複数分野の研究員による実施件数 (H25)	1	0	0	0	0	0	0
154	22	技術審査件数 (H25)	0	0	0	32	0	6	0
158	23	技術開発派遣指導件数 (H25)	0	0	0	0	0	0	0
162	23	技術開発派遣指導派遣日数 (H25)	0	0	0	0	0	0	0
166	25	依頼試験実施件数 (H25)	0	0	0	0	1	158	0
170	26	試験機器等の設備の貸与件数 (H25)	0	0	0	0	0	0	0
194	32	利用者意見把握調査の回答数 (H25)	30	0	0	0	0	0	0
195	32	うち業務の改善意見数 (H25)	6	0	0	0	0	0	0
196	32	うち改善意見に対する対応件数 (H25)	6	0	0	0	0	0	0
203	33	研修会・講習会等の開催件数 (H25)	5	0	0	0	22	3	0
207	33	研修会・講習会等の延べ参加者数 (H25)	247	0	0	0	1,431	61	0
211	34	研修者の延べ受入人数 (H25)	0	0	9	11	6	1	0
212	34	うち企業等技術者や地域産業担い手の受入人数 (H25)	0	0	0	0	0	1	0
213	34	うち大学等の学生の受入人数 (H25)	0	0	0	10	0	0	0
223	35	出願中特許等件数 (H25)	0	0	0	0	0	0	0
224	35	うち特許等新規出願件数 (H25)	0	0	0	0	0	0	0
267	39	視察者・見学者の受入件数 (H25)	81	－	－	－	－	－	－
271	39	視察者・見学者の延べ受入人数 (H25)	1,418	－	－	－	－	－	－

連番	項目番号	事項	農業本部	地域 G	作開	遺伝	生シ	農環	病虫
275	39	道民向けセミナーの開催件数 (H25)	0	0	0	0	0	0	0
279	39	道民向けセミナーの延べ参加者数 (H25)	0	0	0	0	0	0	0
283	39	公開デー等の開催件数 (H25)	1	－	－	－	－	－	－
287	39	公開デー等の延べ参加者数 (H25)	656	－	－	－	－	－	－
291	39	学会等役員・委員等件数 (H25)	1	0	1	1	14	14	12
295	39	国際協力事業等への協力件数 (H25)	4	0	0	3	3	1	0
353	44	道関係部との連絡会議等の開催件数 (H25)	5	0	0	2	8	0	0
371	45	市町村との意見交換等の開催件数 (H25)	2	0	0	6	0	0	0
389	46	外部機関等との人材交流件数 (派遣件数) (H25)	1	0	0	0	1	0	0
393	46	外部機関等との人材交流件数 (派遣人数) (H25)	1	0	0	0	1	0	0
397	46	外部機関等との人材交流件数 (受入件数) (H25)	0	0	0	0	0	1	0
401	46	外部機関等との人材交流件数 (受入人数) (H25)	0	0	0	0	0	1	0
429	49	ホームページの改修件数 (H25)	1	－	－	－	－	－	－
433	50	ホームページ更新件数 (H25)	49	0	2	2	9	0	13
437	50	企業等へ訪問し広報活動した件数 (H25)	0	0	6	2	0	0	0
441	50	メールマガジン発行数 (H25)	0	0	0	0	0	0	0
445	50	メールマガジン登録者数 (H25) ※通算	0	0	0	0	0	0	0
456	56	道民意見把握調査の回答数 (H25)	384	－	－	－	－	－	－
457	56	うち業務の改善意見数 (H25)	0	－	－	－	－	－	－
458	56	うち改善意見に対する対応件数 (H25)	0	－	－	－	－	－	－
468	56	関係団体等との意見交換等の開催件数 (H25)	2	0	0	2	17	1	0
492	59	国内研修Ⅱ (外部講師招へいによる職場内研修) の受講者数 (H25)	0	0	0	0	0	0	0
520	76	グリーン購入の金額 (H25)	1,616	－	－	－	－	－	－

平成 25 年度 農業研究本部中央農業試験場年報

平成 26 年 11 月 6 日

地方独立行政法人

北海道立総合研究機構 農業研究本部

中央農業試験場 発行

〒069-1395 北海道夕張郡長沼町東6線北15号

Tel 0123-89-2001
